

127  
2  
171

東  
人  
文  
鑑  
合

版  
權  
登  
錄

特 19  
65

No 9803

# 軍人文鑑

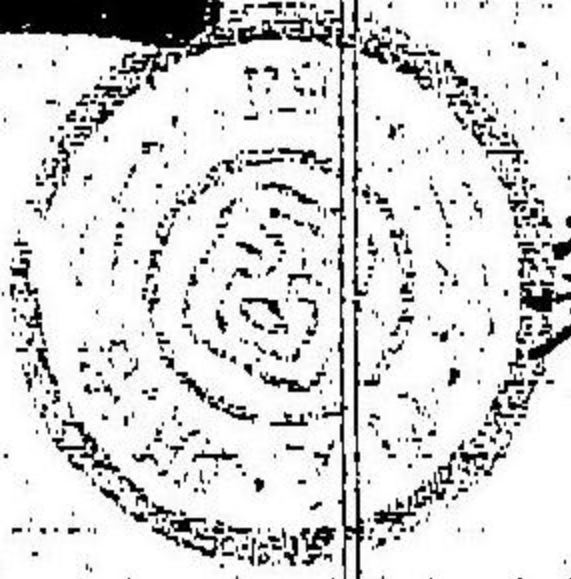
依田百川先生 批評  
三村佐山先生 校閱

相澤富藏 著

明治二十一年  
四月印行

厚生堂藏版

全



詔言

朕惟ルニ古昔郡縣ノ制全國ノ丁壯ヲ募リ軍團ヲ設ケ以テ  
國家ヲ保護ス固ヨリ兵農ノ分ナシ中世以降兵權武門ニ歸  
シ兵農始メテ分レ遂ニ封建ノ治ヲ成ス戊辰ノ一新ハ實ニ  
千有餘年來ノ大變革ナリ此際ニ當リ海陸兵制モ亦時ニ從  
ヒ宜テ制セサルヘカラス今本邦古昔ノ制ニ基キ海外各國  
ノ式ヲ斟酌シ全國募兵ノ法ヲ設ケ國家保護ノ基ヲ立ント  
欲ス汝百官有司厚ク朕カ意ヲ體ン善ク之ヲ全國ニ告諭セ  
ヨ

明治五年壬申十一月廿八日

我國の軍隊ハ世々天皇の統率シ給ふ所ニそある昔神武天皇躬つから大伴物部の兵ともを率ゐ中國のまつろぬものともを討ち平け給ひ高御座ニ即かせられて天下をめぐめ給ひしより二千五百有餘年を経ぬ此間世の様の移り換るに隨ひて兵制の沿革も亦屢なりき古ハ天皇躬つから軍隊を率ゐ給ふ御制ニて時ありてハ皇后皇太子の代らせ給ふこともありつれと大凡兵權を臣下ニ委ね給ふことはなかりき中世ニ至りて文武の制度皆唐國風ニ倣はせ給ひ六衛府を置き左右馬寮を建て防人など設けられしか兵制ハ整ひたれとも打續ける昇平ニ狃れて朝廷の政務も漸文弱ニ流れけれハ兵農おのつから二ニ分れ古の徵兵ハいつとなく壯兵の姿ニ變り遂ニ武士となり兵馬の權ハ一向

ニ其武士との棟梁たる者ニ歸シ世の亂と共に政治の大權も亦其手ニ落ち凡七百年の間武家の政治とはなりぬ世の様の移り換りて斯なれるハ人力もて挽回すへきニあらすといひながら且ハ我國體ニ戻り且ハ我祖宗の御制ニ背き奉り淺間じき次第なりき降りて弘化嘉永の頃より徳川の幕府其政衰へ剩外國の事とも起りて其侮をも受けぬへき勢ニ迫りければ朕ハ皇祖仁孝天皇皇考孝明天皇いたく宸襟を憫と給ひしころ忝くも又惶けれ然るハ朕幼くして天津日嗣を受けし初征夷大將軍其政權を返上し大名小名其版籍を奉還し年を経ずして海内一統の世となり古の制度ニ復しぬ是文武の忠臣良弼ありて朕を輔翼せる功績なり歴世祖宗の專蒼生を隣み給ひし御遺澤なりといへと

も併我臣民の其心は順逆の理を辨へ大義の重きを知れる  
 か故にころあれされに此時は於て兵制を更め我國の光を  
 耀さんと思ひ此十五年か程は陸海軍の制を今の様は建  
 定めぬ夫兵馬の大權は朕が統ふる所あれに其司々をころ  
 臣下は任すなれ其大綱は朕親之を攬り肯て臣下は委ぬ  
 へきものあらす子々孫々に至るまで篤く斯旨を傳へ天  
 子の文武の大權を掌握するの義を存して再中世以降の如  
 き失體なからんことを望むなり朕は汝等軍人の大元帥な  
 るをされに朕は汝等を股肱と頼み汝等も朕を頭首と仰ぎ  
 てそ其親の徳は深かるへき朕が國家を保護して上天の惠  
 は應に祖宗の恩は報いまいらす事を得るも得ざるも汝  
 等軍人が其職を盡すと盡さへるとは由るそか我國の稜

威振のさることあらに汝等能く朕と其憂を共しせよ我武  
 維揚りて其榮を耀さん朕汝等と其譽を偕しすへに汝等皆  
 其職を保り朕と一心になりて力を國家の保護に盡さん我  
 國の蒼生の永く太平の福を受け我國の威烈は大に世界の  
 光華ともなりぬへに朕斯も深く汝等軍人は望むなれに猶  
 訓諭すへき事ころあれいてや之を左に述へむ  
 一軍人の忠節を盡すを本分とすへに凡生を我國は稟くる  
 もの誰かの國は報ゆるの心なかるへき況して軍人たら  
 ん者に此心の固からてに物の用は立ち得へしとも思ひ  
 れず軍人はして報國の心堅固ならさるに如何に技藝は  
 熟し學術は長するも猶個人はひとしかるへに其隊伍も  
 整ひ節制も正くとも忠節を存せざる軍隊の事は臨みて

鳥合の衆も同かるへし抑國家を保護と國權を維持する  
 の兵力も在れぬ兵力の消長は是國運の盛衰なることを  
 辨へ世論も惑はず政治も拘らす只々一途も已か本分の  
 忠節を守り義の山嶽よりも重く死の鴻毛よりも軽しと  
 覺悟せよ其操を破りて不覺を取り汚名を受くるなかれ  
 一軍人の禮儀を正くすへし凡軍人は上元帥より下一卒  
 に至るまで其間も官職の階級ありて統屬するのみなら  
 す同列同級とても停年も新舊あれぬ新任の者の舊任の  
 もの服従すへきもの下級のもの上官の命を承る  
 こと實の直も朕か命を承る義なりと心得よ已か隸屬す  
 る所もあらずとも上級の者の勿論停年の已より舊きも  
 の對しては總へて敬禮を盡すへし又上級の者の下級

のものに向ひ聊も輕侮驕傲の振舞あるへからず公務の  
 爲も威嚴を主とする時の格別なれども其外の務めて懇  
 取扱ひ慈愛を專一と心掛け上下一致して王事不勤勞  
 せよ若軍人たるものとして禮儀を紊り上を敬し下を  
 惠ますとして一致の和諧を失ひたらんは嘗て軍隊の蠱  
 毒たるのみかぬ國家の爲もゆるし難き罪人なるへし  
 一軍人の武勇を尙ふへし夫武勇は我國にては古よりいと  
 も貴へる所なれぬ我國の臣民たらんもの武勇なくて  
 叶ふまじ況して軍人の職に臨み敵も當るの職なれぬ片  
 時も武勇を忘れてよかるへきかさぬあれ武勇はは  
 あり小勇ありて同からず血氣ははやり粗暴の振舞なと  
 せんは武勇とい謂ひ難し軍人たらむもの常も能く義

理を辨へ能く膽力を練り思慮を殫して事を謀るへと小敵たりとも侮らす大敵たりとも懼れず已か武職を盡さむこそ誠の大勇まのあれされの武勇を尙ふもの常々人よ接するの温和を第一とし諸人の愛敬を得むと心掛けよ由なき勇を好みて猛威を振ひたら果の世人も思嫌ひて豺狼などの如く思ひなむ心すへきことよこそ一軍人の信義を重んずへし凡信義を守ること常の道まのあれどわきて軍人の信義なくして一日も隊伍の中よ交りてあらんこと難かるへし信といふ已か言を踐行ひ義といふ已か分を盡すをいふなりされの信義を盡さむと思へし始より其事の成し得へきか得へからざるかを審し思考すへし膽氣なる事を假初し諾ひてよしなき關係を結

ひ後よ至りて信義を立てんとすれの進退谷りて身の措き所よ苦むことあり悔ゆとも其詮なき始よ能々事の順逆を辨へ理非を考へ其言の所詮踐むへからずと知り其義はとて守るへからずと悟りなれ速ま止るこそよけれ古より或の小節の信義を立てんとて大綱の順逆を誤り或の公道の理非よ踏迷ひて私情の信義を守りあたら英雄豪傑ともか禍よ遭ひ身を滅し屍の上の汚名を後世まで遺せること其例渺からぬものを深く警めてやのあらへき

一軍人の質素を旨とすへし凡質素を旨とせされの文弱よ流れ輕薄よ趨り驕奢華麗の風を好み遂に貪汚よ陥りて志も無下よ賤くなり節操も武勇も其甲斐なく世人に



爪はとぎせらるゝ迄に至りぬへじ其身生涯の不幸なり  
といふも中々愚なり此風一たび軍人の間より起りては彼  
の傳染病の如く蔓延し士風も兵氣も頓に衰へぬべきこ  
と明なり朕深く之を懼れて曷も免黜條例を施行し略此  
事を誠め置きつれと猶も其惡習の出んことを憂ひて心  
安からぬ故に又之を訓ふるるか汝等軍人ゆめ此訓  
誠を等閑に思ひそ

右の五ヶ條の軍人たらんもの暫も忽ますへからずさて之  
を行はんよ一の誠心こそ大切なれ抑此五ヶ條の我軍人  
の精神として一の誠心の又五ヶ條の精神なり心誠ならさ  
れは何如なる嘉言も善行も皆うへの裝飾にて何の用も  
かゝ立つべき心たは誠ある何事も成るものうかむ況ん

てや此五ヶ條の天地の公道人倫の常經なり行ひ易く守り  
易し汝等軍人能く朕が訓に遵ひて此道を守り行ひ國は報  
ゆるの務を尽さし日本國の蒼生舉りて之を悦びなん朕一  
人の憚のみならんや

明治十五年一月四日

御名

讀法

兵隊ハ皇威ヲ發揚シ國家ヲ保護スル爲メニ設ケ置カル  
、モノナレハ此兵員ニ加ル者ハ堅ク左ノ條件ヲ守リ違  
背スヘカラス

第一條 誠心ヲ本トシ忠節ヲ尽シ不信不忠ノ所爲アルヘ  
カラス

第二條 長上ニ敬禮ヲ盡シ等輩ニ信義ヲ致シ粗暴倨傲ノ  
所爲アルヘカラス

第三條 長上ノ命令ハ其事ノ如何ヲ問ハス直ナニ之ニ服  
從シ抗抵干犯ノ所爲アルヘカラス

第四條 膽勇ヲ尚ヒ軍務ニ勉勵シ怯懦ノ所爲アルヘ  
カラス

第五條 血氣ノ小勇ニ誇リ爭鬪ヲ好ミ他人ヲ侮慢シ世  
人ノ厭忌ヲ來ス等ノ所爲アルヘカラス

第六條 道德ヲ修メ質素ヲ主トシ浮華文弱等ニ流ルルノ  
所爲アルヘカラス

第七條 名譽ヲ尙ヒ廉耻ヲ重シ賤劣貪汚ノ所爲アルヘ  
カラス

以上掲クル所ノ外法律規則ニ違犯シ罪ヲ國家ニ得ルニ  
至テハ父祖ヲ辱シメ家聲ヲ汚シ醜ヲ後世ニ遺ス獨其身  
現在ノ耻辱ノミナラサルナリ況ンヤ重罪ノ如キハ各人  
天賦ノ公權ヲモ剝奪セラレ世ニ立テ人ニ接スルモ對等  
ノ權利ヲ得サルニ於テヤ名譽ヲ尙ヒ廉恥ヲ重ニスル  
ノ軍人ニ在テハ殊ニ戒慎ヲ加ヘサルヘカラス就中陸軍

刑法ハ軍隊ノ害ヲ爲ス者ヲ懲ス爲メニ特ニ設ケラル、  
 モノタルヲ以テ其刑モ亦頗ル嚴ナリ軍人ニシテ之レヲ  
 犯セハ嘗ニ本分ヲ誤リ軍隊ノ安寧ヲ害スルノミナラス  
 遂ニ世人ノ信用ヲ損シ陸軍ノ榮譽ヲ汚ス等其責更ニ重  
 シ平素自ラ戒飭シ決シテ違背スヘカラサルモノナリ

皇		嘉仁親王 明 宮		皇太后宮 御名夙子		今上天皇 御名睦仁	
宮	小	有	皇	皇	皇	皇	皇
御繼嗣 三品	御息所	御繼嗣 三品勳一等	御息所	御生誕	御生誕	御生誕	御生誕
依仁親王	頼 子	威仁親王	董 子	入 内	入 内	御元服	御踐祚
故一品邦家親王景十四 子今上天皇御養子	故從三位有馬頼成第一 女	故一品大勳位熾仁親王第 二子今上天皇御養子	故從四位溝口直博第三 女	嘉永三年庚戌四月十七日陽曆五 月廿八日	嘉永元年戊申十二月十五日	天保四年癸巳十二月十四日陽曆 一月廿三日	嘉永五年壬子九月廿二日陽曆十 一月三日
御生誕	御生誕	御生誕	御生誕	宣下	宣下	宣下	御即位
慶應三年丁卯九月十九日	嘉永五年壬子六月十八日	弘化三年丙午正月十六日	文久四年甲子二月 八日	宣下	宣下	宣下	慶應四年戊辰八月廿七日
袋町五番地	區駿河臺	東京神田	丁目二番地	東京	皇太后	宣下	大嘗會
				宣下	宣下	宣下	明治四年辛未十一月十七日
				宣下	宣下	宣下	慶應四年戊辰三月十八日
				宣下	宣下	宣下	嘉永六年癸丑五月七日
				宣下	宣下	宣下	嘉永元年戊辰十二月廿八日
				宣下	宣下	宣下	明治二十年八月三十一日



表較比國外並口戶國全

員人別族	口人數戶
平民	三千六百五十六萬三千四百七十六人
華族	三千四百三十人
士族	百九十四萬二百七十一人
澳地利匈牙利	三十八萬八千八百八十五年調查
佛蘭西	三十八萬八千八百八十五年調查
英合衆國	三十八萬八千八百八十五年調查
伊太利	三十八萬八千八百八十五年調查
西班牙	三十八萬八千八百八十五年調查
朝鮮	三十八萬八千八百八十五年調查
瑞典	三十八萬八千八百八十五年調查
白瑞	三十八萬八千八百八十五年調查
葡牙	三十八萬八千八百八十五年調查
和蘭	三十八萬八千八百八十五年調查
瑞利	三十八萬八千八百八十五年調查
布哇	三十八萬八千八百八十五年調查
丁抹	三十八萬八千八百八十五年調查

第一海軍區	第二海軍區	第三海軍區	第四海軍區	第五海軍區
橫須賀鎮守府	吳鎮守府	佐世保鎮守府	鎮守府未定	鎮守府未定
相模國三浦郡	安藝國安藝郡 吳港(未開廳)	肥前國東彼杵郡 佐世保港(全上)		

軍人文鑑序

何ノ處カ足ヲ踏ム深坑高壘何ノ處カ身ヲ置ク火陣刀林万馬洶湧旌旗千章硝烟空ヲ蔽ヒ礮響地ヲ撼カシ呐喊叱咤ノ聲遠近ニ震フ是時ニ當リテ笑テ快ト呼ヒ縱橫馳驅前後衝突朝アリテ夕ヲ知ラス死ヲ期シテ生ヲ圖ラス勁敵ヲ轉瞬ノ間ニ鑿殺シ以テ功ヲ一舉ニ収ム嗚呼亦快ナリ國因リテ以テ堅固人因リテ以テ安堵生キテハ勳章ヲ佩ヒ死シテハ祀典ニ列ス男兒生レテ軍人ト爲ル榮ト謂フヘキ哉然リト雖モ危機ニ先ダケテ一枝ノ筆禍ヲ未萌ニ防キ一卷ノ書戰ヲ未然ニ論シ以テ安寧ヲ謀リ以テ勝算ヲ制スルト夫ノ生死ノ場ニ當リ情緒ヲ父兄ニ告ケ心事ヲ知己ニ報シ懷ヲ述ヘ情ヲ洩ラストニ至リテハ皆文字ノ力ヲ假ラサルヲ得ス

蓋シ文藝武技ノ必ス相待ツハ猶車ノ輪ニ於ケル鳥ノ翼ニ於ケルカ如シ固ヨリ偏廢スヘカラス故ニ事苟モ文字ニ涉リテハ武夫健卒ヨリ智將勇士ニ至ル迄皆戈ヲ投シ甲ヲ脱シテ文門ニ降伏セサルヲ得ス若シ果シテ然ラハ軍人文鑑區々小冊子ト謂フト雖モ豈ニ高ノ必ス卑ヨリシ遠ノ必ス邇ヨリスルニ於テ小裨益ナシトセンヤ是余カ友相澤氏カ此著アル所以ナリ夫レ兵ハ精ヲ貴ヒ多ヲ要セス文モ亦然リ故ニ此編要ヲ摘ミ繁ヲ避ク若シ夫レ朝夕練習服務ノ暇披閱誦讀之ヲ學習シ之ヲ摸倣シ取リテ之ヲ施シ措テ之ヲ宜フスルハ運用ノ妙固ヨリ其人ニ存スト云爾

明治二十一年四月

高橋勿堂識

軍人文鑑

凡例

- 一 本書ハ軍人ニ於ケル普通日用文ヲ主要トシ他ノ雜體諸篇ハ附録ノ意ヲ以テ編入ス故ニ一ハ傍訓ヲ附シテ一ハ傍訓ヲ省ケリ
- 一 普通日用文ハ極メテ俗語適用ヲ要ス然ルニ今日普通ノ用文ハ實用上雅俗混淆セサルヲ得サルモノアリ因テ本書ハ雅俗彼此撰用點綴シテ並ニ妥當平易ノ字面ヲ適用スルコトヲ務メタリ
- 一 總テ往復文起結ノ語例ハ雅言甚多シト雖敢テ博採漫用セス務メテ慣行ノ文字ヲ撰用セリ專ラ用文運筆ノ自在ヲ主トシ不要ノ例語ヲ増スヲ欲セサレハナリ

一 一題ニシテ二文アルモノハ文筆運用ノ變化ヲ示スモノ  
 ナリ返書ハ總テ同題前文ト併觀スルヲ要ス  
 一 雜体諸篇文中ノ手批ハ字句ノ可ナルモノ論旨ノ可ナル  
 モノ事實ノ可ナルモノ皆之ヲ施コセリ但看官ノ各別ニ  
 之ヲ區別了闕セラレシコトヲ望ム  
 一 雜体諸篇評語ハ評語ノ体自ラ漢文ナラサルヲ得サルモ  
 ノアリ故ニ今特ニ漢語ヲ用ユ看官幸ニ諒セヨ

明治二十一年四月

著者識

軍人文鑑目次

日用文

○現役當籤を在隊の友人に報す	一	○徵兵検査期日を遠國の友人に報す	一
○入隊を報す	二	○入營後郷里の戸長并有志者に謝す	三
○親戚へ入營を報す	四	○喪を吊ふ	八
○朋友の死亡を其家に報す(其二)	七	○射的優等章拜受を報す	九
○右返事	八	○褒賞休暇を賜り歸省を報す(其二)	一〇
○昇級を報す	九	○朋友の病氣を父母に報す	一一
○上等兵拜命を報す	一〇	○朋友の逃亡を其家に報す(其二)	一二
○右返事	一一	○朋友の逃亡を其家に報す(其一)	一三
○右返事	一二	○朋友の看病歸省出願問合に答ふ	一四
○御巡幸供奉出張を報す	一三	○朋友の看病歸省出願問合に答ふ(其二)	一五
○右返事	一四	○右返事	一六
○御巡幸供奉出張を報す(其二)	一五	○友人の看病歸省出願問合に答ふ	一七
○右返事	一六	○右返事	一八
○友人の看病歸省を故郷に報す	一七	○右返事	一九
○再役志願父母に問合	一八	○右返事	二〇
	一九	○右返事	二一
	二〇	○右返事	二二
	二一	○右返事	二三
	二二		二四
	二三		二五
	二四		



○士官學校へ入校を報す	(其二)	二六	○海軍兵學校へ入學を勸む	(其一)	二七
○憲兵志願を勸む		二八	○教導團入學を賀す		二九
○右返事		三〇	○憲兵志願父母を問合		三二
○轉營を報す		三三	○天長節觀兵式を報す		三三
○右歸營を報す		三四	○野營演習出張を報す		三四
○右返事		三五	○公務負傷者を慰問す		三九
○病氣見舞	(其二)	四一	○父兄より在營子弟へ送物添書(其一)		四〇
○病氣慰問の返事	(其二)	四二	○病氣を父母に報す		四二
○婚姻を賀す		四三	○火災見舞		四四
○出産を賀す		四四	○婚姻報知の返事		四五
○友人の生男を賀す		四六	○出産報知の返事		四六
○暑中見舞	(其二)	四七	○新年を賀す	(其一)	四八
○右返事	(其一)	五〇	○右返事		五〇
○歳暮	(其二)	五一	○寒中見舞	(其二)	五一
○右返事	(其一)	五二	○右返事	(其一)	五三
		五四			五四
		五五			五五
		五六	○滿期歸郷と友人に報す	(其二)	五六

○一箇年現役志願者滿期を賀す		五七	○滿期歸後迎妻を在營の友人に報す		五八
○滿期歸後長官よ上る		六一	○點呼期日を友人に報す		六二
○陸軍兵出軍を家郷に報す(其一)		六三			六四
○陸軍兵鎮定を家郷に報す		六六	○陸軍兵外征出軍を家郷に報す	(其二)	六五
○海軍兵艦隊出軍を故郷に報す		六七	○海軍兵戰地より家郷に報す		七八
○陸軍兵海外へ進軍を報す		六八	○海軍兵敵地より友人へ報す		六九
○陸軍兵海外戰地より友人に報す		七一	○同友大捷を家郷に報す		七四
○海軍兵より凱旋を故郷に報す		八三	○郷人より武官の叙勳を賀す		七九
○右返事		八一	○現役兵志願を賀す		八五
○軍籍に在る者郷里子弟に現役志願を勸む		八六	○軍人文鑑を送られしに謝す		九一
○普法戰紀譯本借讀の禮狀		九二			

尺牘文

○友人に與フル戰ヲ論スルノ書		九四	○普法戰紀ヲ贈ラル、ヲ謝ス		九六
○友人ノ士官學校ニ在ル者ニ與フ		九八	○友人某ニ與フル時事ヲ論ズルノ書		九九
○西郷隆盛ノ紀念碑ヲ建設スルヲ勸ム		一〇一	○海外へ派遣軍艦乗組員ニ與フ		一〇三
○戰地負傷治療者ヲ慰ム		一〇六	○兵役滿期歸郷者ニ與フ		一〇七
○軍備擴張ヲ人民ニ勸告ス		一〇八	○隊長ヨリ滿期歸郷者ニ與フ		一一〇
○滿期歸郷後友人ニ與フ		一一〇	○勳章ヲ賜ハリシ人ヲ賀ス		一一一

目次

○教導團ニ入ル者ニ與フ	一一二	○陸軍大學ニ入ル者ニ與フ	一一三
○海外派遣軍艦ニ搭載スル者ニ與フ	一一四	○海外留學生ニ與フ	一一五
○從軍者ニ與フ	一一六	○凱旋ヲ賀ス	一一六
○人ニ兵役志願ヲ勸ム	一一七	○人ニ再役ヲ勸ム	一一八
○兵役満期ノ勞ニ酬ユルヲ人民ニ勸ム	一一九	○教師ニ與フ	一二一
○兵役満期後所屬隊長ニ奉ス	一二二	○友人ノ新婚ヲ賀ス	一二二
○海防費ノ献金ヲ勸ム	一二三	○入營前友人ニ與フ	一二五
○郡區内ニ兵事會議所ヲ設置スルヲ勸ム	一二六	○兵役中ノ人ニ與フ	一二七

記事文

○不忍池龍馬ヲ觀ル	一二九	○佛國セタン城ノ大敗	一三一
○伏水ノ戰	一三三	○上野ノ戰	一三四
○若松城ノ降	一三六	○白虎隊十六士死節ノ記	一三七
○熊本圍城	一四〇	○春日山古戰場ヲ過ク	一四二
○白川ノ古戰場ヲ過ク	一四三	○外國兵ヲ敗ルヲ夢ム	一四五
○小松内府ノ圖ニ題ス	一四六	○烈女竹子畫像ノ記	一四七
○那破翁ノ傳ヲ讀ム	一四八	○冬夜兵書ヲ讀ム	一四九
○觀兵式	一五一	○靖國神社ノ祭典	一五三
○露營ノ記	一五四	○冒曉敵ヲ襲フ	一五五

○海軍兵操舟演習	一五七	○水雷火ノ布設	一五八
○函館港避暑艦隊操練ヲ觀ル	一六〇	○横須賀造船所遊覽	一六二
○輿地全圖ヲ觀ル	一六三	○砲兵廠内後樂園ノ記	一六五
○梅ヲ觀ル	一六七	○秋日楓ヲ觀ル	一七〇
○二洲橋煙火ヲ觀ル	一七一	○某湖涼ヲ納ル	一七二
○上野ヨリ日光ニ至ル途上ノ記	一七三		

論說文

○馬上政策	一七五	○日本刀	一七八
○兵備擴張論	一七九	○自由論	一八一
○幸福論	一八二	○立志論	一八三
○英雄論	一八四	○漢高祖	一八五
○源賴朝	一八六	○西鄉隆盛	一八七
○希望ノ說	一八八	○習慣ノ說	一八九
○苦ノ說	一九〇	○樂ノ說	一九一
○忍耐ノ說	一九二	○尺蠖ノ說	一九三

祝文

○聖駕兵營ニ臨幸セラル、ヲ祝ス	一九四	○皇后陛下軍艦内へ全斷	一九五
○軍艦築造ノ落成式	一九六	○佐世保鎮守府ノ開廳式	一九七

目次

○下士集會所ノ落成式

二〇〇 ○射的場ノ落成式

二〇一

祭文

○楠公ヲ祭ル

二〇二 ○會津藩士戰死者ノ墓ヲ祭ル

二〇四

○瀛船「ノルマントン」遭難諸子ヲ祭ル

二〇五 ○戰死ノ友人ヲ祭ル

二〇六

○僚友ノ病死セシヲ祭ル

二〇八 ○父ヲ祭ル

二〇九

○弟ヲ祭ル

二一〇

報告文

○海岸防禦準備整頓報告

二一一 ○某港内測量報告

二一二

○航海中人員跌落ノ顛末

二一三 ○暴風ニ遭會シ桅檣毀損ノ報告

二一三

○鐵艦數隻襲來ノ報告

二一四 ○對抗運動實況報告

二一五

○敵軍實況探知報告

二一六 ○敵壘襲撃ノ報告

二一七

○援兵派遣ノ報告

二一七 ○暗語ヲ先隊ノ士官へ告ケ旅團本部へ復命報告

二一八

尙武論

○尙武論第一 總論

二一八 ○全 第二 本論上

二二三

○全 第三 本論中

二二五 ○全 第四 本論下

二二八

○全 第八 結論上

二三一 ○全 第九 結論中

二三四

○全 第十 結論下

二三七

目次畢

軍人文鑑

三村邦功 閱  
相澤富藏 著

○現役當籤を在隊の友人に報す

零陳御海容然れり小生儼何月何日之抽籤に於て現役は相當り候未だ何所入營の不相知候へ共御同様國家保護之兵員に相成候と付不取敢御報申上候入營之上自然拜顔之節茂有之候に、貴殿は先入諸事御案内之儀に付宜敷御手引之程願上候右御依頼旁御通知迄草々

○徵兵検査期日を遠國之友人に報す

郵信謹呈貴殿何藝御脩業之爲め某御地へ遙々御出向以來最早一年半の相成定て御上達之程奉想察候然るに兼て御承知之通

本年の徴兵御適齡之所愈何月何日身体検査有之に付夫迄の  
 歸郷在宅相成様戸長殿被申達候貴殿の素より兵役御志願有  
 之唯体格合否確定迄之御見込にて御遊學之儀も候へり只今歸  
 郷被成候共半途廢業之御不都合の有之間敷萬一失期徴兵令之  
 違犯者と相成候へり大不都合之儀も付期日迄の是非御歸郷  
 相成度此段御通知申上候也草々頓首

○入隊を報す

其一

一翰拜呈陳の小子儀去る何日何營所何兵何聯隊何中隊へ編入  
 相成候扱て兼々御教命も有之私精神の報國の丹誠專一にて紀  
 律嚴肅の素々覺悟の事も罷在候處入營後實地一覽仕候得ハ流  
 石も軍隊の紀律の人の難堪様なる苛則も無之嚴肅との全く起

臥飲食等節制の宜きのみ小子輩の在營中幸も此紀律通りの慣  
 性を得候は、免役歸郷の後ハ品行の一助とも可相成奉存候又  
 兵器之精美倉庫の壯麗等と一覽仕候得ハ壯氣頓と相増し未だ  
 何一藝も卒業せざるも武夫干城の心地も相成一層の愉快を覺  
 候其他營中の景況も未だ詳知不致候間猶後便緩々可申上先ハ  
 入營の御報のみ草々如此御座候恐惶頓首

其二

一翰捧呈仕候先以御祖父様始め御一同御壯榮之段奉欣賀候小  
 子も道中無恙昨幾日午後二時到着直様入隊致候間御安心被下  
 度候出立之際懇々御教諭之趣ハ屹度可相守御心配被下間敷候  
 右入隊御報知而已早々謹具

○親戚へ入營を報す

尺書拜啓私儀何月何日入營相濟其節不取敢宅本へ及通報候  
 へ共入營當坐は諸事不案内唯々見る物聞く物珍敷新敷も喜驚  
 紛錯のミ殆ど夢中も打過き何方様へも一書不差出意外之御疎  
 潤仕候段不惡御恕容願上候扱習慣は早き者よて入營後僅一ケ  
 月餘も候へ共最初珍新と存候事も最早日常も相成今更其陳は  
 些陳腐と覺候へ共營中景況之大畧申上候當本營の東西何間南  
 北何間之煉瓦二階造一棟何間何間之途家幾棟倉庫幾棟にて門  
 前入口より營内地構廣潤として一望頗る壯觀も候營内の幾室  
 よも區分し事務又の屯宿所も爲す屯宿の一室何人を常規とし  
 卓子椅子を列置し諸用向飲食迄爰よて相辨し寝る時の寢臺に

就く等は迄之坐上住居と事變り候り申迄も無之起臥飲食掃  
 除より診斷點呼操練に至る迄夫々時間嚴整も候へ共皆喇叭の  
 號聲よて相分り聊も面倒之覺無之候被服帽子襦袢靴之類の其  
 定期毎も御支給の事も候糸針鉄櫛此五品は軍人必需之要品  
 と古兵法に有之趣承及候處鑷の今世不用の爲哉御渡無之候へ  
 共營内も浴室洗濯場も有之石鹼迄御分配相成日用品の不自由  
 無之候又營内も酒保と申す酒飲所有之私共新入兵の生兵と稱  
 し日々何時間体操演習の業務も就餘間も一杯を傾け候も差  
 支無之候病氣之節の輕症は病室重症の病院よて治療被成下御  
 扱御向手厚に付御心配被下間敷候戰友は四名の定めよて疾  
 相扶け怠惰相誡め互も親睦致し戰時の心掛よて奉務罷在候猶  
 五

營中隊伍の編制操練の規典等御報道申上度事も有之候へ共長  
文と相成候付後便に譲り目下自身直切は關係の事項のみ大畧  
申上候某々君へ別段書面不差出候間御序は御通示願上候右  
の入營の御報旁可得尊意漫筆如此御坐候願首

○入營後郷里の戸長并有志者一謝する文

一翰恭呈秋冷逐日相寡候處先は皆々機益御安健被爲渡杯躍奉  
賀候隨而小生儀道中無異昨何日着營本日何隊へ組入相成候條  
御安心被下度候扱現役當籤之上は國家へ差出之身よて世間よ  
可畏物は無之心得は候へ共諸事不案内之爲め瑣小之手續等兎  
角氣遣勝且出立之際は自然離別之情も有之候處御役柄丁寧之  
御差圖及諸君獎勵之御詞よより一點之旅愁なく出立胸中晴々

と着營仕候段幾重よも難有奉謝候此上は堅固精勤必ず不貞諸  
君之厚意様可仕御心配被下間敷候右愚誠謝意迄拜布願首

○朋友の死亡を其家一報す

其一

急信拜啓某君御事御病氣の儀は兼て及御通知置候處御養生不  
被爲叶終は昨何日何時御逝去本日何時何所へ埋葬相濟候某君  
忠勇の氣象は私共平素敬慕する所は有之方一非常は際し軍人  
の本分を盡し戦死被成共痛惜難堪事は候處其儀も無之幕上  
の病終は御本人の遺憾は勿論私共の悲嘆哀惜は申様無之候御  
宅様も而は満期近き某君の事なれば定めて御歸郷後營業の御  
計畫も被爲在候處夫れも晝餅は属し又同君御所持物の近日御  
廻し相成筈に付御落手候は夫れ是れは付一層御愁傷の程は

想察申上候乍去御入院中治療攝生上ノ手落無レ之ハ私共御臨終迄御見舞申上儘見認候事付責て夫れ丈け御慰心被下度右拜吊旁爲御知申上候涙筆不盡

其二

急郵令ニ啓達候然ハ令息某殿御事先月より御病氣相發シ某病院へ入院御治療中之處療養不被爲叶昨夜十二時御死去相成何共御氣之毒之段申上様も無御坐候何卒此狀着次第御出向相成候様致度此段可得貴意及御急報候也

○右返事

御郵書拜見某儀長々病氣之處終ニ死去の趣爲御知被下揮涙拜承仕候御上の治療御手厚及諸君の臨終迄御見舞被下候段ハ感

謝申迄も無之候へ共殊ニ何寸長も無之豚兒へ諸君の厚き御吊詞ハ尤も難有奉存候右御禮旁及拜復候也哀餘亂筆草々不倫

○喪を用ふ

御老父様御儀永々御病氣之處終ニ御療養不被爲叶昨夜御死去被遊候趣聞及驚入候御家内御一同無々御愁傷之程奉推察候何れ參堂御弔可申上候得共不取敢御悔み迄如斯御坐候不乙

○昇級を報す

略啓何年月入營の私共一同此度何等卒ニ昇級仕り袖ハ徽章一線相増候右一線の爲大ニ勢を得て此上一層精勤何等迄ハ是非進取の氣込ニ相成候等級の勢力ハ奇妙ある者ニ候右御吹聴迄乍々端書草々

○射的優等章拜受を報す

一書恭呈陳ハ劣生儀今般射的優等章頂戴仕候一技之優等可誇  
迄無之候得共何藝ニ依らす等級ニ就ては試験官之爲め少々之  
幸不幸有之様不平異論ハ時々聞及候所射的之一事ハ發射毎之  
中否点數ニ依り優劣判然衆目一視異論之唱様無之優等ハ正  
的中之優等ニ付諸藝之等級も斯く判然致度者ト聊自慢仕候毎  
度軍人之勝氣御一笑被下度右披露申上候也不備

○上等卒拜命を報す

其一

拜啓私儀本月何日上等卒拜命仕候上等卒ハ一分隊之事務ト擔  
任し時宜ニ依り下士之代理仕る事も有之御扱向ハ畧下士同様  
ニ御坐候不肖之私珠ニ疎暴之性質少々たり共人上ニ立ち取締

りめきたる儀ハ氣遣ひの至ニ候へ共辭退も難ニ相成事ニ付難有  
御請仕候右ハ楊々々御吹聴申上る迄ニ無之候へ共平素私性質  
御承知ニて失行無之様御懇規を煩ハし候ニ付御安心の爲め身  
分務柄の大畧申上候のみ宜敷御恕了願上候也願首再拜

其二

以ニ郵便素簡啓上致候小生事入隊以來專心御奉公相勤め罷在候  
處此度御撰扱相成上等卒拜命仕候隊中ニ於て頗る名譽之儀ニ  
付御一同様御喜び被下度右御披露申上候恐惶頓首

返書

何月日之御郵便拜披上等卒御拜命之一句ニ接し既ニ欣然至慰  
此事ニ候處御身分務柄之荒増も承了仕り讀一讀下文ニ至り候



へハ謙抑の情ハ紙上ニ溢レ行末願モ敷キ殊勝之御心掛け敬服  
之外無ニ御坐一候因テ此度御身之御昇級ハ勿論志尙品行之御上達  
迄取束御祝申上度吐誠如此御坐候此上益々御修進之程祈上候  
也拜復

○褒賞休暇を賜り歸省を報す

其一

寸著謹上私儀昨年何月入營以來身体無恙且幸に輕達之所罰も  
蒙らず無事精勤仕候爲め褒賞として二週日間休暇を賜り候  
就てハ何日當地出發何地迄瀛車ニ乗ヒ夫々歩行何日頃歸着之  
都合ハ候右ニ付爲念一句申上候ハ世間之風習ハ依り久振の歸  
省とて何か珍味の御用意難計候へ共私等在營中美食ハ打過ぎ  
候郷地ハ兼て鮮肉ハ乏しき處強て高價の腐敗物御求ハ難有迷

感之氣味ハ奉存候夫々第一ハ嚴慈御揃之温顔を拜し併て親戚  
之情話ハ接し候へ者菜羹蔬汁も牛炙魚膾ハ可相勝と心魂飛揚  
之樂ニハ罷在候間珍味等ハ必ず御用意被下間敷其邊親戚中へ  
も御通示被下置度候在營中種々面白き物語ハ紙上難盡歸着之  
上萬々可申上候右ハ賜休暇並ニ歸發等の御通報迄草々誠恐拜  
具

其二

尺牘呈上仕候時下春暖之候愈御清適奉恭賀一候然者小子事職務  
大切ハ相心得隊中之規律ハ背き候事無レ之他人之模範とも相成  
可申趣御褒詞ハ預リ此度歸省之休暇御許相成候に付來る幾日  
當地發足可仕候書余ハ恩顔を拜し縷々申上度存候右御報迄草

々恐々

○朋友の病氣を父母に報す

急郵拜啓某君御事何月何日何症御發病最初は輕病に候處何日方非常大暑の爲め蹉跎し昨今は餘程重病に相成何日より入院御療治中候戰友の私共交々御見舞申上心配之餘り軍醫某氏へ問合せ候處目下の處にては變症の模様も不相見大概は全愈可相成候へ共尙分疲勞強き趣に候就而は御父兄方の内御來營相成り一に同君の御氣慰め一に病体御熟視の方可能然被存候に付私共協議を以て御通知申上候也專用不備

○返事

何日付の御郵書拜見次男某重病の趣御通知被下難有拜承仕候

即日愚息某此地出立何日何時頃着營其御隊へ出頭可仕候間不案内の田舎者宜敷御差圖願上候御厚情に段々同人舌頭にて方々御禮可申上右不取敢御返事申上候也頓首

○朋友の逃亡を其家に報す

其一

前文畧御容捨陳は某君儀何日御出營の儘逃亡被致其筋に於ての嚴密搜索の趣に付不日追捕處刑可相成候尤も自首歸投の者は處刑も幾分か輕減相成趣に付御承知有之度候扱疾病相扶け怠惰相戒しむるは私共戰友の通義に付大概の過失は互に警戒して飽迄盡力可致候へ共逃亡の一事に軍人身上に有之間敷鄙劣の所業として警戒の限に無之候乍去是迄戰友之好を以て前文の儀及御内通候に付若し同君御歸宅も候に、御嚴責の上速

よ自首の御取扱有之度候方一姑息の慈憐と以て温言慰藉因循  
潜宿等の儀有之候而の國家に對し不相濟候に付篤と御注意  
有之度是亦爲念及に涉忠告候也不備

其二

拜陳貴息某殿御儀昨夜逃亡被致其筋にての所々御搜索中ふ有  
之候得共今より行衛相知れ不申候何等之間違より脱營被致候哉  
の存じ不申候得共自首歸營餘り延び候ての次第より罪を重ぬる  
譯故若し御歸國も相成候の早速御届け相成候儀致度御忠  
告申上候要用而已不備

○右返事

御郵書拜披何男某脱營逃亡に付自首歸投の儀迄御内示被下辱

了承仕候拙者も只今は農業に従事罷在候へ共元何藩の士族に  
有之如何よしして箇様なる鄙怯の兒子出來候哉先祖へ申譯無之  
鄰里へも面伏の次第に付手討に致度候へ共今世の左様の儀も  
難に相成候に付見當り次第届出相當の御處刑奉願心得候姑息  
慈憐云々の御忠告の口惜敷又難有感誦仕候願首敬復

○御巡幸供奉出張を報す

其一

寸翰謹啓此度某地方御巡幸被仰出候處供奉兵の當隊に被仰付  
候旨御達相成候兵士の常より營外出張を喜び野營演習もても長  
途行軍もても屈指渴望若し相外れ候節の頗る落膽の事候處  
此度當隊の供奉に當り候に實に望外の幸事一同の喜躍御察可  
被下候に往年某道御巡幸の節に御同様何驛迄遙々出掛け拜覺仕

候處這回の供奉の一部も列し畏くも我が皇大君も御供奉りて  
御國內を巡回仕候は冥加至極難多得の幸事も奉存候何日御發  
筆何日頃御還幸の趣も付道中聞見の奇談は歸京の上万々可申  
上先は幸事の御報道迄走筆如此御坐候願首

其二

急信拜呈然バ本月聖上京都御巡行も付供奉被仰付生來始ての  
快事も奉存候殊も西京への小生未だ一遊不仕候得者種々珍奇  
之事共見聞可致と今より想像樂み居候道中筋筋駐輦之傍摸樣  
等ハ其時々傍報道可申上先ハ取急傍報迄早卒願首

○右返事

拜見然れハ此度某地方傍巡幸の供奉兵其傍隊へ被仰付ハ旨如レ

命難多得の幸事ハ喜躍の程奉察ハ我々共ハ私用の爲め三四十  
里の旅行致しハも莫大の入費相かハりハ處貴殿ハ傍上賄もて  
何日間悠々の傍旅行ハ榮旅と可申實ハ羨敷奉存ハ傍道中の奇  
談も澤山も可有之レハ歸京の上承度今より樂も罷在ハ猶申上る  
迄も無之ハ得共傍旅行中傍自重の程奉祈リハ不具

○友人之看病歸省出願問合ハ答

龍章拜披尊大人傍大病も付看護歸省ハ出願被成度傍問合の趣  
致了承候平素奉務篤志の貴君容易に歸省傍出願ハ有之間敷此  
度の儀ハ万々不得ハ已傍事也ハ奉察ハハ共折角の傍問合も付一  
應愚存申述ハ一旦兵員も加リ國家保護の大任も當りハ上ハ始  
終戦時の心得もて奉務可然被存ハ戦地より歸省出願之例ハ未

だ不承及以昔し支那に於て父謀反したる時は如何進退すべき  
 やの問題の義從其居と論斷ありし由承以即ち君の方を在る時  
 の君を從て父と戦ひ父の方を在る時の父と共に君を抗するの  
 意味に以本朝の如き君臣の義嚴正なる國に於ては是等の論も  
 無用なるべく且貴君の由問合の看病歸省迄の事よて父謀反の  
 騒ぎに無之候へ共家事國事輕重の關係よは戰時奉務の心得よ  
 以て此論を以参考あらば判斷の涉一助共可相成奉存候尤も戰  
 時の心得とい乍申流石も眼前の戦争も無之よ親の大病の難  
 事は候へば聊も由差止り不申上は問可然は熟考之上は決策相  
 成度由問答旁愚衷及三拜布也頓首不具

○友人の看病歸省を故郷に報す

謹啓何村の誰義私入營後不斗懇親相成以處此度親病氣の爲め  
 歸省願濟去る何日出立何日歸宅の筈よは同人の平素忠勇の氣  
 概あり容易に歸省等の不致人物よ付此度の親病氣は餘程危篤  
 の事と被察以然れば只今の衣不解帶目不交睫晝夜看護の場合  
 よて外出等は一切有之間敷よは付乍畏態と涉尋何品成見舞涉  
 遣し被下度以扱小子も最早一年餘在營罷在一日ふりとも歸省  
 膝下よ侍し歡を奉し度以得共一旦兵士と相成以上は身を君よ  
 捧げたるものよ以得者定期中の可相成褒賞休暇の外歸省無之  
 儀仕度候間別而由身の上涉大切よ涉保養奉願以誠恐謹具

○教導團入學を父母に願ふ

其一

一 翰啓上仕に先般某氏歸省の節私義最早滿期相成よ付教導團

に入學仕度傳言申上ハ處僅カ三年之奉務マテ家業嫌厭ノ心マ  
 相成彼是口實ヲ設ケ在營ノ工夫致ス様ニテハ今後更ニ何年間  
 経ハ如何可相成哉一旦國民之義務相濟ハ上ハ速ニ歸郷可致  
 様涉嚴諭ノ趣謹テ拜承仕ハ疑團ハ涉尤ハ共私精神も少  
 々ハ了解被下度乍畏猶又一應申上ハ私最初入營之際ハ國民  
 ノ義務ハ兎も角も是非一度ハ實地戦争致度精神ノミハ必  
 然ルヨ三年ハ空數經過シ此際歸郷ハ豫後備員トナリ万  
 非常ノ節假令ハ涉徵集あるも現役兵操出後ノ留守番ト可相成  
 殘念ノ次第ハ依テ此上ハ教導團ハ入營シ永ク軍事ヲ奉務之  
 外無之ト見込ハ次第マテ決して家業嫌厭ノ譯ハ無レ之ハ若シ該  
 團卒業奉務年限中ハ戦争無レ之ハ節ハ國家ノ幸福一身之不幸ト

斷念歸郷可仕ハ間何卒此度之志願ハ是非涉許被下度偏ハ奉  
 願ハ恐謹上

其二

愚札捧呈仕ハ先ハ涉兩親様益涉清康ノ段不斜奉賀ハ然バ小子  
 事今度教導團ハ入學仕度其心組マテ勉強罷在ハ得共ハ兩親様  
 之涉意見如何ハ伺申上ハ右入學試験ハ來月幾日ハ有レ之ハ付  
 至急ハ許容之吉報ハ接シ度奉待ハ當用謹具

○右返事

郵便披閱是非教導團ハ入學致度趣致承知ハ先般實ハ其元前途  
 營業上ノ見込有レ之入學見合せハ様申遣ハ共左迄戦争熱心ハ  
 ハ強テハ差止不申ハ付隨意ハ進退可被致ハ乍去歸郷之節

營業上不都合有之共後悔不致様可心得此段屹度申聞置也裁  
答不備

○再役志願父母の問合之文

寸翰恭啓仕の隙の私儀來る何月満期除隊可相成ひ就ての芽出  
度歸郷可仕所二等軍曹拜命以來の未だ一ケ年の奉務不仕の  
付更も再役出願仕度の大概の許被下事と奉存ひ得共思召の  
程難計の付友人の一言を申上ひ友人某昨年中再役之儀と故郷  
へ問合ひ所返書も義務相濟以上の速に歸郷可致尤も涉上より  
涉差止の義のいひ、鬼も角も自分より出願再役の無用と被申  
越ひ成程一應尤の儀のいひ得共軍人の氣象の仲々左様の譯も  
無之一旦詔勅拜誦銘肝の上の國事の如く相成義務さへ

濟めは如何にても宜しと申す氣は一切無之最も夫よて戦争も  
相成事よ戦争の際し義務の爲め砲聲一發と申す様よての所  
詮戦争の難致の然の再役も上より差止の無之共選抜の恩意  
に對し自分より出願聊表寸誠度は軍人通常の氣概と涉亮察被  
下度の最も家業上絶て涉不都合有之のいひ、歸郷も可仕ひ得共  
大概の事の涉縁合被下度の右出願期日も涉坐の問可成速に涉  
報被下候様は願旁奉伺ひ也誠恐拜布

○右返事

郵信接手最早満期の比に付定て除隊歸郷之報ならんと披見候  
所再役之申越は案外の至致候然候且家業上も少々不都合有  
之候得共豫防の爲め友人の一言を被申添候ての當方より差止

の文句無之候扱々其方も二三年間、知慮上達否な伶俐進歩の  
致感心の乍去書面上報國の義氣の備有之様見認めに付再  
役の義は強て差止不申家業の不都合も如何様にか縁合可申  
間存意通り出願可被成し期日も有之趣、付當用裁復迄如此  
草々

○士官學校へ入校を報す

以手紙申上し然ば迂生事兼て士官學校志願有之日夜勉強罷  
在、此處今度寸功相顯れ入校試験及第一段迂生が身取り雀躍  
不斜貴兄も先々此安心被下度取急報而已如此余の後便  
纏々可申述し

○海軍兵學校へ入學を勸

其一

前夜は大失敬偏に謝々其際官立校へ入學の涉談、付海軍兵學  
校へ入學有之度様申上しへ共一時の雜談、留意如何と存じ  
更、具陳仕し本邦の四面海、界し英國と同様海備最要の地勢  
海備さへ充分なれば、内、高枕外の雄視自由の國なるは一般の  
通論、然るに往時の鎖閉の世、この乍申商船、大船は製造  
禁令あり海備皆無、多年昇平打續し、眞の僥倖今日より見  
れば、寒心の次第、其餘弊の維新後、至ても急、難除海備急  
要、この乍知も人氣の兎角に陸軍、偏し海軍志願者、其甚だ  
い所政府、於て漸次擴張被遊、殊、數年來、尤も銳進之勢、  
て國費多端、も拘り、巨金を抛ち、大小船艦、毎歲、新造相成  
逐、昨年海防費、献金之御登令、も有之程、いへば人氣も自然之



傾向し海軍志願も逐年増加し試験も容易と難得及第に至  
 り先國家の大賀此事より去陸軍士官學校志願者程も増加  
 無之の兎角陸軍志願の餘習を遺存する様被疑い今日兵備急務  
 の折柄文華と捨て武事と就く何れも愛國有志の士よ共  
 取分け海軍の急務中の急候へ其志願者も有志中の有志と  
 も可申被存貴兄の愛國丹心の平素熟知罷在候も付此度御志  
 願の是非海軍の方より決有之度獨り貴兄のみも無之貴兄の御  
 首唱を以て御同熱諸君に申合せ一同海軍志願の見込めて勉強  
 有之様仕度杞憂之愚生國家の爲め此段に勧め且に及り依頼候  
 也願首

其二

尺書拜呈仕に貴兄愈々無事勉強の段恭悦も存然バ日外  
 咄申上は海軍兵學校入學試験の義愈來る何月施行相成趣も  
 て小生が友人中も右志願者殊の外多く有之一同勉強致居候  
 貴君も國家の爲め御奮發の如何別紙入學試験課目差上候も付  
 御熟覽被下度右涉勧め申上度涉通知如斯候也敬白

○教導團入學を賀す

先般は志願被極候教導團入學の儀愈何日試験済は入團の由奉  
 賀候台兄の才學兼備と以て入學の固より容易の事候へ共試  
 験の出來不出來あり殊も沈着家の兎角不出來勝の所台兄沈着  
 の涉氣質平素承知故万一如何と聊も心配罷在候處先々安心仕  
 候入團後凡そ一年程學術修行卒業の上は精神力次第にて士官

學校陸軍大學の試験と全ふし尉官將官と順次上達此度の  
参入團まで前兆相見候然れハ將來幾度の賀狀奉呈可致哉不相  
知先此度の戦争ならハ初陣の初勝と見做し拜祝如此候也

○憲兵志願を勸

拜啓陳ハ貴兄外某々數君兼て兵役所望の所此度抽籤ハ外れ  
別ハ軍務奉職被成度ハ思案中の趣致傳承候ハ付横合より乍失  
敬愚見申進候諸君の英俊を以て兵務ハ所望ハ候ハ士官候補生  
ハ志願可然候然るハ差當り受験の學力無覺東候ハ他に参思  
案を費さんより直ハ憲兵ハ志願の方得策と被考候憲兵ハ陸軍  
中特別上流の兵種ハ有之平時ハ一般風紀の監督ハ關シ職掌粗  
巡查ハ似て違註等の細事ハ關せず非常ハ際ハ戦地ハ在る時ハ

地方一般ハ取締ハ任し頗る樞要の地位を占む實ハ憲兵名稱ハ  
通り古之所謂紀綱兵ハ候尤も樞要の兵ハ付ハ採用ハ成規之試  
驗有之候得共士官學校程の學力ハ不及諸君の如き普通學界涉  
之方ハ何ヶ月位の勉強マて受験差支無之目下志願人澤山有之  
候ハ共多くハ文弱の窮書生等マて諸君の如き實地強武者ハ甚  
だ乏敷哉ハ候ハ其邊ハ試験官も随分ハ鑑別可有之被存候ハ  
採用の上ハ奉務現役年限七ヶ年ハ付其間ハハハ勉強次第相應  
の参昇進も可相成萬一非常の變ありて絶倫の参勤有之節ハ不  
次の参抜擢申迄も無之候諸君の思召ハ如何随分ハ志願も宜敷  
ハ無之哉諸君の英俊強武實ハ憲兵適當の人材を以て万一方向  
参取違被成候てハ國家の爲め遺憾の心地仕候儘不願不肖ハ異々

も涉勸申上候段不惡涉洞察篤と涉聽容の程願上候也頓首敬白

○憲兵志願父兄の問合

寸翰恭啓仕候朝暮炎涼不定の時季先の涉起居益は清榮謹て奉賀候次は私儀無異勉強罷在候間乍畏涉休念願上候然に兼て申上候通私儀教導團入學若くは巡查志願の見込にて上京仕り數學漢學修業罷在候所此度志向相變し憲兵志願仕度候憲兵の治安保護の爲め被設陸軍中最上の兵種にて本部より各管區に分屯所は設置有之鞍門は哨兵を張る兵營同様に候へ共鎮台兵と違ひ人民一般の檢非に關し巡查の如く違警罪等の細事迄は關涉不致全く巡查兵隊間に立つ一種特別の兵務は候右志願涉採用相成候の満足と思召被下事とに奉存候得共奉務年限の長

引く爲め一應奉伺候右に申願の豫期も有之候は附は異存の有無可成速に被仰越候様奉願候専用拜陳

○右返事

郵便接披然らに憲兵志願被成度旨致承知候當方の時情不案内の事は付憲兵の儀申越の通は候は差支無之に附出願可被成候奉務年限も長く候得は其間より相應の昇進相成様勉強有之度候拙者も追々老境に近寄候間行々の家計の一助相成様被心掛度裁答旁是亦申入置候也不悉

○天長節觀兵式を報ず

一筆申進候然に去る三日天長節は付例の通聖土より觀兵式被爲行親しくは慰勞の詞を拜せ一同感涙仕候當日は殊に快晴

は候故縦覽の者四方より群集致し中々の難沓に有之候別紙觀  
兵式概圖差上候は付涉覽可被成候ハ盛事の一端ハ了得可  
相成奉存候早々不一

○轉營を報す

肅啓營隊儀何營所へ分遣の涉達有之明日出發可致候僅何日間  
の旅行ハ候へ共處變れハ品變り山川風土の珍敷事も少々ハ可  
有之何も着營の上万々可得貴意先轉營ハ通報迄端書草々

○野營演習出張を報す

寸翰拜啓此度野營演習ハ達有之來る何日某地へ出張可致候此  
演習ハ平素本營ハ於て習練する所の諸藝を實地戰爭ハ運用す  
る方法を研究する申さハ試戰の姿ハて毎年春秋の中一回を期

し舉行せられ其軍器陣立ハ其都度ハ仕組替ハ相成歩騎砲工輜  
重の諸兵各其技を逞ふする一大活劇ハ候今春ハ如何の仕組  
有之哉景況の委細ハ歸營の上一書裁呈可仕先ハ出張ハ通報迄  
畧草不備

○同國歸營を報す

恭啓陳は兼て報申上置候當營兵某所ハ於て何週日間の野營  
演習一昨日相濟歸營仕候今其大畧を申上候へは去る何日ハ天  
氣快晴にて出營の際は歩兵の踏音相揃ハ砲兵ハ騎挽の車聲相  
輾り其他諸兵打揃ハ勇敢出軍相成候昨年の通某所ハ至り諸藝  
演習の未大演習有之事と思ひの外當年ハ中途某驛ハて二手ハ  
相分れ私共一手ハ迂路を取り某々數ヶ村を經て某山下ハ至り

一廢寺を以て本營と被定候其節五時過る候共工兵輜重兵各  
 其功を奏し帳幕板柱類より糧食等迄即時に相辨し私共は夫々  
 林木間より就き露營を布き無滞致し泊候翌朝に敵城襲撃の号令  
 よて未明より出發致し進行一里半程にして東方微白遠近の鴉聲  
 相應し山色野景稍く明かき相見へ候時より彼れ軍歌の一句山行  
 かは草蒸す骸と申すは箇様なる場所かと相像仕候得り暖和の  
 春天も殺氣凜然を覺へ新草の萎々も枯野蕭々かと被疑實地戰  
 場の心地仕候折しも候騎還り報して敵は城を出る數丁某所より  
 布營罷在候より付至急進撃可被成旨申立るより付夫より急行二  
 十丁程にして敵營を見認め即時諸兵の排置を定め及進撃候所  
 敵も應戰頗る相勉候得共味方の勢甚銳く敵兵難支暫時より致敗

走候跡追掛けて敵城近く押寄候所敵更も生兵を出して逆戰候  
 へ共是又暫時より敗走し籠城の様子より付愈追詰め城前の空濠迄  
 押寄せ一踏より踏越えて可攻落と思の外退軍号令あり少々引退き  
 候へり敵押出し又進めば又籠城兩三度進退の内より時刻も推移  
 り空腹より相成傳餐之令あり依て交るゝ休戰して糧食と相用  
 ひ最後の一隊は食未了なりぬ内より背後より敵軍相露れ城兵も  
 是より勢を得て烈敷挾撃を受け暫時は前後より手を分けて防戰候  
 へ共所詮難支に付又一手より相成背敵を衝破して退路を取らんと  
 試み候處背敵は城兵より人數も多く兵鋒も鋭く殆ど不動如山  
 の勢より進退方を失ひ愈大苦戰之場合より相迫り候折柄味方之  
 一隊左方之林間より出て背敵を傍撃候より付是れより勢を得て今

度は我より挾撃と打變り烈敷打立遂は背敵を追拂ひ候然るも  
 最早兵員一体は疲勞したるを以て其儘引上候所敵も亦追撃致  
 さす先交綏の姿にて當日之大演習相畢り候扱て此日之軍略は  
 私共の正路より進撃候所敵の不意と來襲之積みて山間之別路  
 を取り私共出發後空營之場へ到着夫より直に取て反し及挾撃  
 候由又味方之別手軍の攻城之際戰酣なる比は城後より進入之  
 約束は候所戦争之方角相違ひ攻城之模様無之と怪み引戻して  
 却て都合善く敵の横合も出て候由何れも臨機應變謀外之進退  
 其度又叶ひ實蹟の景況殊の外面白く相覺候是全く昔上杉武田  
 西條山筑摩川之戰に擬せし軍畧之趣は候扱て茲濠前之進退は  
 此方よ於て或は地雷火伏置之疑有之候所敵は果して其仕込

有之事濟みの後試は線火を傳へ候所忽ち發火爆聲山野は轟き  
 砂塵空を翻へり一層の壯觀は有之候終りは敵味方一集は相成  
 り私共は本營は還らず其儘敵城に入り休息仕候此外種々の演  
 習有之候へ共拙筆一々難述先づ大演習之概略而已供御覽候御  
 報旁如此候願首

○公務負傷者を慰問す

先般習志野へ野營演習御出張之節市川にて架橋之際突然不慮  
 の御怪我被成餘程御重傷にて中途御引戻し入院御治療中之由  
 過刻傳聞仕候醫事精開之今日殊は外傷にて即死之外は何等  
 の重創もても死の心配は無之候得共一時之御苦痛入院中御起  
 居不自由之程御察申上候何れ得開次第御伺可申上候へ共不取

敢御見舞如此候也

○右返事

拙生負傷之御見舞辱拜誦仕候負傷の下總市川にて架橋木材運搬の際友輩と相觸れ腰部を傷け候得共畢竟の注意不屈之所致に附無傷之積りよて其儘立働致居候所何分流血淋漓之爲め戦友之差押る所となり軍醫之檢診に重創と相成歸營入院被申附一甚バ遺憾之次第に候箇様なる迂濶之鈍漢の不用之軍人と御見捨も無之懇懇之御慰問の重々慚入候何れ不日平癒可得面晤御繁忙之際強て御枉訪の被下間敷堅く御斷り申上候也

○父兄より在營子弟へ送物添書

久振之郵便披閱先の堅固奉務之由安慰此事に候然に入用申越之何品漸く昨日出来即時封裝内國通運に托し本日及發送候間落手候へ返書被差越度候扱當方家業忙敷其方も勤務之餘暇何學修業可致に付用事無之節の互に疎音無妨と約束の致置候へ共老母始婦人共の時々其方の噂も致居候付此後の子弟の義務と心得折々通問有之様致度是亦序に申入候也

其二

素簡呈上致候先以貴様愈御無事御精勤之段満足之至に存候次は當方一同無異罷在候條御安心可被成候別封桐油包一箇御申越に應じ差送候間御改め御落掌可被成候猶申迄も無之候得共折角御奉公肝要に存候木一

○病氣を父母に報す

一筆申上候小子事本月初脚氣症に相罹り候へ共少々歩行之具合惡敷位にて別よ爲差事も無之候處一昨夜より遽に急症と相成一時驚入候乍併其御掛より篤き御介抱御加へ被下藥効も次第に相見へ目今の餘程氣分宜敷御坐候此分にて五六日中のみ殆んど全快可致旨醫師より被申聞候間先々御安心可被下候以上

○病氣見舞

其一

肅啓其後御病況如何被爲渡候哉先般御伺申上候節は少々御憔悴之容体飲食も御不欲之趣候へ共醫家診斷は全く時邪感冒少々念入たる迄之趣に候へり最早餘程御快方と奉存候本日の水曜半日休暇に付可相伺等之處朋友間無據事故出來拜趨難相成

候に付御門前通行某氏へ托し雞卵一折供ニ床下候間御滋養之一端に御用被下候へ難有奉存候猶此次日曜日より御伺可申上候へ共先御見舞迄草畧如此候不次

其二

承便得者貴君此頃中より御病臥之趣目今御容態如何に候哉御案に申上候當節の所々も流行病有之攝養尤も注意之折柄に候へば何卒一日も早く御全快相成様奉祈候先は御見舞迄猶御養生肝腎之事に奉存候頓首

○病氣慰問之返事

御懇書恭聞小人微恙を御心頭より被爲懸懸御慰問殊に何より之佳品御惠投被下欣謝不斜候早速賞味仕候處平時より一段之



芳味を覺候ハ全く厚惠ニ對する欣賞之神經ニ可有之必ず軍人の讒習と御蕙笑被下間敷候御蔭を以て昨今ハ別て快氣相覺以間不日可レ得ニ面語先不取敢欣謝拜復如此以不具

○火災見舞

昨夜は御近邊より出火折節東南之風烈敷見る々々延焼百余戸ニ至リ貴家も御類焼之難ニ被罹由實以御氣之毒之至ニ存候乍去御一同御怪我もなく御立退被成殊ニ御土藏向ハ更ニ損傷無之由ニ候得者先々御不幸中之幸ひと可レ申候就てハ當分御窮屈ながら拙宅へ御同居相成候ては如何家内之者共差遣候間御荷物運搬等無御遠慮御使役相成度候也

○婚姻を賀す

拜啓今般御令息様御婚儀目出度被爲濟候由重疊之御事ニ奉祝賀候御両親様御安堵之程尤も御満悦の儀に奉存候隨て別紙目錄之通薄儀御祝之印迄ニ進上仕候幾久敷御受納被下候ハ本懐ニ奉存候以上

○婚姻報知之返事

芳翰拜誦仕候先般内談御垂示之御縁談愈御整過何日御婚儀被爲濟候越欣慰恐悦奉存候右御縁談之儀私ハ最初より御賛成申上候へ共伯父様從兄某殿間ニ異議有之趣傳聞仕り兵役中國家へ差出之身ハ家事不關係トハ乍申聊心配罷在候處今回吹聴追書よて事情氷解大ニ安心仕候先一家之基礎も相定リ皆々様御満悦之程四海波靜ニ御祝申上候御儀席上私寫眞を先方親類へ

御傳覽被下候趣候へ共該品の數年前田舎之拙寫殊も只今の軍服旁相貌も少異可有之に付新寫之分何葉別便及拜送候間新人様の固より私見知之御方候へ共改めて幾久敷之拜謁に御代用奉願候右御祝旁拜答申上候也頓首

○出産を賀す

恭啓御令室御事昨夜御分婉殊も御男子御出生之趣愛度奉賀候早速御喜びよ可罷出等も候得共私用の爲め不得其意依て乍器儀以家僮書面御祝申上候雖卵一重乍些少御見舞之驗迄進呈候間御笑留願上候猶御両所様御愛護專一も奉存候不悉

○出産報知之返事

御郵書謹披大嫂様御安産男子御出生之趣欣然奉拜誦候男子之儀

儀の古來出産の吹應狀も殊も之一字と添ふる文例の最吉事の符號と被存候況して兵備擴張の今日も在りて一人も増員を要し一家の益斯の國家の干城ども可申時世も付頂上目出度御悦申上候生長の上り士官將官もも上達相成様教育仕度最も其比迄もい私も歸郷相成又付教育の振合の精々注意聞合せ置可申候時下氣候不順御母子共別而大切も御保養被遊度奉存候先の弄璋の御祝詞迄如此御坐候誠恐謹具

○友人の生男を賀す

芳翰謹披令閨御分婉男子御收擧之趣大慶此事も奉存候御家運榮久之基の勿論國家保護の人員相増と申上候への軍人癖と思召も難計候へ共朱も雜れば赤くなる俚諺も洩れず私も當籤之

初ハ國民義務之一念ニ候處入營後漸々事物ヲ聞見するニ隨ヒ  
 兵備の急要ある事は滿腔ニ浸染シ好兵ハ殆ト第二之性と相成  
 リ部外人ニ對する通常談話も自然兵事ニ涉リ易き程ニ候處男  
 子御出生と聞き國家保護の發言ハ御怪ミ被下間敷候少々早手  
 廻リ候へ共貴家の御身代にてハ教育も自由ニ相成候事故御  
 成長之上ハ何卒浮華之文學等ニ御差向け無之必ず貴重之武官  
 ニ相成様被遊度此段豫め奉祝候也頓首敬復

○新年を賀す 其一

新禧之祥氣千里同風先以御兩尊様始め皆々様御揃益御安健鶴  
 齡御迎の程遙ニ奉ニ壽候隨而私儀幸ニ瓦全大馬の齡相添候間  
 乍畏御休慮被下度候營中迎歳の模様ハ當北越も昨年の東京と

格別の異狀無之唯營外ニ於て車聲の轉々と國旗の翻々ハ聊カ  
 稀疎の感ある迄ニ候然るニ殊の外珍敷ハ當地の雪景ニテ四方  
 臨々極目無際野も山も村落も林麓も一様の銀世界ハ何となく  
 邊城遠戍の心地致候も亦生來初見の奇觀ニ候昨年ハ始めて暖  
 地より出掛け東京の寒ニ驚キ當年ハ北越の雪ニ候へ共寒氣ハ  
 雪の割合ニ強クハ無之候扱在營迎歳も兩度相濟跡一度ニ相成  
 候ニ付明年も何地ニてカ今一驚を相博シ度候へ共轉營の有無  
 期望の當否ハ相分リ不申候右等の元氣ニテ奉務罷在候間寒地  
 の御配慮被下間敷先ハ日増嚴寒の節御地皆々様折角御自愛被レ  
 遊度奉存候右新禧恐賀迄捧簡候猶緩々奉期春陽の節候恐惶  
 謹具

其二

新年之嘉儀愛度申納候先以貴家愈御清福御超歳被遊奉恐悦候  
降て弊家一同無恙加年仕候も付乍憚御休神可被下候先の年甫  
の御祝詞迄餘の期永陽の時候恐惶謹言

○右返事

早々之年始状嬉敷披閱致し候先は兩地共無異加齡之段何より  
大慶此事も存候今年元日之祝杯交酌の雑煮の一具たる若菜  
の青々を見るに附ても北地の如何乍去鱈鮭之類一層之佳品も  
可有之杯嚼致し候處今回の書面一覽候へは食物は扱置き其元  
之元氣に何等之寒氣も辟易致すべしと一同大笑致候扱雪の  
割合に寒氣強くは無之と乍申緯度も餘程懸隔之地も付奉務の

外は無益之不養生無之機折角自愛被致度一同之恐祈此事も候  
余は後便寛々可申入先の新禧荅賀迄如此候不悉

○暑中見舞

其一

拜啓炎暑の節昨今の尤も難堪候處先の御闔家様御揃益御健勝  
に被爲涉恐悦此事も奉存候亞も小子儀無異在營候間乍憚御放  
懷被下度候暑節の万物腐敗し易く聊よても腹中も不消化物の  
停滯有れば忽ち吐瀉を催すと承候へは御同様暑中の攝生は飲  
食の慎み第一と奉存候猶一二申上度件も有之候へ共流汗滴々  
執筆を妨ぐ先暑中御見舞迄餘の奉期秋涼候暑慵不替

其二

時下炎暑先の彌御清適恭悦奉存候隨て小生無異消光罷在候條

御安心被下度候扱當年は春來氣候不順の爲りか至る所悪疫之  
報有之御互に安心難相成候當地の幸よ今以て傳染者も無之警  
官豫防組員等の頻り盡力有之よ付聊心強く何の兎もあれ願  
ばぬ先の杖とやら精々食物の御注意肝要に存候先の暑中御伺  
迄折角御攝養奉祈候也

○右返事

采雲拜披如命炎暑之節昨今尤も甚敷候處銳氣益御壯んよ被爲  
渡敬服此事よ奉存候劣夫儀寒威よハ聊か忍耐致候も暑氣よハ  
殊之外辟易之性質よて今夏も官吏も休暇程之盛暑なれハ大概  
之私用の抛擲差支無之心得よて書信往復も畧過罷在候處忽ち  
鞭懶之警書よ接し實よ満面濁々汗謝此事よ御座候就てハ汗謝

實意を表する爲め自今ハ仰通り飲食攝養專一よ注意可致候拜  
復不委

○寒中見舞

其一

拜啓嚴冬之節寒威逐日相募候處益御壯健欣林恐賀此事よ候次  
よ私儀無異勤務罷在ハ間乍憚御省慮願上候扱御同僚兵役奉務  
上操練若き運動業ハ寒威も左迄不相覺候へ共哨兵當番の節寒  
風凜々の中よ屹然直立致候は随分苦業よハ無之哉是も寒氣不  
覺よハ飾言と被存候乍去光陰矢の如く二三當番之内よハ忽ち  
春陽可相成先推張て勉強第一ハ申迄も無之候右寒中御見舞迄  
畧具

其二

寒氣凛烈レの候益々御清寧奉欣賀一候次は私儀無恙罷居候間乍憚御安心可被下候扱本年の大雪ハ實ハ驚入候七八十之老人も未だ覺へ無之由申居候乍併雪ハ豊年の兆と申候得者先々喜敷奉存候御地は如何矢張り例年よりの多分の積雪と奉存候先の寒中御見舞迄如斯乍末筆御一同様へ宜敷御鳳聲奉願候頓首

○右返事

拜閱如高論寒威逐日相募候處高風益々御勇壯欣慰々々哨兵苦務の明諭ハ一點の飾辞なく却て御膽力も相見え感服仕候へ共拙ハ少々異見有之候元來兵役者の身体合格と以て御採用相成加ふるも入營後の飲食運動一も其度を欠かさると以て一層強壯ハ相成居ハ然ハ寒氣不覺とは申兼るも寒威不覺ハ相違無レ

之候間折角御安心御奉務相成度拜答旁愚見申添候也不備

○歳暮

其一

尺一肅啓光陰荏苒歳抄感多は普通の例言ハ共當年ハ入營匆々不慣の業務も當り最も轉瞬と覺ハ貴兄ハ業務の餘暇何學ハ勉強の趣傳承仕り健康の至にハ何卒明新年ハ驥尾追隨仕度微願旁歳暮の傍機嫌奉伺ハ也頓首不修

其二

最早年内餘日無之御互ハ塵事一時ハ相集り繁忙此事ハ候就てハ任例鹽引鮭一尾年末之御祝儀迄ハ進じ候間御落手相成度候別紙歳晚書感の愚稿一首供貴覽候御訂正被下候ハ本望の至ハ存候近頃御名吟無之哉忘年の爲め薫香拜讀仕度候也

○右返事

辱投之華翰只今忘年之一杯中拜誦仕候處拙夫業餘の勤學の全  
く御傳聞の誤に候軍人の身体強健志氣勇壯にて満足可有之面  
倒の學科の瞻氣の妨と奉存候若し御信用無之候ハ、期戦争之  
時一度候へ共目下太平無事實効之煩貴覽様無之ハ閉口仕候先  
御見込通新年早々御勤學之方可然奉存候醉餘亂筆拜復不整

○滿期歸郷を友人に報す

敬陳劣生現役も愈本月よて滿期來る何日除隊可相成候扱入營  
前より厚き御引立を蒙むり御蔭を以て國家保護の大役も無滞  
相濟候段不斜奉謝候貴兄にハ今以て不相替郷里之子弟御訓督  
被成候哉劣生も歸郷之上ハ在營中實踐の物語等申述べ豫備員

を以て聊御助力仕度心得ハ坐候都て歸郷の上可得尊意先ハ  
滿期ハ通報迄草畧不整

○一箇年現役志願者滿期を賀す

肅啓薄暑の候益多清榮殊ハ本月ハ貴兄一ケ年兵役滿期不日ハ  
歸郷の由尤も欣然奉賀候昨年醫學試験及第よて開業の免狀  
下附の折しも徴兵適齡よて現役出願の節ハ扱々兵備急  
務の今日國民皆兵の義務ハ不得己と申年申多年脩業ハ多費の  
末衣食自辨の兵役ハ随分苦勞の程ハ察申上候得き乍併彼の  
因循不決抽籤の不中を冀望して遂ハ現役と免れざるハ志氣  
の壯卑ハ月籠の相違よて技術の精疎も信用の原薄ハ關する者  
ハ候得ハ自今益多家業の盛大ハ必然の事ハ奉存候一日も早く

は歸郷の程奉待候儘豫め祝意申述度如此候也敬白不宣

○滿期歸後迎妻を在營の友人に報す

恭啓爾來の大無音平より容捨願上候陳の小生儀此度家業相續の爲め妻帯可致様夫々の世話も有之相應之縁談相整去何日新婦引取申候在營中の不二一方は厚情相成傍蔭を以て無事歸郷只今は一家の主夫婦と相成候も付先々御安心被下度候光陰は實は矢の如く貴兄も滿期の最早轉瞬間の事も付随分は精勤被成度候首尾能くは歸郷は新婚の程屈指奉待候一旦は懇意相成候上の現役中の勿論生涯通家同様の交接奉願度右は吹聴申上候也願首不二

○郷人より武官の叙勳を賀す

大師凱旋以來武官之賞典の朝野瞻望の事も有之田舎當邑も於ても是迄の新聞上は就き臆断と下し路説巷談區々候所愈政府實際の御調査も被爲濟昨何日の勳章年金等の御沙汰相成候私共今朝は宅に打寄り新聞上官報列載の姓名を一覽致候所貴台の勳四等年金何百圓の部も有之一同之驚愕驚喜不大方候貴台の軍曹もては出軍相成戦地も於て中尉迄は遷喬の承知仕居候に付今朝新聞を見るも先不取敢一二等賞顯の分は銘々臆断の中否を試みる爲め笑談旁畧聞致し跡は直に貴台の姓姓名と乍失敬六等位之積もて索閱候所見當らそ因て五等迄上り七等迄下て相尋候得共更に見當り不申扱は不思議彼程之戦功も多り今日の賞典も可洩筈は無之と申折一人早くも四等の部も



見出し驚愕中も御祝酒の饗も預り一同酌仕候丈夫豹變の古  
 言の承居候へ共貴台に於て始て實見仕り燕雀の鴻鶴の志と知  
 らす野人輩驚喜の情態は笑想可被下候扱貴台今日のは叙勳の  
 獨り一家の榮事も無之實も一郷の面目も有之候就て何か祝  
 儀と表し度戸々國旗を掲げんと迄發論有之候へ共夫れも些と  
 如何も覺へ彼是熟議の末乍粗薄祝意迄は野猪一頭薯蓣一箱今  
 日通運便にて差立態と奉供二厨下候間は一酌の肴具に涉雜用被  
 下候は、本懐も奉存候其内錦衣は歸郷候へ、實際は功勞のほ  
 物語奉伺度候へ共只今の身尉官は扱置佐官將官もも涉昇進  
 の勢も付仲々は歸郷へ有之間敷乍去一時は歸省被爲在候節の  
 は波し差支無之事共奉伺度一同奉待候右の榮事の御祝迄申上

度野人の絮文存外長々敷相成御恕讀被下候様奉願候

○右返事

劣生の叙勳を殊の外は満悦も被思召都下難得之良品二種澤山  
 へは惠投被下は厚意の段却て驚愕仕り欣喜感謝不斜候劣生從  
 軍以來進む時と進み退く時と退き候迄もて目覺しき勳等更も  
 無之却て過分の寵賞も預り朝命難默御請の仕候へ共實の差縮  
 罷在候歸京後の差掛の調物有之又游宴奔走も頗る忙敷觀繰陳  
 情の暇無之早々略答偏もは海容願上候其内得開次第一時歸省  
 久々もて接膝の款話相頼度必ず御待可被下先は厚意の御禮  
 迄早々

○満期歸郷後長官よ上る

一翰啓呈仕候。嚴寒の時節先ハ  
 台履御勇整御在鎮被遊恐既至極の御儀に奉存候降て私儀在營  
 中ハ不一方御引立を蒙り御蔭を以て奉務無滞相濟候段幾重  
 も難有仕合ふ奉存候歸郷後の農業お從事仕り時々村中の少年  
 と在營中軍人の情況并ふ台下れ高風を物語り徴兵忌避の風自  
 然消滅相成様精々注意仕居候窮郷の貧漢進物等之御禮は屈兼  
 候儘唯々國家保護の一念始終怠慢無之様心掛罷在候間夫れ  
 て報恩の一分と思召被下候ハ難有奉存候右ハ疾に御禮可申  
 上處歸郷匆匆家事取込之爲め遅引相成候段平は御仁免被下度  
 御機嫌伺旁奉捧愚札候猶奉期後便候恐惶再拜

○點呼期日を友人に報す

拜啓當部内豫後備兵ハ來る何日点呼有之ふ付悉皆出頭可致旨  
 何駐在所より涉達相成候尤點呼場ハ貴宅最寄の儀に付定め  
 て涉傳承との存候へ共萬一涉他出等よて聞及も無之夫れか  
 爲め涉欠會相成いてハ不都合中迄も無之ふ付爲念涉報申上ハ  
 也頓首

○陸軍兵出軍を家郷に報す

急啓某地方暴徒蜂起の爲め陸軍涉差向け相成當大隊出張被仰  
 付一同奮揚踊躍仕何何等之暴徒よ哉何れ濱池弄兵の草冠不  
 日討滅可相成四海同胞憫然之次第よ共仲々一時猖獗之趣  
 付少々ハ面白き戦争も可有之奉存候追て細報可申上即時出  
 發之儀も付不取敢は報如此也頓首

其二

以郵便令啓達候先以其御地皆々様は揃は清康奉恭賀候次は小  
 生事出陣以來風雨暴露も不拘身体極めて壯健は候間安  
 被下度候一旦戰地へ臨みは上の一命の固より抛居候得共敵軍  
 追々逃亡降参等多く此分よての本月中は愛度凱旋可被致と  
 存い何れ其内詳細可申上いへ共先の現況は報迄如此は早々不  
 二

○陸軍兵外征出軍を家郷に報す

謹啓先般來涉召集相成は各鎮臺兵と當鎮臺兵と目下當府下屯  
 在之兵六旅團之内三旅團は此度某中將殿都督よて長崎地方へ  
 出張被仰付は右の新聞上は續々喧報有之は本邦と青國間之紛

議葛藤未だ戰書往復之報の承いへ共愈決戰之涉準備は相違  
 無之は折角兵員と成るも大概は無事歸郷之所幸は此盛舉に相  
 當り丈夫之本懐此事は殊は此度之儀は同胞内閣之争闘は無  
 之堂々正々之出軍尤も勇敷各隊人氣之奮勵平時は百倍し出軍  
 後れは向は憤懣不平切齒扼腕是れか爲め出軍争先の殆と内  
 閣之勢は私に幸い何旅團よて率先出陣之部は相當り本懐中  
 之尤も本懐は同悦被下度は出陣上之事は拙文細報の所詮難相  
 屈新聞よて承知可被下最も一身上之事は生存は及は報  
 事も可有之はへ共先の不生還の心得よては暇乞旁生涯一度の  
 幸事は報迄可得尊意如此は也願首

○陸軍兵鎮定を家郷に報す

前畧容捨然ハ私共去る何日當何驛へ到着賊所を距る一里半  
 許之場所より即時本營之準備を爲し翌早曉各兵の部署を定め  
 及進撃ハ所賊輩數十發之應砲有之哉と見る内ハ一戦も支へず  
 散亡散走致し餘り手早の退走に付若クハ誘引の詭計よて地雷  
 火の伏置ハ無之哉と乍檢索進行致し所何の異状も無之午前九  
 時賊壘へ乘込ハ因て跡ハ分隊の手分を爲し彼處ハ五人此處ハ  
 十人宛追捕したる者七十餘人自首歸降したる者三百餘人其餘  
 ハ何方へ逃走ハ哉不相分ハ當日ハ戦況一覽の爲め外國人も出  
 掛けハ所餘り容易の平定よて手持無沙汰に候假令草賊にもせ  
 暴徒よもせよ一旦嘯集揚兵の上ハ少々ハ持戦の堪力有之様  
 致度餘り無氣力ハ外人ハ對して見苦敷究竟するハ平素尙武習

衰微の所致と嘆息仕ハ乍去是ハ手持無沙汰の餘り無益の私憂  
 先々即時平定死傷も甚た少きの國家の爲め涉同慶奉存ハ右の  
 次第よて戦況等ハ別段涉報可キ上程の事無之其翌日ハ山谷間  
 ハ潜伏の渠魁共搜索ハ所兩三人の外ハ見當り不レテ此上ハ最早  
 軍人戰鬥の仕事ハ無之治安の事務ハ付巡查ハ引譲り私共ハ不  
 日引上歸營相成趣ハハ間涉安心被下度右平定涉報迄如此ハ也  
 草々

○海軍兵より艦隊出軍を故郷に報す

片書急啓先般來新聞上よも喋々論報有之ハ本邦と青國間の紛  
 議ハ談判妥結の見込最早絶果てハ事と相見へ政府ハは愈決戦  
 の涉準備よて昨何日私共海軍二艦隊長崎表江出張被仰出ハ前

艦隊の何々艦七艘の内何艦と指揮艦として某中將殿涉乗込後  
 艦隊の何々艦九艘の内何艦を指揮艦として某中將殿涉乗込明  
 日午前六時解纜可相成以愈決戦の日日本邦よ於て海軍の初  
 戦且外國交兵の初戦も付何卒古今未有の快戦を以て日本海軍  
 の威と宇内を輝かし陸軍の袖手傍觀にて事濟相成様仕度海軍  
 一同必死請合の仕事も其間同祝被下度出發前取急き草々報  
 報如此也頓首

○海外へ進軍を報す

前略は容捨然ら私共去る何日當長崎港へ到着仕所最早戰  
 機相決し茶那國より艦隊來襲我海軍逆戰大勝を得て敵艦は悉  
 く破碎或は捕獲し因て直に敵地へ進發の決議もて更は陸軍

二旅團涉遣し相成以私共五旅團到着前熊本より一旅團出張致  
 居し目下當港屯兵總數の都合八旅團も相成以困て二旅團  
 宛四手も相分れ一手の臺榭へ一手は芝浮へ一手の呂順へ向け  
 進軍一手の當港警備及び應援の爲め居残りもて進軍の向り明  
 何日出發可相成私共の芝浮行の組もて以茶那國大敗の爲め  
 挫折し講和相成以ハ夫迄の事若し猶抗戦はハ此度こそ  
 私共致力の秋如何の戦況出現ハ裁判目涉待受被下度右進軍は  
 報上し也再拜

○海軍兵敵地より友人へ通報す

長崎大捷の後直に敵地進征の決議もて更は同所へ陸軍二旅  
 團海軍一艦隊涉廻し相成陸軍は二旅團宛三手も分れ夫々手

分して軍艦の有る丈は軍艦其餘は雇上げの漁船等も乗込三方へ向ひ進發し付海軍は其海上護衛且敵艦搜撃の爲め矢張り一艦隊宛三方に分れ一艦隊は長崎居残り相成り私共は芝浮へ向ひ進發何日何時芝浮海へ進入し所敵艦五艘警備罷在り得共我陸海の船を悉く軍艦と見認め哉恐怖散走しに付早速壘場と及砲撃暫時打合中は陸軍の兼て探偵測量致置し一里程側の海岸より上陸し其背後を襲ひ即時に攻落し壘壁等の修築を加へ旅團本營も被定め南軍の大銃より倭播を取り南金を攻め北軍の呂須より牛倉を取り盛金を取る軍畧の趣は候得共芝浮の内地は天眞よて著名の敵將左壯刀五萬の精兵を以て鎮守致居り宇内有名の堅城を付容易に攻入らす其來侵を禦き固守して

南北の要衝を扼し往來應援に便する中軍は候艦隊も南北に往來して敵艦を搜索候得共敵は長崎の大敗を致し懲創候哉悉く各所の内港より引籠の外沖に徘徊致すもの甚た少く此一二ヶ月間三艦隊よて打沈めたる者三艘取押へ降参せしめたる者四艘も過ぎす十日程以來は敵艦絶へて不相見候し付軍艦の勿論商船迄も獨箇の往來自由にて海路は内地同様は候間御安心被下度候南北両軍も時々小戦争有之候得共兎角持重の姿よて十分の進撃無之候貴兄は平素好兵家よ付後來の戦況如何御判断被成候哉的中の前算相願度今日寸暇を得て是迄の経過并目下の形況大畧に進候猶期後郵候也

○海外戦地より友人に報す

拜啓陳ハ拙者共長崎發航後何月何日大宛へ到着溪半澹毛の兩  
 港と攻取り壘壁と増し石炭庫と築き之と海路要衝の中間停泊  
 場と被定二日間滞留夫より直と大陸の倭播港へ向ひ出發何日  
 何時全港へ到着候所敵ハ全く不備と相見へ停警の軍艦二艘ハ  
 降參壘兵ハ逃走候と付一戰を勞せず全港の砲臺より糧食器機  
 等悉く奪取候因て此地を旅團本營と被定直と南金城進征の筈  
 にて傍近の城壘數ヶ所攻取候儘其後は兎角持合ひよて進軍無  
 之其内敵兵も追々來集の様子と付時々進攻致候得共左した  
 る愉快の大戦ハ更と無之最早二ヶ月餘と相成一同頗る倦怠或  
 ハ憤懣の徒も有之漸く十日前と至り本營より南金の方へ十五  
 里程の一城と痛く攻撃して陥しいれ一時稍愁眉を開きて倦怠

を慰め候所去る何日惣軍引揚げ芝浮へ集合の御沙汰相成候是  
 迄進撃の勞と空して南金と攻入らす此儘引揚げとの餘り残念  
 と存候得共命令難默泣々去る何日同所引拂ひ何日芝浮へ到着  
 仕候北軍の様子承合候得ハ矢張り一兩戰の外は目覺ましき進  
 撃無之憾を遺して引上たる趣と候然るも本日ハ天真へ向け進  
 攻の御達し相成一同奮躍勇氣百倍致候天真ハ英名の敵將左壯  
 刀五萬の精兵と以て待構ひの趣と候へハ隨分の好敵手と可有  
 之如何の戦況出現候も數日内の事に付延領御待受可被成候是  
 迄ハ御報可上上程の戦争も無之大に御無音仕候得共今日の御  
 達しハ愉快難堪任幸便御通報如此後報の有無ハ生死次第と思  
 召可被下先ハ右快報迄草々頓首

○海外戦地より大捷を家郷に報す

一翰謹啓我軍此度大勝利の吉報の最早電電よて目出度御零承  
 戦況の委細の其内新聞にて御詳知可相成候得共私一身の生死  
 の猶御心配可被爲在、旁實歴の太畧申上候扱て天真泰佑の兩勝  
 の前代未聞の奇戦拙文の所詮不相届先つ今回戦争の順序を申  
 上候へい去る何日芝浮出發旬日天真の手前二里許の所よて上  
 陸此際海軍の木江を指して溯り私共の其夜露宿致し候所敵軍  
 早くも探知し翌早朝よ攻來り我軍も某原迄出掛け終日接戦砲  
 聲の天に轟き硝煙の空と掩ふ頗る大戦の景況よ候へ共其實は  
 格別の劇戦よ無之双方共死傷甚だ少く交綏相成候翌朝の大霧  
 咫尺を辨ぜざるの際進軍は令わり如何の謀計哉も不相知令の

儘進行一二里と思ふ比一ヶ所よ到り此處よて此準度よ隨ひ

砲せよとの號令よ付其通り及發砲候所各所同時よ大小の砲聲  
 相起り其内何所ともなく雷響號動不二方一時間程よて相靜ま  
 り隨て霧も全く相霽れ敵營數丁前よ現れ見へ別よ守衛の練  
 子無之よ付即時進入候所伏屍狼籍遺棄したる糧仗の山の如し  
 是れ即ち天真城よ御坐候扱ての如是の捷戦夢かど訝かられ如  
 何なる次第と相尋候所我か天文學の遙よ彼れよ超越し今朝の  
 大霧よ既よ前知し前夜中精密よ距離を測量し準度を卜定し夫  
 々目標よ立て置きたる趣にて敵人は霧中思掛なく砲彈雨下  
 するよ驚き一二應砲も浪發のみ命中の方角よ得ず狼狽敗走の  
 狀の御想像可被成候去るよても著名の左壯刀將軍餘り拙なき



落城りなど一笑仕所同日左壯刀の營地不在の趣傳承致し尤も驚き入以其故如何とすす即ち前々より進撃の南北兩軍の全く左壯刀を誘き出す計策にて進攻の勢は殊の外手強く見せ掛けたるも實は兵士と愛惜し深くの攻入らざる趣然ると茶那廷も最初の天眞と嚴重と致守禦にへ共漸く我か左壯刀を畏れ攻寄らざるを合点し南金の兎もあれ盛金の祖廟の所在萬一被攻入ひての祖宗へ對し譯無之は付牛倉の敵軍の速よ可追攘旨左壯刀の内諭あり左壯刀も南北戦争の因循を憤り欣躍奉命乍去猶此地在鎮の振り示し内々二萬の精兵と率ひ出發しを早くも我の偵知する所となり南北一時引拂ひ當地へ攻入ひ故茶那廷に於ては舉朝驚愕電信と以て至急回軍を左壯刀に通

報し左壯刀も夜を日よ續きて還來り候得共如何せん同國の近來の開化にて樞要の地數ヶ所に電信を設けたるの鐵道は未だ何程も無之海路に我か遮奪する所となり左壯刀如何程急馳とるも我か漁船の速力と難及恭佑に到りて天眞落城の報と接し流石の英將も切齒落涙して同所屯駐の趣は候我か將官方の軍器始て承知仕り其奇計遠謀感服や機無御坐候却説夫より一日と經て泰佑へ進撃候所成る程屈強の老將なれ左壯刀應戦甚手強く相覺候然るも我軍別に抜刀隊を出し精銳二千横合より敵の中軍を斫り込め苦もなく大勝を得左壯刀の亂刀の下に斃れたりとも重創して逃走せしども申し未だ確といふ不二分候右兩大敗北の爲め茶那廷大に恐怖し北金の危き旦夕と迫るを

以て特<sup>トク</sup>に某親王を遣<sup>ツカ</sup>し去る何日我將官と某所<sup>トコロ</sup>に於て面議の上<sup>ウラ</sup>に  
 償金<sup>シヤウキン</sup>五千萬の内二千萬の直<sup>ナ</sup>に相納め<sup>オウナ</sup>残る三千萬の今より向ふ  
 五年間<sup>ゴネン</sup>に完納<sup>カンナ</sup>可<sup>カ</sup>致<sup>シ</sup>約束<sup>ヤクソク</sup>を以て全く調印<sup>テウイン</sup>も相濟<sup>オウキ</sup>み和議<sup>ワギ</sup>も相整<sup>オウセ</sup>ひ  
 此日我軍人の神風揚々<sup>シキフタヨウヤウヤウ</sup>凱歌<sup>ガイカ</sup>の聲<sup>コエ</sup>の奏樂<sup>ソウガク</sup>の音<sup>ネ</sup>と相和<sup>オウワ</sup>して洋々<sup>ヤウヤウ</sup>  
 耳<sup>ミミ</sup>に滿ち天晴<sup>テンセイ</sup>れ日本の國威<sup>コクイ</sup>海外<sup>カイガイ</sup>に物見<sup>モノミ</sup>せしたるに近頃<sup>チカヘ</sup>頃小氣味<sup>コキミ</sup>  
 善く相覺<sup>オホサ</sup>ひ乍<sup>ハ</sup>去<sup>ク</sup>兩度の戦争<sup>センジュウ</sup>故<sup>コ</sup>死傷<sup>シヤウヤウ</sup>も随分<sup>ズイブン</sup>有<sup>ア</sup>之<sup>ノ</sup>即<sup>ソレ</sup>死者三百餘名<sup>ソウヒヤクニヤクニナリ</sup>  
 又<sup>マタ</sup>達<sup>タツ</sup>し氣<sup>キ</sup>の毒<sup>ドク</sup>に至り<sup>シ</sup>又<sup>マタ</sup>汚塵<sup>カチラカレ</sup>の凱旋<sup>ガイセン</sup>之上<sup>ノ</sup>に特別<sup>トクベツ</sup>に大吊祭<sup>ダイテイサイ</sup>執行<sup>コウギン</sup>致<sup>ス</sup>  
 度<sup>タビ</sup>一同<sup>イツドウ</sup>申合<sup>マシアヘ</sup>せ居<sup>イ</sup>先々<sup>マシマシ</sup>私共<sup>シキミ</sup>は運善<sup>ウンゼン</sup>く生還<sup>セイワン</sup>可<sup>カ</sup>致<sup>シ</sup>以<sup>ヨリ</sup>間御安心<sup>マシヤクニシテ</sup>御大  
 悅<sup>ウレシ</sup>被<sup>レ</sup>下<sup>カ</sup>度<sup>タビ</sup>右捷報<sup>ウチヤクハク</sup>可<sup>カ</sup>得<sup>ル</sup>尊意<sup>ソウイ</sup>概畧<sup>ガイリヤク</sup>如此<sup>コトシ</sup>猶奉<sup>タテマツ</sup>期<sup>キ</sup>凱旋<sup>ガイセン</sup>の時<sup>トキ</sup>に恐惶<sup>オウオウ</sup>頓首<sup>トウシュ</sup>  
 ○海軍兵戰地より家郷<sup>カキヤウ</sup>に報<sup>ホウ</sup>す

前畧<sup>ゼンリヤク</sup>御海容<sup>カイヨウ</sup>然<sup>シカ</sup>ち私共艦隊<sup>シキミカネタイ</sup>去<sup>ク</sup>る何日午前七時當長崎港<sup>ナガサキ</sup>へ到着<sup>トウチク</sup>

候所午後二時<sup>ゴトキ</sup>に至り跡<sup>アト</sup>より五艘の一艦隊<sup>ゴボウノイツカネタイ</sup>某中將殿<sup>カミナカノクニノリノ</sup>指令<sup>シウメイ</sup>長官<sup>チヤウカン</sup>に  
 て御來着<sup>ミキキ</sup>相成<sup>オウセイ</sup>當港<sup>トウコウ</sup>の屯艦<sup>チュンカネ</sup>總計<sup>ソウケイ</sup>二十一艘外<sup>ソウジウノト</sup>に貨物運般<sup>カモノウンパン</sup>漁船<sup>リョセン</sup>十五  
 艘<sup>ボウ</sup>有<sup>ア</sup>之<sup>ノ</sup>候<sup>トキ</sup>其<sup>カミ</sup>晚刻<sup>バンカク</sup>某中將殿<sup>カミナカノクニノリノ</sup>尉官<sup>ウイカン</sup>曹官<sup>ソウカン</sup>數十名<sup>ソウジウニヤクニナリ</sup>を御呼寄<sup>ミヨヒヨセ</sup>よて此度<sup>コト</sup>愈<sup>イユク</sup>  
 戰機<sup>センキ</sup>相決<sup>オウケツ</sup>し青國<sup>セイコク</sup>の膽太<sup>タニ</sup>くも兩三<sup>リウサン</sup>の艦隊<sup>カネタイ</sup>を以て一兩日<sup>イツリウジツ</sup>の内<sup>ウチ</sup>襲來<sup>シヤクライ</sup>  
 の撲<sup>ウチ</sup>様<sup>サマ</sup>確<sup>カチ</sup>と探報<sup>タンポウ</sup>有<sup>ア</sup>之<sup>ノ</sup>候<sup>トキ</sup>就<sup>ツイ</sup>て應戰<sup>オウセン</sup>方略<sup>ハクリヤク</sup>の拙者<sup>セツシャ</sup>共<sup>トモ</sup>方寸<sup>ホウサン</sup>に有<sup>ア</sup>之<sup>ノ</sup>と  
 り、乍<sup>ハ</sup>申<sup>マシ</sup>諸士<sup>シヨウシ</sup>の死力<sup>シツリキ</sup>を恃<sup>タシ</sup>む外<sup>ソト</sup>無<sup>ク</sup>之<sup>ノ</sup>國家<sup>コクガ</sup>安危<sup>アノキ</sup>の關<sup>カ</sup>する所<sup>トコロ</sup>拙者<sup>セツシャ</sup>共<sup>トモ</sup>に  
 身骨<sup>ミナカ</sup>軍艦<sup>クニカネ</sup>共に<sup>トモニ</sup>破碎<sup>ハクサイ</sup>迄<sup>マデ</sup>に血戰<sup>ケツセン</sup>の積<sup>ツケ</sup>り又<sup>マタ</sup>付<sup>ツキ</sup>諸士<sup>シヨウシ</sup>に於<sup>オ</sup>ても何卒<sup>ナニトシ</sup>實地<sup>ジツチ</sup>  
 捨<sup>スレ</sup>生<sup>シ</sup>の仕事<sup>シゴト</sup>相頼<sup>オウライ</sup>も度旨<sup>タクシ</sup>を以て水雷艇<sup>スイライテイ</sup>使用<sup>シヨウヨウ</sup>を御<sup>ミ</sup>説示<sup>セツシ</sup>あり一同<sup>イツドウ</sup>非  
 常<sup>ヘイジョウ</sup>の懇諭<sup>コンゴン</sup>に感<sup>カン</sup>し假令<sup>カヒ</sup>敵艦<sup>テウカネ</sup>の發見<sup>ハツケン</sup>砲擊<sup>ハウキキ</sup>に逢<sup>ア</sup>ふとも水雷<sup>スイライ</sup>を放<sup>ハツ</sup>附<sup>ツ</sup>せ  
 ざる限<sup>リミ</sup>に水雷艇<sup>スイライテイ</sup>と殉死<sup>シュンシ</sup>可<sup>カ</sup>致<sup>シ</sup>一切<sup>イツサイ</sup>退駛<sup>タイシ</sup>不<sup>ク</sup>致<sup>ス</sup>旨<sup>シ</sup>矢<sup>ヤ</sup>て申述<sup>シンシュツ</sup>候<sup>トキ</sup>依<sup>ヨリ</sup>て戰  
 場<sup>ウツバ</sup>と定めたる場所<sup>トコロ</sup>より前<sup>マ</sup>き或<sup>ナ</sup>に横敵<sup>ヨウテウ</sup>艦<sup>カネ</sup>之<sup>ノ</sup>背<sup>セ</sup>後<sup>ゴ</sup>に當<sup>オ</sup>る五里<sup>ゴリ</sup>以外<sup>イガイ</sup>

之海岸林間若くは島嶼間を見立て水雷艇二十五艘を排伏し本艦隊の戦場より手前二里程之所に相設け壹艘隊の致戦斥候を兼ね中洋に徘徊し以て待受候所翌日午前九時比敵艦遙に洋心より露れれ稍近づくと互に致戦發砲あり忽ち海戦の壯觀を現はす乍去我か前艦隊の程善く打合ひ漸く退駛して敵艦を誘ふ敵艦追ふて悉く戦場に至る其艦隊の六艘宛二隊七艘一隊五艘一隊總計四艘隊二十四艘にて船体何れも堅牢巨大大概の一二等艦と見受けらる我艦隊之を見て悉く押出し前艦隊と合し應戦も及ぶ之より左回右轉各艦呈技之戦況の筆紙難盡御想像可被下候戰爭中各艦より發したる水雷艇の何れも敵の砲撃に逢ひ互に奏功無之候得共汽艦の運轉砲丸之發射等都ての技藝

味方の腕前遙に相勝り砲丸の命中數の敵より五六倍に致相當候乍去敵の船艦の堅大を恃み毫も屈色なく是非共艦勢を以て壓倒致度様子にて遂に大劇戦と相成り候折柄我か兼て排伏の一艇の戰酬なる爲めか運善く敵を發見せられす忽ち水雷を一艦に放附する哉即時激波天を漲さり船体の鳴動海上に響き渡り見る間も破碎沈没の技を呈す他の敵艦之を見て動搖沮色の体ある所此方より得たり逃さじと發砲尤も烈しく雷響電駭暫ばし鳴りも止まざる内は敵の指揮艦と見ゆる一大艦又水雷を掛り續て殘る五艘も同時水雷を打碎かれ他艦大に恐怖隊を亂して遁逃を始め艦隊一二里と退駛する際是れも亦水雷を掛るもの尤艘も及ぶ是に於て敵艦進めり砲彈を受け退けり水雷も

掛り進退維れ谷まり狼狽措きどころと知らず餘す所の敵艦悉く逐よ降旗と建つるに至る依て我本艦隊の即時に諸艦と遣りし夫々受降の手續と爲し午後一分三十分戦争全く相終はり候此日青艦と轟沈せしめたるもの前後十六艘分捕八艘は候右の古今未曾有の大戦にして又奇戦快戦と可申歐洲歴史上未だ聞かざる所其戦況の實際の中々拙者拙文の能く盡くす所は無し之其内新聞にも掲載は覽可相成候得共實見實歴の幾分を任幸便不取敢御報申上候間近頃一大快事ありと上の國家の爲め下一身の爲め十分は御祝ひ被下度候此上青國も講和の外好悪案有之間敷左りとい餘り氣の毒なれとも古來卑怯は國の持前として亦無據次第敵本邦よりの直は兩三日内は海陸打捕ひ彼

地へ向け進發可相成候後報の生存次第猶可得貴意先の初戦の大勝御報如此候也早々

○海軍兵より凱旋を故郷に報す

尺書恭啓然らば今般の軍事全捷を占め五千萬の償金と取り和議相整ひ来る何日凱旋可相成候是迄私共海軍の戦歴に去る何日南北陸軍一同芝浮へ會し夫より天眞征伐の爲め三艦隊打捕氷雷線發見及斷去の器械と十分は相備へ陸軍と護して前行し天眞の手前二里の處よて陸軍と相分れ北江を指して湖り候氷雷線は是迄は發見斷去したる者不少候得共天眞最寄に到れん縦横は布設し宛も蛛巢の如し一々斷去の手數は附兼て用意致置候分捕り半壞船及商船の老船等も機關を興し先づ一艘を相

放ち候所即時數十線の水雷を觸れ烈敷鳴動して見る間に破碎す敵人の愚も之と見て大に歡呼致し候其跡續て十艘程相放候所何れも激波天に迸り鳴動して破碎沈没する其有様大地震と大颶風と一時に發したるかと思は候夫もて數百線の水雷も大概の觸消の模様乍去猶精々と注意を加へて漸次天真港へ致進入候所港内に停泊したる十餘艘の警備艦に我か進來を見るや直線上流を指して逃駛の様子に付急追掛け二艘を轟沈三艘と降参せしめ其餘の遂に逃げ果され遺憾の事に候依て何故一戦も不致逃走候哉と分捕艦中の降敵に相尋候處日本艦の水雷を觸れ幾艘沈没も拘らず進み來る其猛勢の所詮手向ひ難致と申述候成程尤の誤想我々海軍には意外の功名も候當

日天真の城兵と暫時の打合は止り其翌朝大霧に乘し陸軍と挾撃して攻落し其翌々日大沽に於て陸軍の奇勝あり遂に全局の捷を占めたる次第も候扱愈凱旋の日軍艦商船之別なく聯參船迄も戦地現在之氣船百餘艘を悉く艦隊に組立て夫々之裝飾を加へ海陸軍人より小使人足に至る迄部を分て乗込凡そ十五艦打揃歸國相成趣も候へに我全國人民の家々國旗を掲げ歡聲沸くか如くは欣迎之様今日より想像被致候皆々様も神戸迄の僅々五里餘程なれは是非々々御出掛け古今之盛事御一覽被遊様仕度右凱旋之御報申上候恐惶謹具

○現役兵志願を賛す

拜啓陳の貴殿此度現役兵御志願被成由傳承致し御壯志の程欽

慕仕候今日兵備急務之時世に拘らず一般風俗の免角文弱勝之折柄一人よても現役志願之多きり國家之爲め可賀事は候殊に我郷よの未だ一人之志願兵無之貴殿の開導先達者よて後來一郷之龜鑑と相成事は候得り隨分御奮發有之度候拙者共も欽慕之餘誰某申合せ祝酒一盃差上度候間乍御足勞明夕誰宅迄御枉臨被下度此段拜祝旁願上候也頓首

○軍籍に在る者郷里子弟に現役志願を勸む

各位益御勇壯奉賀候陳の拙者輩英俊諸君よ對し勸告の如何と壹再致躊躇候得共國家の爲め不得已一應仰御垂聽一度の現役兵志願の一事は候兵備の國家最重の要務殊に本邦の開國以來尙武の習俗自然天成上世の全國皆兵は候處中古以來武治

の世と相成兵農漸く分れ徳川氏時代に至り士民の區別全く判然致し農商の文武諸藝よ一切不關殆ど奴隸同様無氣力臆病の習俗と相成候然るに御維新以來の文武諸藝の研究士民一般隨意の事と相定候り取りも直さず民權も王政と同時に復古の譯に候左れども維新當坐は士民區別の舊習急々難除折柄文明諸藝輸入の秋に際し何事も士習一洗新智開發と旨と爲すよ付一利一害の勢の免れざる所士習一洗と共に武習も亦一洗して隨て文弱の弊と生し且へ當時の徵兵令の不完全の廉頗る多く官員神官僧侶一家の長子假名の養子等孰れも免役に屬し全く不用の人物の御徵集の姿は候夫れ故議論上ふり國家保護の大役と取難せども實際右の次第にて一般人民の兵役と賤事苦業

と相心得忌避の風盛ま行はれ候も無餘義次第と乍申隨分國家の醜事浩嘆の至ふ候其弊御洞察と相見へ徴兵令御改正以來の身体不合格若くは不具廢疾鮮族不幸者の外ハ悉皆御徵集相成高等の官吏貴重の學生も猶豫迄て免役と申す事一切無之殊よ近ころ何れの學校も限らず体操の一課御加へ相成人々をして筋骨を堅固よし身體を強壯ならしめらるゝの都て尙武の御政畧と奉存候夫れ是れの爲め哉徴兵忌避の風は大薄らき候得共現役志願者依然として乏敷は甚以て不審の次第元來忌避と志願とは反体の義よ付忌避の減少に隨へ志願は増加可致等の所其割合不相立標準の取様無之は尙武の御政畧未だ徹底不致歟と遺憾の至り候就ては此際何卒諸君の御首唱を以

て現役志願一郷皆兵の風を興し延て一郡一州よ及ほし遂よは天下皆兵の基礎と相成様仕度隨分盛事よ無之哉諸君の英俊と以て御奮發は屹度保証の事よ奉存候へ共私共實踐を以て御心得迄よ聊申上置度は營中の情況も候扱營中の情況どの日々業務より起臥出入よ至る迄都て紀律嚴肅の一事よ候一口よ嚴肅と申せの何か至難の事の様相聞へ候へ共今日庶人の營業も勉強家は夜間迄休息不致向も有之又業体よ依ては風雨霜雪も難避向も有之所謂我物と思へは輕し笠の雪よて曾て其苦を訴ふるもの無之兵役も其譯て國下の外寇は一家の盜難同様兵備手薄なれば外寇の侵掠と免れざる事よ付自家盜難の番手と心得候の苦業抔とり思寄らざる筈も候況して國家公役の

兵務の勞事より相違無之候へ共所謂紀律嚴肅よて休息時間休  
 暇日迄一々嚴肅の譯よて務方よ依てハ褒賞休暇も有之私業勉  
 強家の如く終歲無休暇の漫勞お無之嚴肅とは乍申實は整閑と  
 も可申程よ候殊よ在營中の住食は中人以下庶民の粗薄と異り  
 又野營演習長途行軍等は随分愉快の旅行よ候去れハ現役の一  
 事ハ中人以下の庶民よ在ては三ヶ年間不存寄華屋よ住し美食  
 に飽き併せて藝術を學び時としてハ官費之旅行も可相成又中  
 人以上之人民ハ紀律嚴肅の爲よ游惰の慣習を一洗し筋骨を堅  
 固よし身体を強壯よし品行之一助と可相成都て有益無損の業  
 と心得可然候就てハ何卒國民義務之御奮發を以て苦業等之御  
 掛念無之各位御申合せ陸續現役御志願相成權仕度此段以婆心御

勸告申上候也

○軍人文鑑を送られし謝す

拜陳今度新版發兌之軍人文鑑と申書ハ我々軍人よハ欠く可ら  
 ざる長書なりと聞及候よ付一見仕度最寄之書肆へ相尋居候折  
 柄不圖右書籍御惠投被成下尤も難有奉謝候早速一讀仕候處成  
 程評判之通り是迄よハ無類とも可申好書冊よ有之無學之我々  
 を益する不謝候何れ御目よ懸り萬謝可申上先ハ不取敢御禮如  
 此候也

○普法戰紀譯本借讀の禮狀

恭啓日外御尊の普法戰紀譯本態々御送貸被下御厚意之程不淺  
 奉謝候早速一覽仕候所成る程廣告通り原著原文餘程の好文章



と相見へ行文の簡明痛快にして事實の詳細精確なるは此右より  
 出るもの無かるべく且へ譯方宜く傍訓註釋丁寧に行届き殊に  
 挿畫を加へたるは一際目立て面白き儘不覺一氣に全篇致卒讀  
 候扱一讀甚た感覺致候事は流石に歐洲大國の大戦亂とは乍し申  
 其勝敗の分るゝ所終に佛帝國を變して民主國たらしめ歐洲の  
 全面大局に向て種々著しき變動を與へたる珍事并に英相獨國  
 のビスマルク氏宣戰講和一切の所置振り又其戦争の大膽激烈  
 ある等如何にも活潑の舉動にして一々目覺敷壯快を被覺候隨  
 て又兩國士氣民風の一事に至ては益感心の事共不尠獨國兵士  
 の勇壯なる佛國使臣の慷慨なる一々詳記了として見る如く其  
 間珍聞奇說數多記載吾々軍人たる者他日戦争の時諸事心得と

なるへき屈強の良書獨り軍人に限らず一般人民たる者も於て  
 も是非一讀せざるへからざる有益の新著と被存候近頃ハ坊間  
 出版もの如山讀出中より有益の書籍とては誠と寒々なれば過日  
 以來新聞紙上廣告も見受居候得共亦例の無益出版と心得居候  
 所不料も此好著書に接したる次第にて殊の外相喜び候就てハ  
 夫々知合の者へも披露致し各一本購續致様相勸度存候先ハ珍  
 本拜借の御禮旁愚存申述如此御坐候也頓首

○友人ニ與フル戰ヲ論スルノ書

某兄足下頃日何如シ伏シテ惟ルニ万福袂ヲ分テ以來再ヒ葛藜ヲ易フ功名未タ成ラス在苒老ヒ易シ僕碌々噲等ト伍ス時ニ又幸ニ誨ユル所アレ近口同盟各邦關涉ノ事起ルヤ國內議論鼎沸衆訟廷ニ滿ッ大旨和戰ノ二端ノミ其和ヲ説クモノハ固ヨリ以テ聞クニ足ラス戰論ハ則ニアリ一ニ曰ク今ノ時富國強兵ハ戰ノ一字ニ在リ曰兵權曰武備曰士氣一國ノ因テ以テ振フ所ノモノハ必ス戰ヨリ始マル之ヲ遠クシテハペートルワシントン之ヲ近クシテハ獨逸本朝皆百戰中ヨリ國ヲ起サ、ルハ莫シ蓋シ人々逃ルベカラサルノ死地ニ陥リテ然シテ後天下大有爲ノ基本始テ立ツ故ニ國ニ敵國アリ外患アリ已ムヲ得スシテ起テ戰ニ赴キ然シテ後國始テ富ムベク兵始テ強カルベシ是千歳不拔ノ論ナリ今ヤ我邦決然奮テ戰ヲ開カハ區々條約改正何カ有ラシ事ノ成否一朝ニシテ決センノミ彼ノ動モスレハ輒チ和ヲ談スルモ

ノハ陋生ノ腐言殊ニ憫笑スヘキノミ獨リ怪ム世ノ卓識アリト稱スル者動モスレハ戰ヲ非トス是レ用フルニ足ラス要スルニ是其レ斷ニ在ラン乎一ハ則曰ク戰ハ固ヨリ可ナリ一國存亡ノ機ハ必ス戰不戰ニ因リテ決セントス懦夫ノ和議ハ則取ルニ足ラサルノミ但戰ハ戰ノ戰アリ不戰ノ戰アリ且ツ戰ハ不戰ノ戰ヲ以テ上ト爲ス夫レ地ヲ爭フテ以テ戰ヒ人ヲ殺シテ野ニ盈チ城ヲ爭フテ以テ戰ヒ人ヲ殺シテ城ニ盈チ兩軍交モ轟キ万馬騰蹴電擊雷駭須臾ノ間百萬ノ衆ヲ塵ニスルハ快ハ則快ナリト雖亦甚士君子ノ見ルチ樂マサル所ナリ故ニ其能ク銳チ養ヒ氣チ屬マシ取テ師ヲ起サスト雖常ニ驟起袂チ投ズルノ威チ示ス是チ不戰ノ戰ト云フ戰ノ戰不戰ノ戰二者皆戰ト云ト雖其流血杵チ漂ハスハ戰ハスシテ既ニ人ヲ屈スルニ孰與レソヤ是主戰者ノ宜ク簡擇スヘキ所ナリト前者ハ勇ナリ後者ハ智ナリ均ク一チ執テ動カスト雖要スルニ是レ二者相待モノカ何トナレハ前者ノ實アリテ然シテ後始テ後者ノ功擧クヘシ若シ前者ノ實ナカリセハ何チ以テ後者ノ功ヲ收ムルヲ得シヤ僕チ以テ之ヲ思フニソノ要戰ト不戰ノ跡ニ在ラスシテ寧

口時機ノ如何ニ在リト云ハソノミ苟モ機ハ戰フヘキヲ見ハ宜ク速ニ決戰スヘシ苟モ機ハ未タ然ラサルカ戰ハサルアラシノミ究竟只機ノ一字ニ在リ故ニ曰ク君子ハ戰ハサルアリ戰ヘハ必ス勝ツト區々戰不戰ノ戰論共ニ皆其一ヲ知テ未タ其二ヲ知ラサルモノ乎只今ノ時ハ機ノ果シテ戰フヘキヤ否ヤハ僕ノ甚惑フ所ナリ未タ識ラス足下ノ卓識以テ如何ト爲ス敢テ一疑ヲ擧ケテ以テ左右ニ質ス足下幸ニ明誨ヲ吝ムコトアル勿レ切ニ望ム所ナリ某再拜

評 蓄勇養氣不戰之戰

○普法戰紀ヲ贈ラル、ヲ謝ス

某兄足下近狀如何僕頃者音問ヲ欠シ僕ガ罪多シ然リト雖僕ガ心情ハ則然ラス足下若シ之ヲ知ラント欲セハ請フ之ヲ明夜ノ月兔ニ問ヘ月兔必ス將ニ答ヘテ曰ハントス余ハ光輝昨夕ニ異ルヤ否ヤト今朝圖ラザリキ新版普法戰紀譯本ヲ惠贈セラル深情厚意千感万謝僕此書ヲ得ルヤ忽チ曰ク君ガ平生果シテ是アル哉吾未ダ之ヲ繙カズシテ既已ニソノ美味ヲ知ルヲ得ル

ナリ樂イ哉吾ノ吾兄アルヤ君果シテ君ノ平生ニ負カスト乃チ直ニ取リテ之ヲ讀ム一氣讀ミ去ル一卷強ニシテ忽チ一奇聞ヲ得タリ云ハク一ノ南セシルマン兵士ノ甫メテ昇カレテ至ルアリ其人雄健魁梧狀貌極ハメテ岸異ナリ憫ムヘシ砲丸已ニ深ク肉際ニ入ル軍醫即チ之カ爲メ丸ヲ抜キ去ラント欲シ問フテ曰ク君ヨ痲藥ヲ需ムルヤ否ヤト兵士曰ク醫官ヨ賤卒モ幸ニ生レテ男兒ナリ區々タル小傷何ノ痛カ忍フヘカラサラン何ソ彼ノ痲藥ヲ用ユルコトヲ爲サンヤ但醫官ガ厚意ヲ謝ス請フ幸ニ速ニ肉ヲ割キテ丸ヲ示サレヨト其丸深ク背間ニ藏ル軍醫刀器ヲ懷ニ出シテ割然肉ヲ斬ル丸迸リ飛フ兵士之レニ處テ從容トシテ色ヲ變セズ曾テ其痛ヲ覺ヘサルモノ、如シ軍醫丸ヲ取リテ之ニ與ヘテ曰ク是レナリ兵士之ヲ觀テ怡然トシテ笑テ曰ク丸モ亦勇ナル哉形方一寸ナル能ハスシテ猶能余ヲシテ多少ノ痛ヲ覺ヘシム圖ラザリキ小丸ノ此伎倆有ルヤト僕讀ンテ此ニ至リテ決然席ヲ蹴テ起ツ曰ク普國猶此勇士アルヤ果セル哉普ノ能ク佛ヲ制スルヤ彼レビススマーシ無双ノ英相ト雖此奇士無ケレハ決シテ全捷ヲ得ルノ理ナシ嗚呼

一士一卒ノミ且一士一卒ト云ハソヤ一士一卒ト云ハソヤ僕乃チ日本刀ヲ取リテ覺ヘス慨然タルモノ之ヲ久フス聊カ君カ厚志ヲ謝スルモノ此ノ如シ僕カ喜ヒ知ルヘキナリ或ル人ノ國歌ニ曰ク見セバやと人の爲めさへ嬉しきハ見馴れぬ書ト得たるなりけり僕亦之ヲ以テ君ニ答ヘソノミ謝々

評 就書中事見出一奇

○友人ノ士官學校ニ在ル者ニ與フ

某兄足下去年足下カ郷里ニ在ルヤ僕出テ、九州ニ遊ブ今春僕ノ郷里ニ歸ルヤ足下既ニ東京ニ之ク既ニシテ聞ク頃者足下士官學校ニ在リト欣慰々々願フニ僕ノ足下ト生ハ郷ヲ同フシ學ハ師ヲ同フシ入テハ窓下ニ志ヲ論シ出テハ郊野ニ手ヲ携ヘ盍簪徵逐僕唱ヘテ足下和シ足下語リテ僕樂ム借ニ忘年ト稱シ莫逆ト稱ス是ヲ以テ跡ハ相同フセサレ石心ハ未タ曾テ一日モ足下ヲ忘ル、コアラヌ昨夜月明ナルニ梁下ニ徘徊シテ曾遊チ追懷シ急ニ遠飛ノ翼ナキコト憾ム足下モ亦僕カ情思ヲ知ルヤ士官學校ハ海内俊髦ノ集マル所必是膽略機識ノ士多カラソ雄斷沈毅ノ人亦乏シカラサルヘシ足

下日夕之ト臂ヲ交ヒ膝ヲ接シ古今ヲ商榷シ議論ヲ上下ニ以テ當世ノ務ヲ論ス僕健羨ニ堪ヘサル所ナリ願フニ士ノ世ニ在ルヤ關スル所大ナリ其任重シ苟モ士ノ任輕カラサルヲ知ラハ士タル者今日ニ在テ當ニ如何カ處スヘキ僕近口胸間疑團ノ解ケサルモノアリ敢テ以テ諸士ニ問ハント抑大日本今日ノ急務果シテ何ノ處ニカアル又大丈夫今日ノ磨勵果シテ何ノ處ニカアル是レ足下カ夙ニ同窓諸子ト講シテ熟スル所ナラン僕之ヲ思フテ未タ其說ヲ得ス足下幸ニ教示ヲ各々勿レ切ニ裁答ヲ待ツ某再拜

評 引而不發必有厚望

○友人某ニ與フル時事ヲ論ブルノ書

某月日某君足下昨日惠書ヲ辱グス大ニ鄙懷ヲ慰ス問意甚大ナリ僕何ソ敢テ當ラン足下ハ僕カ平素稱シテ以テ畏友ト爲ス所ナリ今又此ノ如シ僕カ首尾畏縮餘マスナキヲ覺ユ然リト雖亦試ニ所見ヲ陳フヘシ足下請フ裁セヨ今ヤ眸ヲ放テ東方ノ大勢ヲ一視スルキハ如何ソ魯國侵畧主義ヲ取リテ貔貅百萬爪牙ヲ磨シ艦艦十百煤炭ヲ積ミ日ニ四方ノ間隙ヲ伺フ蓋シ遠大

百  
ノ希圖ヲ抱キ未ダ曾テ一日モ望蜀ノ念ヲ廢セス日又一日漸ク將ニ南チ圖  
ラント大英國ハ貿易主義ヲ取リテ以テ海上ニ跋扈シ印度ニ支那ニ西藏ニ  
亞細亞ノ南岸至ル所トシテ大利ヲ占メサルハ莫ク尙且已マス駭々乎トシ  
テ常ニ鷓蚌ノ利ヲ窺フ而シテ支那モ亦近頃漸ク長眠ヲ覺破シ兵ヲ養ヒ器  
ヲ蓄ヘ機ヲ見テ袂ヲ投シ中國ニ蒞ンテ四夷ヲ撫テントスルノ慨アルモノ  
、如シ東方ノ現狀既ニ此ノ如シ眸ヲ轉シテ西方ヲ望メハ亦如何ノ獨佛ノ  
交際果シテ保全ヲ得ルカ英佛ノ交際果シテ和親ヲ得ルカ英魯ノ際會又果  
シテ罅隙ナキカ蓋シ亦武器ヲ握リテ相疾視スルノ勢無キニ非ス嗚呼東方  
既ニ然リ西方亦此ニ及ヘリ之ヲ要スルニ今日宇内ノ大局ハ之ヲ噴火山頭  
ノ平和ト謂ハンノミ危機一發黑煙將ニ天ヲ衝カントス是ノ時ニ當リテ衰  
爾タル日本國大國ノ間ニ介在並立セントスル果シテ將ニ何ノ道ニ由ラン  
トスル乎蓋シ亦日本刀ヲ磨屬シ日本砲ヲ發明シ日本艦ヲ製造セン斯ノ如  
キノミ其レ然リ而シテ士氣最モ養成セサルヘカラス一國士氣ヲ以テ興リ  
又士氣ヲ以テ衰フ苟モ士氣振フヲ得ハ因テ以テ日本刀ヲ用ユヘシ因テ以

テ日本砲ヲ用ユヘシ因テ以テ日本艦ヲ用ユヘシ因テ以テ東西ヲ睥睨スヘ  
ク各國ヲ蹂躪スヘシ然ラハ則士氣ヲ養成スルノ術如何曰ク一人ヲ積テ百  
人ナリ百人ヲ積テ萬人ナリ苟モ士氣ノ振フヲ欲セハ人々各自ヲ激勵セン  
ノミ僕々ヨリ始メソ君々ヨリ始メヨ今日ニ在テ僕以爲ラク大丈夫ノ磨勵  
正ニ此ニ在テ大日本ノ急務亦將ニ此ヨリ成ラントスト識ラス足下以テ如  
何ト爲ス幸ニ教命ヲ躊躇スルコト勿レ某再拜

評 筆飛墨舞何等才力

○西郷隆盛ノ紀念碑ヲ建設スルコトヲ勸ム

維新ノ際我邦ノ歴史上空前絶後ノ大業偉勳ヲ奏シタルモノハ吾儕必先ツ  
故西郷隆盛翁ヲ推ス爾府ノ衰フルニ當リ内患外憂ニ逼リ天下殆キヲ岌々  
タリ翁慨然天下ニ志アリ鞋ヲ穿テ劍ニ仗リ心志ヲ苦メ筋骨ヲ勞シ撥亂反  
正ノ大任ヲ以テ他人ニ推委セス東西各藩志士豪傑雲ノ如ク起ルト雖皆翁  
ヲ以テ時ノ泰斗ト爲ス朝廷モ亦頼テ以テ重ト爲ス實ニ國家ノ棟梁柱石ニ  
シテ四方皆其下風ニ立ツ朝廷遂ニ克ク擾亂ヲ戡定シ偉業ヲ成就スルモノ

ハ實ニ翁ノ力ナリ其偉勳功業赫々トシテ將ニ後世ヲ照ラサントス故ニ翁ノ死其終ヲ善クセサルニ拘ハラズ其知ルト知ラサルトニ論ナク皆翁ノ風采ヲ想見シ翁ノ威徳ヲ追慕シ頻リニ稱揚仰望セサルハ莫シ嗚呼之ヲ奈何ソ翁ノ爲メニ一大紀念碑ヲ建設セサルヲ得ンヤ抑建碑ノ事タルヤ固ヨリ瑣事ナリ之ヲ建ルト否トハ以テ翁ヲ輕重スルニ足ラスト雖獨リ吾儕平生翁ノ威風ヲ慕フモノ焉ソ翁ノ爲メニ此ノ舉ヲ爲サルヲ得ンヤ蓋シ翁ノ進退出處ニ於ケルハ嘖々世ノ稱シテ以テ公明正大卓犖不羈ト爲ス所ナリ但十年ノ事ハ其罪無シトセザルニ似タレトモ以テ前功ヲ掩フテソノ美ヲ沒ス可ラズ要スルニ翁ノ若キハ只絶世ノ豪傑タルヲ以テハ故ニ彼レカ如キノ偉勳ヲ建立シ又只絶世ノ豪傑タルヲ以テノ故ニ彼レカ如キノ變亂ヲ醸出スルニ至ルト謂フヘキノミ英雄ヲ論スル固ヨリ宜ク區々ノ常率ヲ以テ苟論スヘカラズ且人ヲ稱スルハ宜ク其善ヲ發揚スヘシ其惡ヲ追咎セスシテ可ナリ況ヤ其舉兵ノ事ノ如キ未タ容易ニ異議ヲ其間ニ容ルヘカラサルヲヤ若シ夫レ功罪ノ定論ハ百世自ラ當ニ定説アルヘシ敢テ今日ニ於テ唇

齒ニ上ボスヲ要セス願フニ世ノ功臣職ニ在リ位ヲ全クシテ而シテ死ニ就クモノハ假令ヒ建碑ノ舉ナシト雖モ其名聲人目ニ在リ獨リ彼ノ其始ヲ善クスルモ其終ヲ善クセス遂ニ罪名ニ陷井リテ前功ヲ沒セラレントスル者ニ在テハ紀念碑建設ノ事亦徒爾ノ事トナサルナリ是レ吾儕切ニ翁ノ爲メニ某地ヲトシテ一大紀念碑ヲ建設セント欲シテ大ニ同志者ヲ募集スル所以ナリ未タ議ラズ世ノ志士以テ如何ト爲ス謹テ檄ス

評 前功後罪不掩則公

○某國海ニ事アリ派遣軍艦乘組員ニ與フルニ擬ス

某月日某君足下聞ク君派遣ノ命ヲ蒙リ某月ヲ以テ將ニ橫濱ヲ發シテ某國海ニ向ハントスト僕報ヲ得ルヤ驟然袂ヲ拂テ起ツ距踊三百曲踊三百君其レ往ケ矣夫レ兵ハ兇器ナリ戰ハ固ヨリ已ムヲ得サルニ出ツ今ヤ朝廷六師ヲ起シテ某國ヲ征セラル、モノハ亦其名ト實トニ於テ止ムヲ得サルノミ抑モ某國ノ國タルヤ北ハ朔漠ニ至リ南ハ填粵ニ至リ東ハ浙閩ニ至リ西ハ西藏ニ至リ版圖ノ廣斥人民ノ衆多財物ノ富饒宇内其比ヲ見サル所ニシテ

陸ハ則長城ヲ以テ藩屏ト爲シ水ハ則大海ヲ以テ襟帶ト爲ス帶甲百萬以テ天險ヲ特ミ屹然東西ニ雄視シテ中國ト稱シ東帝ト稱ス若シ以テ睡眠一覺目ヲ摩シ頭ヲ擡ケテ蹶起セハ則其能ク全歐ヲ鞭笞シ叱咤蹂躪寰區ヲ震動スルモ易々ナランノミ夫レ小ハ固ヨリ以テ大ニ敵スヘカラス寡ハ固ヨリ以テ衆ニ抗スヘカラス今ヤ海島ノ小日本ヲ以テ敢テ某國ノ大ト唯雄ヲ決セント欲ス膽氣ハ喜フヘント誰或ハ智者ノ爲サ、ル所ナリ且彼レノ我ニ於ケルヤ唇齒相依リ鄰保相助ケ開國以來ノ友邦ニシテ其相往來スル日モ亦久シ設使ヒ一朝無禮ノ咎アルモ宜ク之ヲ恕スヘシ況ヤ戰鬥ノ事タル民命ノ關カル所ニシテ其不仁極マルヲヤ其然リ豈ヨ其レ然ランヤ抑モ某國ノ傲慢自尊ナル漫ニ他人ヲ侮辱シ他國ヲ輕蔑シ敢テ無禮ヲ行フテ忌憚ナシ今回朝鮮ノ事ノ如キハ其最モ甚キモノニシテ其罪決シテ赦スヘカラズ一夫モ且狂ルヘカラス況ヤ大國ヲヤ我ノ鄰交ヲ重シ蒙昧ヲ憐ミ彼ヲ容レ彼ヲ眷ミル亦一日ニ非ス彼レ德ヲ思ハス恩ヲ仇トス且彼レノ頑愚固陋ナルヤ臥榻ノ側他人ノ鼾睡ヲ容レテ自ラ知ラス我屢之ヲ教誨スルモ衷トシ

テ充耳ノ如シ今日ニ在リテ某國ヲ問ハサルトキハ天下ノ大計ニ於テ甚ダ不可ナルモノアリ是レ終ニ膺チ且懲ラサ、ルヲ得ス我朝廷已チ得スシテ大軍ヲ起コス所以ナリ若シ夫レ強弱勝敗ノ論ハ我ニ精銳十萬アリ彼レニ百萬アリト雖群羊何ソ能ク爲ン炸彈一發以テ砲臺ヲ擊碎スヘシ寶刀一閃以テ中原ヲ披靡スヘシ苟モ我ニシテ一度足ヲ舉グルカ某國全土朽チ拉シ枯チ挫スルカ如キノミ但我師ノ勇敢無比ナル戰ハスシテ既ニ勝算アリト雖且彼亦隱然宇内ノ大敵ナリ今回ノ舉實ニ未曾有ノ戰鬥ナリトス其一勝一敗一倒一起實ニ一國興亡ノ決スル所東亞大局ノ因テ以テ安危ヲ定ムル所ナリ我ヲルモノ驕テ彼ヲ侮ルヘカラス況ヤ獨英ノ或ハ陰ニ彼ヲ庇保スルナキヲ保セサルヲヤ嗚呼我一朝某國ノ大土ニ據テ左視右顧以テ四方ニ令シ以テ英米魯獨ヲ制シ以テ千年ノ大屈ヲ一伸シ以テ大ニ日旗ノ威武ヲ發揚スルニ至ルハ其レ遠キニ非ルカ其レ遠キニ非ルカ君其レ往ケ矣僕亦將ニ尋テ發セントス嗚呼男兒報國ノ秋來レリ今ヨリ以後ハ生キテ榮ナリ死シテ瞑スヘシ愉快々々某再拜

評 必無此理言則快矣

○戰士負傷治療者ヲ慰ム

前日某地ノ役ニ方リ足下勇戰奮鬥不幸ニシテ創痕ヲ被リタリト雖正名譽ハ早ク已ニ四方ニ傳播シ知ルト知ラザルト無ク足下ノ武勇ヲ稱賛セサルハナシ足下ノ瀝キタル鮮血ハ國家ノ爲メニ凱旋ノ功ヲ買ヘリ又國家ノ爲メニ將來ノ福祉ヲ増進セリ僕足下ノ爲メニ之ヲ悲マスシテ却テ之ヲ祝ス獨國ノ詩ニ曰ク「苟モ邦國ニ益アル重傷何ソ難カル所アラント」蓋シ刀劍彈傷ハ軍人ノ功勳牌ナリ足下ソレ氣ヲ勵マシ醫藥ヲ施シ療養シテ怠ルコトアルナク速ニ平癒ノ功ヲ奏シ他日國家再ヒ事アルノ日ニ當リ更ニ功名ヲ取ルチ期スヘギナリ某頓首

評 若讀此書不藥而愈

○在營ノ友人ヨリ兵役滿期歸郷者ニ與フ

某君足下生素ヨリ足下ト一面ノ識ナシ撰ハレテ兵士トナリ東京鎮臺ニ來ルニ及ンテ偶然相逢ヒ足下ノ生カ隣郷ナルヲ聞キ喜ンテ自ラ禁セス互ニ

肝膽ヲ吐キ心胸ヲ披キ艱難相救ヒ疾病相扶ケ今ニ至ルマテ二年ニ及フ交情親密音ニ膠漆ノミナラス頃者足下期滿チテ郷ニ歸ラントス生之ヲ聞キ殆ント兄弟ニ別ルノ思アリ嗚呼足下去レハ誰レカ生カ志氣ヲ興ス者ソ誰カ生ノ疾病ヲ扶クル者ソ丈夫ノ涙ハ離別ノ間ニ洒カスト謂フト雖正足下生ノ涕泗漣々タルヲ怪シム勿レ猶記ス足下ト愛宕山ニ登リ酒ヲ一茶亭ニ酌ム足下品灣ノ砲臺ヲ指シ生ニ語リテ曰ク方今天下昇平兵革ヲ見サルモノ十餘年然レ正英露諸國其艦ヲ堅ク其礮ヲ巨ニ我ノ罅隙ヲ伺フモノ久シ一旦事アレハ我輩兵士タル者宜シク劍ト銃トヲ携ヘ敵軍ヲ進撃シ斃レテ後已ムヘシト言猶昨日ノ如シ今將ニ別レントス何レノ日カ再會以テ共ニ志ヲ談スルヲ得ンヤ足下若シ郷ニ歸リ生カ双親ニ邂逅スルアラハ幸ニ生カ壯健軍ニ在リ夙夜職事ヲ勤メ敢テ父母ノ名ヲ辱メサルノ狀ヲ語レ別ニ臨ンテ惆悵ス書ハ意ヲ盡サス乞フ之ヲ諒セヨ

評 有情有色語出肺腑

○軍備擴張ヲ人民ニ勸告ス



古代航海ノ術未タ開ケス船艦ノ具未タ備ラス國ヲ鎮シ疆ヲ守ルノ時ニ方  
 リテハ内亂ニ備フルノ外兵力ヲ用ユルノ要ナカリキ今ハ則チ然ラス航海  
 ノ術大ニ進ミ千里ノ遠キモ一瞬ニ至ルヘシ天外比隣ニ異ナラス外國トノ  
 交際日ニ月ニ頻繁ニ赴ケリ是時ニ方リ陸ニハ隊伍ヲ益シ海ニハ戰艦ヲ備  
 ヘサレハ一朝外國ト事アルキハソレ何チ以テ彼侮ヲ禦カンヤ諸君試ニ眼  
 チ放ツテ宇内ノ形勢ヲ見ヨ英ノ軍兵戰艦ハ若干アリヤ佛ノ軍兵戰艦ハ若  
 干アリヤ獨魯ノ軍兵戰艦ハ若干アリヤ而シテ我邦ノ軍兵戰艦ハ若干アリ  
 ヤ以テ彼ノ英佛獨魯ノ軍兵戰艦ニ敵スルチ得ルヤ否ヤ況ンヤ往年魯國我  
 邦ニ逼リテ千島ヲ以テ唐太ニ易ヘ頃清人將ニ琉球ニ事アラントス詩ニ曰  
 ク彼ノ雪ヲ雨ラスチ相レハ先ツ集ルモノハ維レ霰ナリト易ニ曰ク霜ヲ履  
 メハ堅氷至ルト今霰已ニ集レリ霜已ニ履メリ早ク之レカ所チナサスンハ  
 雨雪氷至ノ禍行々將ニ來ラントス是ニ百テ之ヲ觀レハ我邦今日興スヘキ  
 ノ事業多ラサルニ非ス然レモ軍備擴張ヨリ急ナルモノアランヤ願ミテ民  
 間ノ狀態ヲ見レハ每歲兵士ヲ徵集スルニ方リテ人々進ンテ其任ニ當ラサ

ルノミナラス之ヲ畏懼シ之ヲ嫌惡シ百方免カサルコト是レ求メ海防費ヲ  
 募ルニ方リテ一二人ヲ除クノ外家ニ百萬ノ餘財アルモ敢テ之ヲ獻セス  
 此クノ如クニシテ兵備ノ擴張スルチ欲スルモ得ンヤ兵備已ニ擴張セサレ  
 ハ外侮ヲ備禦シ一國ノ體面ヲ保タント欲スルモ得ラス今日ノ勢チ以テ  
 之ヲ考フレハ三千年來未タ嘗テ他國ノ侮辱ヲ被ラサルノ我神州モ萬一彼カ  
 爲ニ汚辱セラレハ至ルモ亦未タ知ルヘカラス我自由獨立ノ三千餘萬  
 ノ同胞兄弟ヲ率ヒテ外邦ノ奴隸トナルニ至ルモ亦未タ知ルヘカヲサルナ  
 リ夜靜カニ人定リ一燈熒々思フテ此ニ至ル毎ニ百感心頭ニ集マリ歌々ト  
 シ睫ヲ合ハス能ハズ諸君ヨ諸君ハ三千年來未タ嘗テ他國ノ侮辱ヲ被ラサリ  
 シ我神州カ彼ノ爲ニ汚辱ヲ蒙ルチ欲スルガ自由獨立ナル三千餘萬ノ我同  
 胞兄弟ヲ率ヒテ外邦ノ奴隸トナルチ願フカ苟モ之チ欲セサレハ則チ進  
 テ兵役ニ服シ以テ國民ノ義務ヲ盡セ苟モ之チ願ハサレハ則チ有餘ノ財チ  
 擲テ戰艦築造ノ費ニ充テヨ誓ヘヤ諸君島ノヤ諸君

評 慷慨悲憤毛髮倒立

○隊長ヨリ滿期歸郷者ニ與フ

某君足下子ノ隊ニ來ルヤ夙夜職事ニ勉勵シ毫モ怠ラス誓ツテ國家ノ爲メニ身命ヲ擲タントス僕常ニ子ノ志ヲ壯ントシ子ノ他日必ス大ニ爲ス所アルヲ知リ以爲ラク昔人曰ク良將ハ獲易ス勇卒ハ獲難シト子殆ント其人ナリト近頃期滿ヲテ將ニ郷ニ歸ラントス僕之レヲ聞キテ左右ノ手ヲ失フカ如シ僕子カ尋常ノ男子ニ非ルヲ知リ竊ニ子ニ望ム所アリ乃チ別ニ臨ンテ子ニ告クル所アラントス聞ク邊土僻郷王政未タ及ハス人民兵役ヲ畏懼シ千方之ヲ免ル、ナ是レ務ムト子若シ郷ニ歸ラハ明ラカニ兵士ノ國民ノ義務タルヲ論シ之ヲ鼓舞作興シ喜ヒテ役ニ服スルニ至ラシメヨ是レ切ニ望ム所ナリ再會未タ期スヘカラス乞フ自愛セヨ

評 循々教誨不啻骨肉

○滿期歸郷後友人ニ與フ

某君足下足下ト別レシヨリ已ニ一月餘ヲ經タリ雲天萬里臂ヲ把リテ共ニ胸襟ヲ談スルヲ得ス何ソ戀々ノ情ニ堪ヘンヤ僕歸郷後身ハ故山ニ在レモ

心神日夜兵營間ヲ馳騁シ今猶諸君ト起臥ヲ共ニスルノ思アリ昨秋喇叭一響曉ヲ冒シ營ヲ出テ山ヲ跋ミ水ヲ涉リ戰鬪ノ法ヲ演シタルハ其快實ニ忘ルヘカラス近日里中ノ少年ヲ起シ相合シテ一團トナシ近地ヲ歩行シ之ヲシテ尙武ノ氣象ヲ發セシメント欲ス蓋シ亦國家ニ報セント欲スルノ微意ノミ某々君ノ如キハ別ニ書ヲ寄セズ足下面晤ノ時幸ニ僕カ近狀ヲ語レ某白ス

評 兵勇氣象描出活現

○勳章ヲ賜ハリシ人ヲ賀ス

嚮ニ某地ノ役ニ方リ足下衆ニ擢ンテ彈丸雨飛ノ中ニ猛進ヲ連リニ賊軍ヲ斃シ向フ所皆披靡セリト僕之ヲ聞キ足下ノ志ヲ壯トシ足下ノ功ヲ偉トシ人ト語リテ此事ニ至ル毎ニ未ダ嘗テ賛歎セズンハアラス頃新聞紙ヲ閱シ足下ノ此功ニ因リテ勳章ヲ賜ハリタルヲ知ル欣喜何ソ堪ヘン今ヤ亂平キ人定マリ四境無事ナリ然リト雖モ歐洲ノ諸國吞噬ヲ東洋ニ縱マニニセントスルコト久シ不幸ニシテ事アレハ實ニ國家ノ安危存亡ニ關セリ固ヨリ區

々前日内訌ノ比ニアラス軍士タルモノ豈ニ姑息安ヲ偷ムヘケンヤ足下已ニ此榮ヲ蒙レリ敢テ乞フ今ヨリ發奮勉勵益其勇ヲ鼓シ其氣ヲ銳クシ王室ノ爲メ人民ノ爲メ不虞ノ變ニ方リ非常ノ功ヲ立テ國家ノ恩ニ酬ヒンコトヲ聊カ一書ヲ裁シ祝意ヲ表シ且ツ望ム所ヲ述フルコト此クノ如シ某再拜  
評 豈唯稱贊意在獎勵

○教導團ニ入ル者ニ與フ

某月日某君足下僕ノ恒言ニ曰ク男兒ノ男兒タルハ勇武ニ在リ生レテ苟モ軍人ヲサレハ寧ロ死スルニ如カスト頃者聞ク君ハ志ヲ立テ奮然教導團ニ入ルト嗚呼君モ亦日本男兒勇武ノ氣象ニ負カスト云フヘシ堂々タル日本帝國ノ尊ヲ以テスト雖凡亦我輩男兒ヲ待テ以テ國ヲ立ツヘキナリ蓋國トハ土地ニ非ス人物ノ謂ナリ人物トハ何ソヤ勇アリ智アリ以テ其國ヲ維持スルモノナリ詩ニ曰ク濟々タル多士文王以テ興ルト又曰ク糾々タル武夫公侯ノ干城ト我輩軍人タルモノ任亦重シ惟フニ天下今日ノ形勢漸ク將ニ多事ナラントス國ニ敵國外患アルハ固ヨリ國ノ興ル所以ト云ト雖此時俊

傑ノ士尤モ當ニ時勢ニ達シ施爲スル所ナカルヘカラズ足下請フ之ヲ記セヨ書ハ固ヨリ以テ委曲ヲ悉サス請フ他日臂ヲ交ヘ膝ヲ接シテ縱論スルヲ待テ某再拜

評 勸勉極厚以見交情

○陸軍大學ニ入ル者ニ與フ

某再拜曩日芳書ヲ辱クシ吾兄ノ陸軍大學ニ入ルヲ詳ニス欽羨々々蓋シ戰鬪ノ勝利ヲ獲ルハ兵士ノ勇猛ニ在ラスシテ軍ヲ將校ノ智畧ニ在リ抑陸軍大學ハ將校ヲ養成スルノ所ニシテ謂ハユル智畧ヲ研磨スル所ナリ今吾兄ノ勇壯ニシテ兼ヌルニ智畧ノ深沈ヲ以テス一旦事アルノ日馬ヲ鞭チテ任ニ赴カハ其功績果シテ如何ソヤ戰ヘハ必勝ヲ攻ムレバ必取ル會テ其語ヲ聞ク今ハ將ニ吾兄ニ於テ之ヲ觀ントス然レモ趙括ノ兵ヲ論スル其父己ニ之ヲ憂フ山川險夷ノ畫圖ヲ案シ兵馬強弱ノ統計ヲ考ヒ徒ニ坐上ノ空想ニ陷ルガ如キハ吾兄ノ大ニ戒ム可キ所ニシテ余ノ敢テ一言ヲ彈ラサル所ナリ惟フニ短兵接戰突騎馳逐烟塵ノ下轉瞬ノ間克ク勝敗ノ機ヲ決スルハ唯

吾兄ノ胸中ニ在ルノミ故ニ曰ク運用ノ妙ハ一心ニ存スト吾兄察セヨ  
評 意氣慨然得捷可期

○海外派遣軍艦ニ搭載スル者ニ與フ

聞ク某軍艦來ル某日ヲ以テ解纜歐洲ニ渡航セントシ足下亦其航員タリト  
榮ト云ヘキ哉然リト雖モ海外諸國英ノ如キ佛ノ如キ獨魯ノ如キ國富ミ兵  
強ク軍士若干人戰艦若干隻アリ我國ハ則然ラス維新以來始メテ必チ武備  
ニ用井朝廷銳意擴張ニ從事シ日ヲ逐フテ盛大ニ至ルト雖モ未ダ海外諸國ト  
角逐スルヲ得ズ殊ニ海軍ヲ以テ甚シト爲ス彼ノ驕傲ナル動モスレハ我ヲ  
輕侮スト聞ク此時ニ方リ國威ヲ保チ國體ヲ全フセント欲スル亦難シト謂  
ヘキカ孟子曰ク大人ニ説クニ之ヲ藐スト足下乞フ之ヲ以テ心トナシ主將  
ト謀リ外人ト對シ堅忍持重敢テ畏懼スル所ナク彼ヲシテ敬畏尊禮日本人  
勇膽アル此ノ如ク未ダ之ヲ輕侮スヘカラサルノ歎ヲ發セシメヨ某白ス

評 我有是識彼何足懼

○海外留學生ニ與フ

雁魚久シク斷絶ス足下恙ナキヤ生幸ニ眠食常ノ如シ乞フ念トナス勿レ昔  
人曰ク士別レテ三日見サレハ刮目シテ相待ツヘシト然ルニ僕依然タル吳  
下ノ舊阿蒙ノミ豈恥ツルコトナカラシヤ足下夙ニ卓犖不羈ノ材ヲ抱キ深ク  
國家兵備ノ振ハサルヲ歎シ奮然志ヲ決シ官ニ乞フテ萬里ノ波濤ヲ凌キ獨  
國ニ留學シ爾來已ニ二年餘久シカラスシテ業成リ志遂ケ國家ノ爲メニ大  
ニ裨益スル所アラント大竊ニ欣羨ニ堪ヘズ聞ク陸軍ノ備ハルハ歐洲諸邦  
中獨國ヲ推スト未ダ知ラス足下ノ見ル所ヲ以テスレハ軍中ノ規律ハ如何  
兵士操練ノ狀ハ如何武器戰服ノ制ハ如何願フニ必ス我邦人ノ目ヲ驚カシ  
膽ヲ奪フモノアルヘシ研究ノ暇幸ニ其一斑ヲ報セヨ本邦近來益軍事ヲ擴  
張シ西海中國ニ鎮守府ヲ建テ北海道ニ鎮臺ヲ設ケ對馬琉球ニ警備軍ヲ置  
キ以テ不虞ノ變ニ備ヘ又陸軍大學校ノ設アリテ年々良士官ヲ陶冶シ大ニ  
軍務ヲ整頓ス駭々然日ヲ逐テ進步スルヤ明カナリ決シテ昔日ト同一視ス  
ヘキニアラス足下少シク心ヲ慰セヨ時下殘寒未ダ退カ大敢テ乞フ國家ノ  
爲メニ自愛セハ幸甚

評 志氣英々可貫斗牛

○從軍者ニ與フ

頃者何物ノ驕虜カ跋扈跳梁頻リニ邊海ニ出沒ス無狀ノ罪決シテ赦スヲ得  
大政府一々ヒ鳴鼓ノ勞ヲ取ラル、ハ亦已ムヲ得サルナリ聞ク君早ク既ニ  
進發ノ命ヲ受ケテ征討軍ニ從フト何ソ其レ壯ナルヤ此行ハ碧眼紫髯奴ヲ  
テ日本男子ノ伎倆ヲ知ラシムルノ好機ナリトス愉快々々嗚呼今ハ君カ平生  
ノ武勇ヲ試ムルノ時ナリ僕ハ則未タ從軍ノ命ヲ受ケス腕ヲ扼シテ之ヲ待  
ノミ君若シ命ヲ鋒鏑ノ下ニ墜サンカ請フ他日ヲ待テ九泉ノ下ニ談笑セン  
只願クハ膺懲ノ功既ニ成リ王師凱旋シテ君ト一堂ノ中ニ會晤マテ親ク追  
逐撃破ノ狀ヲ聞カン君其レ勉メヨヤ此行必驕虜ノ肝膽ヲ寒カテシメヨ然  
ラサレハ返ルコト莫レ某再拜

評 且戒且勸良友也哉

○凱旋ヲ賀ス

某國ノ西邊ニ寇スルヤ艦艦數隻波ヲ蹴テ來リ兵勇ニシテ器利ナリ砲聲海  
ヲ震ハシ硝烟天ヲ蔽ヒ其勢當ル可ラス是ヲ以テ 主上宸襟ヲ安スルヲ得  
ス百姓其業ヲ營ミ其職ヲ務ムル能ハス足下等身ヲ棄テ國ニ報シ砲丸雨飛  
ノ間毫モ畏ル、所ナク進ンテ敵艦ニ近ツキ晝夜砲撃休マズ敵軍死傷甚タ  
多ク遂ニ其勝ツ可ラサルヲ知テ夜遁ル足下等ノ功實ニ大ナリト云フヘシ足下  
等ノ勳實ニ偉ナリト云フヘシ足下等微リセハ我神州ノ地假令外國ノ蹂躪  
スル所トナラサルモ或ハ其侮辱ヲ被ムランコト未タ知ル可ラサルナリ僕此  
報ニ接シ欣喜歡林手ノ舞ヒ足ノ踏ムヲ知ラサリキ足下凱旋京ニ着スルノ  
日知ラス何レノ時ニアルヤ僕輩將ニ足下ノ爲メニ盛大ノ筵ヲ張り足下ノ  
大功偉勳ヲ發揚シ且國家ノ幸福ヲ祝賀セントス某頓首

評 喜氣溢洩勇壯足レ誇

○人ニ兵役志願ヲ勸ム

歐米各國ハ既ニ義勇兵ノ制アルノミナラス其自ラ請フテ常備軍ニ入ル者  
亦甚多シ就中北米合衆國ノ如キハ徵兵ノ制度アラスシテ國民ノ奮テ軍隊  
ニ編セラレシコト乞フ者毎ニ其定員ヲ超越スルト云フ國ヲ愛シ身ヲ棄ル

ヲ惜シマサルヲ想見スヘシ或者曰ク兵役ハ國民ノ勞力ヲ徒用シテ毫モ生  
 産ニ益ナシト殊ニ知ラス兵役ハ一國ノ平和ヲ維持シ生産ハ平和ニ頼リテ  
 生シ且存スル者ナルヲ又曰兵役ハ巨額ノ經費ヲ抛テ徒ニ國民ノ利益ヲ減  
 削スルモノナリト殊ニ知ラズ兵役ハ一國ノ獨立ヲ維持シ國民ノ利益ハ獨  
 立ニ據リテ生シ且存スル者ナルヲ抑國ニ戰乱ナクシハ兵力ヲ養ハスシテ  
 可ナリ軍備ヲ修メスシテ可ナリ若シ兵備ノ一日モ廢ス可ラサルヲ知ラバ  
 兵役安ソ已ムヲ得ンヤ本邦人民ノ動モスレハ輒チ兵役ヲ畏避スルモノハ  
 實ニ事ノ輕重本末ヲ解セサルノ罪ナリ彼ノ徒ニ辭ヲ設ケテ以テ兵役ヲ論  
 駁スル者ハ吾其何ノ謂ナルヲ知ラズ嗚呼此土ニ生レテ此毛ヲ食フモノ誰  
 カ愛國ノ精神ナカシ苟モ愛國ノ精神ヲ有セハ蓋ソ奮テ役ニ從ハサル愛國  
 ノ壯士ヨ其レ率先シテ軍隊ニ編入セラル、チ乞

評 鼓舞義氣應如此言

○人ニ再役ヲ勸ム

那翁帝曰ク良將ハ得易キモ老兵ハ獲難シト蓋シ老兵ハ軍隊ノ紀律ニ熟練

シ其品行方正ニシテ他兵卒ノ模範ト爲ルモノナレハ下位ニ居リ薄俸ヲ受  
 クト雖軍隊中ニ必要ナルニ至リテハ決シテ諸將校ニ讓ラス愛國ノ志士ト  
 ル者宜シ老兵タルノ勞ヲ辭スヘカラス抑國民兵役ノ義務ヲ了リ各郷里ニ  
 歸リ各自ノ業務ニ就クハ逸ハ則逸ナレト郷里ノ善人タルニ過キス豈ニ屯  
 營ニ止マリ軍隊ノ特典ヲ受ケ老兵タルノ名譽ヲ博スルノ甚愉快ナルニ若  
 シヤ況ヤ今日兵備擴張ノ急務ナル殊ニ心力ヲ致スヘキ秋ナルニ於テチヤ  
 今諸子已ニ軍隊ノ紀律ニ熟練シ品行方正ニシテ他兵卒ノ模範ト爲ルニ足  
 ル是最モ有心ノ士ガ奮發シテ再役ニ就クヲ欲ス可キ所ナリ小官諸子ト  
 死生ヲ共ニスルコト茲ニ三年深ク其離散ヲ惜ム故ニ敢テ勸告スト云爾

評 妙論確實不是虛套

○兵役滿期ノ勞ニ酬ユルヲ人民ニ勸ム

兵士ノ恩大ト謂フヘキ哉上ハ王室ノ干城タリ下ハ人民ノ防衛タリ兵士ナ  
 クシハ王室何ヲ以テ其尊榮ヲ保チ其威嚴ヲ全フシ泰山ノ安キニ居ルヲ得  
 シヤ下民何ヲ以テ腹ヲ鼓シ壤ヲ擊チ熙々皞々其居ニ安シ其業ヲ樂ムヲ得

ソヤ兵士ノ恩ハ大ナルト此ノ如シ苟モ人民タルモノ誰レカ之ヲ戴カサラ  
 ソヤ兵士ノ勞多シト謂フヘキ哉三年ノ久シキ或ハ頭ヲ炎日ノ赫々タルニ  
 曝ラシ或ハ面ヲ寒風ノ凜々タルニ吹カル若シ過ツテ規律ヲ犯スキハ鞭撻  
 連リニ下テ毫モ假借セラレズ其困苦果シテ幾何ソヤ且ヤ若シ一旦不幸ニ  
 シテ國家事アルトキハ身ヲ以テ犧牲トナシ尸山血河ノ中ニ徘徊シ硝煙彈雨  
 ノ間ニ奔走セサルヘカラス兵士ノ勞ハ多キト此ノ如シ苟モ人民タルモノ  
 誰レカ之ヲ思ハサランヤ然ルニ其義務ヲ盡シテ郷ニ歸ルモノヲ見ルニ往  
 々追々トシテ職業ヲ得サルモノアリ是レ其職業ヲナスニ適セサルニアラ  
 ス三年ノ歲月ヲ空過セシヲ以テ其職業ヲ失フタルノミ我輩己ニ其恩ニ感  
 セハ豈之ニ報ヒサルヘケンヤ己ニ其勞ヲ思ハ、豈之ヲ慰メサルヘケンヤ  
 之ニ報ヒ之ヲ慰ムルノ道如何曰ク徒ラニ虚譽贊嘆スルニ止マラス金ヲ積  
 シテ之ニ與ヘ之ヲシテ職務ヲ營マンムルニ在ルノミ聞ク千葉埼玉諸縣ニ  
 ハ歸休兵慰勞會ナルモノアリ滿期歸休兵ニ金ヲ與ヘ其勞ヲ慰スト美舉ト  
 謂フヘシ余輩今之ニ倣ヒ毎月一次戶毎ニ金若干ヲ出サシメ積ンテ之ヲ銀

行ニ托シ滿期歸休兵アル毎ニ各人ニ若干金ヲ與ヘ之ヲシテ常職ニ就カシ  
 メント欲ス全部ノ諸君兵士ノ恩ニ感シ兵士ノ勞ヲ思ハ、希クハ徧ク此舉  
 ニ贊同セラレノヲ敢テ告ク

評 酬恩答美可謂美舉

○教師ニ與フ

某月某日某頓首謹シテ書テ某先生ノ左右ニ奉ス生ヤ多年先生ノ訓導ヲ蒙  
 リ畧兵法戰畧ノ一斑ヲ窺ヒ往年陸軍士官學校ノ寡ニ應シ其生徒トナリ今  
 年秋幸ニ試業ヲ卒ヘ職ニ某鎮臺ニ就クヲ得タリ顧フニ生資性魯鈍先生ノ  
 惇々教誨アルニアラサルヨリハ如何ソ今日アルヲ得ヘキ先生ノ恩啻ニ海  
 山ノミナラス職ニ就キシヨリ以來專ラ憲ヲ兵士ノ撫馭ニ用ヒ稍其心ヲ繫  
 キタルモノ、如シ皆自ラ謂フ戰爭ノ際ニ方リ苦樂死生ヲ共ニスヘシト然  
 レモ學術未ダ博カラス經驗未ダ富マズ竊ニ恐ル其職ヲ辱シメ國家置兵ノ  
 意ニ背キ以テ先生ノ德ヲ累ハサントナ故ニ戰々競々心ヲ盡シ力ヲ致シ夙  
 夜懈ラズ願クハ先生軍事ニ關シテ見ル所アラハ教育ノ餘暇高論ヲ垂レン

評 辭氣懇幅教師意厚

○兵役滿期歸郷シテ被管隊長ニ奉ス

某頓首再拜謹シテ書チ某隊長閣下ニ奉ル時下殘暑未タ退カス閣下起居萬福欣賀曷ソ已マン某某月某日麾下ヲ辭シ某日恙ナク郷里ニ着スルヲ得タリ幸ニ意ヲ安セヨ某資質愚蒙隊ニ入ルヤ百事毫モ通曉スル所ナシ然ルニ閣下之ヲ憐ミ之ヲ愛シ或ハ嚴師トナリ或ハ慈母トナリ惇々教導シテ倦ムコナシ某カ稠人ノ中ニ在リ未タ嘗テ汚辱ヲ蒙ラス國家ニ盡スヘキノ義務ヲ全クシタルハ皆閣下ノ力ニ是レ由レリ其恩意ノ厚キ某何ヲ以テ之ニ報ンヤ今郷ニ還リテ父兄親戚ト閣下ノ事ヲ語ル毎ニ未タ嘗テ感泣セスンハアラズ路遠ク地隔リ麾下ニ伺候シテ其恩ヲ謝スルヲ得ス聊カ一書ヲ裁シ之ヲ左右ニ奉ス

評 至誠事長言溢詞表

○某友ニ與ヘテ其新婚ヲ賀ス

某君ハ余カ竹馬ノ友ナリ今ヤ年己ニ壯學己ニ成リ茲ニ某氏ノ女ヲ聘シ良辰ヲ撰ンテ婚姻ノ式ヲ行フ余モ亦招ニ應ニテ其盛宴ニ列スルヲ得竊ニ惟ミルニ婚儀ハ一生ノ大禮余輩幸ニ此席ニ列ル豈ニ一言ナカルヘケンヤ抑宇宙間ニ存在スル物象其麗億ノミナラスト雖其本ツク所ヲ考フレハ陰陽二氣ノ和合ニ由ラサルハナシ況ンヤ萬物ノ靈ト稱スル人類ニ於テオヤ祖先ノ祀ヲ繼キ一家ノ連綿タル皆之ニ基カスンハアラサルナリ今夕何ノ夕ソ此吉事ニ逢フ華燭室ニ耀キ瑞氣坐ヲ繞リ蘭香以テ鴛鴦ノ衾ヲ暖ムヘク松竹以テ僧老ノ契ヲトスヘシ盛ナル哉宴ヤ聊蕪辭ヲ述ヘテ以テ之ヲ祝ス

評 濃郁艷麗一種文字

○海防費ノ献金ヲ勸ム

海防ノ事一國ノ獨立ヲ維持シ國民ノ安寧ヲ保護スルニ於テ其レ已ムヘカラサル者ナリ試ニ見ヨ本邦ノ地形タル四面皆海一朝外國ト難ヲ構フルニ當テハ敵艦ハ環リテ以テ沼海ヲ圍繞スヘシ苟モ海防未タ完備セサルトキハ一國ノ獨立未タ確信シ難ク國民ノ運命未タ鞏固ナラサルモノアリ豈ニ



寒心セザルベケンヤ藝者 聖天子之ヲ以テ海防費トシテ特ニ内庫ノ金員  
 ナ給セラル、ハ深ク其急要ナルヲ慮ラセ給ヘハナリ其レ天下平安ニシテ  
 于戈ノ虞ナキトキハ固ヨリ海防ノ事ヲ要セス國民富庶ニシテ租税ノ重コ  
 堪ユルトキハ固ヨリ献金ノ舉ヲ要セス然レモ弱肉強食鮮血ヲ以テ文明ヲ  
 裝飾スルハ今日萬國ノ常態タルヲ知覺セハ海防ノ事一日モ忽諸ニ附スル  
 ナ得ズ今日民間ノ事情ヲ審ニスルトキハ家貧ク民苦ミ咨嗟困窮繼ニ以テ  
 一日ヲ經過ス洵ニ危殆ト云ヘシ献セント欲スレモソノ資ナク奉セント欲  
 レモソノ力ナシ果シテ然ラバ海防ノ事業之ヲ國ノ有力者ニ附託スルノ外  
 實ニ他計ナシ献金ノ舉又己ムヲ得ザルニ出ツルナリ抑献金ノ事タルヤ有  
 餘ノ貨財ヲ義捐シテ以テ一國ノ要務ニ供シ上ハ以テ 聖天子ノ軫念ヲ奉  
 体シ下ハ以テ窮民ノ負擔ヲ輕クスル所以ナリ詮スル所ハ國家獨立ノ維持  
 ナ憂慮スル者ハ必海防ノ己ムヘカラサルヲ知ルヘシ海防ノ己ムヘカラザ  
 ルヲ知ル者ハ必献金ノ己ムヘカラサルヲ知ラン苟モ有餘ノ貨財ヲ蓄フル  
 ノ人ハ其レ國ヲ先ニシ察テ後ニセヨ躊躇願望以テ他譏ヲ招クコト勿レ

評・立言得レ體志士傾聽

○入營前友人ニ與フ

某頓首謹テ一書ヲ契兄某君ノ梧下ニ呈ス僕身体檢査ヲ受ケ合格トナリ現  
 役何兵ニ當籤シ入營ノ期近キニ在リ兄ト交誼尤モ親シキヲ以テ聊カ所懷  
 ナ陳シ留別ノ意ヲ表ス古言ニ云ハスヤ身体髮膚ヲ父母ニ受テ敢テ毀傷セ  
 サルハ孝ノ始ナリト又タ云ハスヤ忠臣ヲ求ルハ必ス孝子ノ門ニ於テスト  
 夫レ父母ヨリ受テ得タル身体ヲ無難ニ生長シテ國役ニ供スルハ忠孝兩全  
 ナ得ル者コシテ丈夫ノ本懷何者カ之ニ過キノ然レトモ僕平素必スシモ能  
 ク攝生ヲ謹ミタルニ非ラス又タ危遊險戯モ爲サ、ルニ非ス其無難生長ヲ  
 得タルハ多ク天幸ニ屬シ未ダ人ニ誇ルニ足ラス唯毫モ徵兵忌避ノ念ナク  
 深ク現役當籤ヲ欣フノ誠心ハ天コ對シ愧ナキノミ且ツヤ身体ノミ徒ニ健  
 全ニシテ愛國ノ心ナキハ牛馬ト異ナラズ僕豈之ヲ以テ自ラ甘ンセンヤ必  
 スヤ忠臣ヲ求ルハ孝子ノ門ニ於テスルノ古訓ニ負カス國家有事ノ日ニ當  
 リ父兄朋友ノ面目ヲ辱カシメサルハ矢テ自ラ許ス所ナリ兄幸ニ之ヲ諒セ

ヨ若シ猶ホ尊意ニ不滿アラハ別後ト雖モ郵信寄戒ヲ吝ム莫レ頓首不宜

○郡區内ニ兵事會議所ヲ設置スルヲ勸ム

國ノ兵士アルハ猶獸ニ爪牙アルカ如シ之レナクンハ王室何ヲ以テ尊榮ヲ保チ人民何ヲ以テ職業ニ安スルヲ得ンヤ是レ往古國ヲ守リ港ヲ鎖スノ時ニ在リテ猶且然リ況ヤ今日航海日ニ開ケ交際日ニ盛ナルニ於テチヤ且目ヲ放チテ宇内ノ形勢ヲ見レハ大ニ憂慮ニ堪ヘサルモノアリ英吉利ハ印度ヲ占有シテ其根本ヲ固メ凡ソ亞細亞亞非利加亞米利加ノ諸洲至ル處ニ地ヲ畧シ民ヲ移シ以テ自ラ肥スノ計ヲ爲シ佛蘭西ハ亞非利加ニ於テアルゴリーヲ割有シ印度ニ於テ西貢ヲ割有シ支那ニ於テ安南ヲ割有シ魯西亞ハ我ニ說テ樺太ヲ取リ支那ニ迫リテ黑龍江ノ西三百里ヲ取リ中央亞細亞諸邦ヲ呑噬シテ版圖ニ入ル其他日耳曼ノ如キ澳太利ノ如キ以太利ノ如キ西班牙ノ如キ皆侵畧ヲ以テ事トナサザルハナシ此時ニ方リ軍兵ヲ増シ船艦ヲ造リ以テ防禦ヲ嚴ニセサレハ焉ソ一國ノ体面ヲ維持シ諸外國ト角逐馳騁スルヲ得ンヤ是レ我政府主トシテ徵兵令ヲ改正シ砲臺ヲ築キ船艦ヲ

造リテ怠ラサル所以ナリ然ルニ無知愚蒙ノ徒其意ノ在ル所ヲ知ラズ餘アルノ財産ヲ擲ツテ政府ノ舉ヲ助ケサルノミナラズ兵役年期ニ際シテ百方經營唯之ヲ避クル得サルヲ是レ恐ルニ至ル豈慨歎ニ勝ユヘケンヤ之ヲ救フノ術如何曰ク兵事會議所ヲ縣内ノ各部ニ設ケ下民ヲシテ政府ノ意ヲ知ラシムルニ在ルノミ聞ク某縣某縣ノ如キハ己ニ其設ケアリ我縣獨リ寥々聞ユルナシ豈彼獨其人アリテ我之レ無キカ是余輩カ此舉ヲ企ツル所以ナリ諸君若シ王室ノ尊榮ヲ保チ人民ノ職業ヲ安シ一國ノ体面ヲ維持シ諸外國ト角逐馳騁スルヲ欲セサレハ則チ己ム苟モ之ヲ欲セハ請フ余輩カ此舉ヲ贊同セヨ

評 凜々英氣殆且逼人

○兵役中ノ人ニ與フ

西南ノ亂起リシヨリ足下軍ニ在リ衆ニ擢テ勇戰セルノ狀ハ已ニ各新聞ニ掲載シ我軍隊中皆知ラサルモノナク足下ト未ダ交際セサルモノハ皆僕等ニ向ツテ紹介ヲ求メ誼ヲ結ハント欲ス足下益發奮獎勵シ衆人ノ望ニ副ハ

スノハアルニカラス抑身ヲ以テ國家ノ犧牲ト爲スハ固ヨリ軍人ノ豫メ期スル所假令元ヲ敵人ニ授ケ骨ヲ原野ニ暴フスモ辱ハレテ忠義ノ鬼ト稱セラレハ亦一大快事ナラスヤ是下ヨ必ス勇ヲ鼓シテ敵軍ニ猛進シ寸歩モ退ク所アル勿レ聞ク近時賊勢漸ク挫折スト是レ誠ニ皇國ノ爲メニ賀スベシト雖凡僕等徒ニ長劍ヲ試ム能ハサルノ憾ナキニアラス書ニ臨ンテ勿々意ヲ盡サズ某白ス

評 讀至末段呼快久レ之

記事文

○不忍池競馬ヲ觀ル

競馬ノ戲ハ何ノ爲メニコレヲ行フヤ蓋馬力ヲ較ヘ馬種ヲ擇ヒ馬術ヲ精練セントスルノミ游戲賭博ノ爲ニアラサルナリ頃口有志ノ士力ヲ併セ競馬社ヲ結ヒ不忍池ヲ繞リテ馬埒ヲ圍ミ春秋毎ニ之ヲ行ヒ其勝ヲ獲ルモノニハ金ヲ與ヘテ以テ之ヲ獎勵ス今茲戊子某月某日余一友ト共ニ往テ之ヲ觀

ル池ノ西南ニ觀馬臺アリ東北埒ニ沿ヒ皮閣ヲ作り以テ衆庶ノ觀ニ供ス此日天晴レ風暖カ遊人尙至シ臺ト皮閣ト復タ餘地ナシ坐スルコト良久シ鐸人鐸ヲ振フ馬隸馬ヲ牽キ至ル黒脊ニシテ朱喙ナル者アリ毫毛ニシテ赤鬣ナル者アリ眼光炯々尾垂レテ地ニ至ル者アリ毛ノ白キ者アリ黒キ者アリ黄白雜色ナル者アリ体肥エテ大ナル者アリ瘦セテ小ナル者アリ數タル十有七皆筋骨勁剛眼清ク氣銳ク一翔千里ノ勢アリ騎士モ亦狀貌魁偉軀幹鐵ノ如クソノ勇モ亦尋常ニ超エタル者ナルヘシ著クル所ノ衣帽各色ヲ異ニシテ左手ニ轡ヲ取リ右手ニ鞭ヲ持シ以テ待ツ二監司白馬ニ乘シ紅衣緋裳赤旗ヲ持シテ騁セ至ル旗ヲ掲グル一タヒスレハ衆皆足ヲ齊ヘニタヒスレハ轡ヲ並べニタヒシテ馳ス風奔電逸狀騰龍ノ如ク一瞥己ニ數百歩ノ外ニ在リ始メ後ル者或ハ先ンシ始メ先ンスルモノ或ハ後レ後ル者ハ之ニ超エント欲シ先ンスル者ハ後レサラント欲シ首々相摩シ尾々相搏シ其優劣ヲ知ルナキナリ已ニシテ二騎アリ稍衆ニ先ンシ後騎一喝鞭ヲ揮フ忽チ前騎ヲ超エ相去ルコト纔ニ數歩ニシテ勝ヲ獲タリ埒ノ長サ凡ソ一千一百間纔ニ

四分間ニシテ達セリ其速ナルヲ驚クヘシ衆皆拍手喝采天地ヲ動カス馬又鬣ヲ振フテ長鳴シ衆ニ向ツテ功ヲ誇ル者ノ如シ社賞スルニ金若干ヲ以テセリ余顧テ友ニ謂テ曰ク我邦競馬ノ始マル專ラ遊戲ニアリ今ヲ去ルト一千餘年當時人民質朴四海無事ナリシニ今ハ則チ然ラス北ニ魯アリ清アリ地大ニシテ兵強ク虎視耽々我邊陲ヲ窺フ我苟モ覺アレハ魯必ス北ヲ攻メ清必ス南ニ寇セン其危キト昔時ノ比ニアラス今ニシテ防禦ノ術ヲ講セサレハ祖宗數千年ノ天下焉ソ其介安無事ナルヲ保センヤ印度安南以テ徵スヘシ防禦ノ術如何國ヲ富シ兵ヲ強クスルニアルノミ馬ノ軍ニ資スル亦言ヲ待テヌ是レ此社ノ設ケサルニカラサル所以ナリ方今朝廷方ニ力ヲ武備ニ用非此社ノ設ケ亦裨補スルアレハ則チ他日國富ミ兵強ク甯ニ外寇ヲ防キ國土ヲ保ツノミナラス彼ト角逐シテ雄ヲ爭ハント難シトナサス友曰ク善シト遂ニ記シテ後人ニ示ス

評 極力模寫萬馬皆生

○佛國セダン城ノ大敗

西曆一千八百七十年八月三十一日普軍三十万セダン城ニ逼マル佛軍ノ城ニ在ル者十五万是日普大砲ヲ以テ亂撃ス城兵モ亦大砲ヲ以テ之ニ應撃ス兩軍搏戰甚々苦ム普軍愈奮ヒ聲勢益張り佛軍勢漸ク弱ク氣漸ク衰ヘ連日ノ攻撃援絶ヲ出ツル所ヲ知ラス佛王降ヲ納レテ虜ト爲ル初メ普軍ノセダン城ヲ圍ムヤ兵ノ形半規ノ月ノ如シ漸クニシテ左右相接シテ城ヲ環ルト一匝遂ヒニ滿月ノ狀ヲ成ス久フシテ漸ク逼リ環ノ内ニ東ヌルカ如シ故ニ月形モ亦漸ク縮小スルヲ見ル是ニ於テ直チニセダン城下ニ附グ初メ佛軍城ヲ出テ普軍ヲ逆フ普軍佛ヲ攻ムルヤ卯ヨリ辰ニ至ルマテ砲隊ヲ用非火彈橫飛シ烟塵空ヲ蔽ヒ兩軍相逼マリテ積尸縱橫午ヨリ以後皆鎗隊ヲ用ヒ短兵相接シ連環ノ若ク貫珠ノ若ク兩軍命ヲ百歩ノ外ニ併ス佛軍死傷枕籍隊伍益亂レ鼠竄狼奔ス普軍遂ニラウクトルト連山ニ據ル是山形勢頗ル高クセダン城外最モ形勝ノ地ト爲ス普軍絡繹トシテ山ニ登ル既ニ要害ヲ得タリ山上ノ佛軍盡ク普軍ニ擒セラレ城外ノ四鄉悉ク炸彈ニ燒カレテ火光天ヲ燭ラス佛軍ノ奔走シテ路ニ顛踣スルモノ紛トシテ乱麻ノ如シ未抄佛軍皆

セダン城中ニ入りテ城ニ嬰リテ固守ス是ニ於テ城外ノ高岡低阜トシテ皆  
 普軍ノ大礮ナラサルハナク砲口ノ城ニ向フモノ蜂ノ巢ノ如シ且人ヲ遣リ  
 城下ニ至ラシメ論スニ欸ヲ納ルヲ以テシ限ルニ四時間ヲ以テス曰ク後ル  
 レハ礮ヲ發テ城ヲ攻メント佛王遂ニ降ル此役ヤ普軍ノ佛軍ヲ俘スル八萬  
 七千人上下士官四千八偏裨副將五十八大礮五百五十尊馬萬匹輜重勝テ紀  
 スヘカラス而シテ彼我ノ兵士死スルモノ大約數萬ナリト云フ戰ノ明日人  
 アリ行キテ戰場ヲ觀ル其間肢ヲ折リ体ヲ裂キ腹ヲ剖キ腸ヲ披キ斷鎌顛ヲ  
 貫キ飛丸骨ニ入ルモノ縱橫枕籍殆ント辨スヘカラス遺衣地ニ在リテ血痕  
 肉片ノ其上ニ凝聚シ斷臂截脚ノ泥塗ニ墮テ髮膚耳鼻ノ草木ニ膏スルモノ  
 一トシテ慘目傷心ナラサルハ莫ク殆ント見聞スルニ忍ヒサルナリト野史  
 氏曰ク甚イ哉佛國ノ禍ヤセザンノ一戰堂々タルナボレナン朝廷復遺趾ヲ  
 留メス城地守ラス宗廟保タヌ王虜ト爲リテ后出走シ終ニ城下ノ盟ヲ爲ス  
 ニ至テ止ム何ソ其慘ナルヤ蓋シ普國必勝ノ道三アリ曰理足ルナリ曰氣盛  
 ナルナリ曰己ムコトヲ得スシテ師ヲ起スナリ佛國ニハ必敗ノ道三アリ曰

驕兵ナリ曰憤兵ナリ曰佳兵ナリ嗚呼普ノ勝佛ノ敗又已ムヲ得サルモノア  
 リテ存スルカ禍福未タ曾テ已ヨリ之ヲ求メサルモノナシ古言果シテ信ナ  
 リ抑戎事ハ數萬生靈生死ノ繫ル所一國宗社存亡ノ分ル所ニシテ先王ノ  
 必慎ミテ以テ大事ト爲ス所ナリ後ノ國ヲ治ムル者深ク懼レテ戒メサル可  
 ナヤ

評 叙事詳悉議論痛快

○伏水ノ戰

明治元年正月三日前將軍德川慶喜將ニ京師ニ入り訴フル所アラントス會  
 津桑名ニ藩先鋒ヲリ旗下三兵隊之レニ次ク高松濱田松山諸藩後軍タリ兵  
 凡ソ三萬二道ヨリ分レ進ム薩長ノ兵二千鳥羽伏水ノ二關ヲ扼シ幕兵ノ進  
 ムヲ許サス既ニシテ戰ヲ始ム京軍善ク拒ク兩軍奮戰日暮交モ緩ス此夜京  
 軍鳥羽ノ幕兵ヲ襲ヒ之ヲ走ラス幕兵怒リ明日鳥羽ノ京軍ヲ攻ム京軍殆ソ  
 ト支ヘス會朝廷追討ノ詔アリ錦旗節刀ヲ征討將軍嘉彰親王ニ賜ヒ出テ、  
 戰ヲ督セシム幕兵錦旗ヲ望ミ見テ氣沮ミ勢挫ケ遂ニ敗績ス伏水ノ京軍モ

亦苦戰シ連リニ大砲ヲ發シ僅カニ幕兵ヲ遏ム幕兵火ヲ市街ニ放テ進路ヲ啓カント欲ス却テ焰烟ニ遮ラレテ敗走ス嗚呼伏水ノ一舉吾言フニ忍ヒサルモハアリ砲聲一發徳川氏ノ亡滅既ニ定マル之ヲ人事ノ得失ト謂ハシカ將タ氣化ノ盛衰ト謂ハシカ吾今日ニ於テ之ヲ詳説スルヲ欲セス百世必ス將ニ公論アラントス蓋シ當時幕府衰微ノ甚キト云フト雖凡豈ニ一朝遽ニ薩長ノ下ニ立シヤ只大義ノ定マル所名分ノ存スル所幕府ノ大ヲ以テスルモ猶且手ヲ措ク能ハサルノミ嗚呼名ノ已ムヘカラサルヤ其レ此クハ如シ後ノ臣子タルモノ豈ニ鑑ミサル可ケンヤ

評 叙述不繁大意乃見

○上野ノ戰

戊辰正月伏水ノ役幕兵敗績徳川慶喜逃レテ江戸ニ歸ル官軍長驅シテ將コ江戸ニ至ラントス未タ畿クナラスシテ慶喜水戸ニ遷リ官軍遂ニ江戸城ニ入ル而ルニ徳川氏三百年ノ廟社存亡未タ知ル可ラス旗下慷慨ノ士百人團結シテ彰義隊ト號シ上野ニ據ル官軍之ヲ論シテ解散セシム聽カス是ニ

於テ四月十五日ノ事アリ此役ヤ薩摩肥後因幡ノ兵湯島及ヒ黒門ニ向ヒ佐賀大村佐土原筑後ノ兵本郷ニ向ヒ尾張ノ別隊阿波新發田ノ兵一橋及ヒ水道橋ヲ扼ス其他諸藩ノ兵各要所ヲ守ル賊モ亦兵ヲ分テ防戦ス是日風雨官軍先ツ黒門ヲ攻ム賊兵突出シテ刀槍ヲ揮ヒ健門ス官軍之レカ爲メニ披靡ス賊又砲銃ヲ山玉山ニ列ネ亂射電ノ如ク殺傷甚タ多シ湯島本郷ノ官兵根津谷中團子阪ニ戦ヒ皆利アラヌ午時ニ及テ官軍奮激銃ヲ盡シテ戦フ賊勢漸ク沮ス官軍之ニ乘シテ吶喊シテ突入シ進テ黒門ヲ奪フ賊兵擾乱山玉山ヲ棄テ、中堂ニ據ル官軍之ヲ焚ク焰炎天ヲ覆ヒ賊遂ニ圍ヲ斫リテ遁走ス官軍ノ威是ヨリ振フ昔者莊周曰ク子ノ親ヲ愛スルヤ命ナリ心ニ解クヘカラズ臣ノ君ニ事フルヤ義ナリ適クトシテ君ニ非ルナキナリ是ヲ以テ其親ニ事フルモノハ地ヲ擇ハスシテ之ニ安ス孝ノ至リナリ其君ニ事フルモノハ事ヲ擇ハスシテ之ニ安ス忠ノ盛ナルナリ嗚呼伏水ノ一舉徳川氏ノ亡滅既ニ決ス官軍長驅シテ江戸ニ入リ將軍罪ヲ謝シテ水戸ニ移ルニ及ヒ區々敗殘ノ卒ヲ以テ上野ヲ保テ官軍ヲ卻ケント欲ス是レ螳螂ノ斧ヲ舉テ車

轍ニ當ルカ如キノミ其爲スヘカラサルヤ明カナリ彰義隊諸士等豈ニ自ラ  
之ヲ知ラサランヤ而ルニ悍然敢テ官軍ニ抗スルモノハ他ナシ只一片臣子  
ノ義ヲ盡スヲ知ルノミ宜ナル哉其彰義隊ト稱スルヤ其粉骨碎身事ヲ擇ハ  
スシテ君ニ盡シ國ニ報フルモノ豈ニ壯ナラスヤ吾甚々其志ヲ悲ミ略其事  
ヲ記シテ史氏ノ採擇ヲ俟ツ

評 殷頑據洛理固當然

○若松城ノ降

明治元年九月二十三日會津若松城陥ル蓋シ若松城ハ東北ノ雄鎮ト稱ス官  
軍ノ之ヲ降ス頗ル力ヲ費スト云フ初メ若松城圍ヲ受クルヤ壯兵健卒多ク  
各所ニ派遣セラレ城中男女五千有餘人戰フ可キモノ三千ニ過キス概不皆老  
弱ノミ官軍四面長圍ヲ築キ強兵二萬大砲百餘尊九月十四日ヲ以テ一齊ニ  
之ヲ轟撃ス連戰八日電撃ヲ雷駭キ天地爲メニ震フ然レモ城兵屈セス死ヲ  
決シテ壘壁ニ嬰ル城ノ南方ニ小田山アリ俯シテ城中ヲ瞰ル可シ官軍之ニ  
登リ連リニ大砲ヲ發ツ城兵死傷算ナシ是ヨリ先キ官軍ノ石筵ヲ破リ長驅

シテ若松ヲ襲フヤ事不意ニ出ツ城兵狼狽彈藥ヲ収ムルニ遑アラズ其城外  
ニ貯藏スルモノハ盡ク官軍ニ奪ハル此ニ至リテ力竭キ勢窮シ男女悲憤シ  
テ自刃スルモノ日ニ數十人降議始メテ起ル官軍モ亦之ヲ諭ス二十三日遂  
ニ降ル逸史氏曰ク嗚呼會津征討ノ事吾之ヲ論セスシテ可ナリ只其覆滅ノ  
際國ヲ擧テ城ニ嬰リ忠臣烈女身ヲ殺シテ悔ヒス以テ國ニ盡スモノ古今多ク  
聞カサル所ナリ豈ニ藩政宜キヲ得テ士ヲ養ヒ國ヲ振フノ術他國ノ及フ能  
ハサルモノアリテ存スルカ後ノ國ヲ治ムルモノ宜シク取リテ法ト爲ス可  
シ若シ夫レ忠臣烈女ノ事ハ吾將ニ他日ヲ待テ之ヲ表章セントス

評 孤城死守艱苦可知

○會津藩白虎隊十六士死節ノ記

戊辰ノ役王師東下會津ノ軍石筵ノ守ヲ失フヤ日向内記原田克吉等白虎隊  
ヲ率井戸口原ニ遊戰ス利アラズ隊士十六人皆之ニ死ス是ヨリ先キ城中ノ  
壯兵皆出テ、四疆ヲ拒ク日向等即チ議シテ士人ノ子弟年十五ヨリ十七ニ  
至ル者ヲ選拔シ一隊ヲ團結シテ白虎隊ト稱ス日々戰法ヲ講習ス幾クモナ

シテ進退法ニ適ヒ部伍嚴整大ニ用ニルニ足ル其戰ニ及ヒテヤ日向等ノ  
 麾下ニ屬メ向フ所勇往銳進ス然レモ衆寡敵セス強弱勢ヲ異ニシ戰常ニ利  
 アラス戸口原ノ戰日向遂ニ退キ原田モ亦七人者ト借ニ逃走ス路ヲ失ヒ荆  
 棘ニ陥リ數日ヨシヲ始メテ羽黒山東光寺ニ達スルヲ得ルト云フ此時十六  
 士已ニ日向等ト相失シ黑夜山谷ヲ跋渉シテ飯盛山ニ至レハ則チ天明ク敵  
 兵既ニ瀧澤阪ニ在リ尾撃甚急ニシテ彈丸雨ノ如ク下ル山ニ古洞アリ即チ  
 入リテ之ヲ避ク少頃アリテ出テ、山ニ登リ府城ヲ瞰視スレハ烟焰天ニ漲  
 リ礮聲地ニ震フ十六士相顧ミテ曰ク敵已ニ城ニ入り吾輩飢困復戰フ可ラ  
 ス敵ニ辱シメラレシヨリハ寧ロ一死ヲ以テ國ニ報ユルニ如カスト即チ跪  
 テ會津城ヲ拜シテ曰ク臣カ事畢ルト環坐シ腹ヲ屠リ喉ヲ貫キ以テ死ス實  
 ニ八月二十三日ナリ十六士トハ誰ソ曰ク篠田儀三郎年十七日ク西川勝太  
 郎年十六日ク津川喜代美年十七日ク安達藤三郎年十七日ク野村駒四郎年十  
 七築瀬勝三郎年十七日ク築瀬武作年十七日ク井深繁太郎年十六日ク有賀  
 織之助年十六日ク間瀬源七郎年十七日ク伊藤俊彦年十七日ク林八十治年

十六日ク永瀬雄治年十六日ク鈴木源吉年十七日ク石田利助年十六日ク飯  
 沼貞吉年十六後數日印出某ノ妻山口氏其兒ノ存亡ヲ知ラス徧ク原濕ヲ物  
 色スルモ得ス偶マ飯盛山ヲ過クレハ則死屍枕籍シテ碧血流溢ス因リテ謂  
 ヘラク吾兒ノ遺骸モ又此ニ在ラント屍ヲ檢スルニ見ルコトナシ忽一屍ヲ得  
 タリ年齒其兒ト相若ク近キテ之ヲ視レハ則チ是ナリ氣息奄々猶未タ殊ヘ  
 ス乃チ負ヒ歸リテ病院ニ投シ後遂ニ蘇ス是ヲ飯沼貞吉ト爲ス嗚呼會津城  
 陷落ノ日何ソ其レ勇壯悲慘ナルヤ妙齡ノ子弟鑣ヲ駢ヘテ出テ接戰甚力メ  
 刀折レ丸竭キテ力爲スコト能ハス遂ニ十六士ノ環坐シテ腹ヲ絶チ軀ヲ捐ツ  
 ルニ至ル誠ニ千古未聞ノ美談ト爲ス赤穂四十七士ノ精忠義烈古今内外ノ  
 殷稱シテ措カサル所ナリ然レモ彼ハ老成ノ宿謀ニ出テ、此ハ少年ノ悲憤  
 ニ出ツ乃チ十六士ノ如キハ四十七士ニ干テ光リアリ獨リ飯沼貞吉ノ母ノ  
 搜索スル所ト爲リテ終ニ以テ生ヲ拾フハ又甚タ奇ト聞フヘシ天ノ照鑑未  
 タ善人ヲ盡滅ヒサルナルカ

評 千古美談不可不存



○熊本圍城記

薩摩ノ隆盛等同郷ノ參議内務卿大久保利通ト隙アリソノ徒流言スラク大  
久保參議刺客ヲ遣リ隆盛ヲ殺サントスト兵一萬五千ヲ率井テ發シ聲言ス  
刺客ノ原由ヲ朝廷ニ問フト鹿兒島縣令大山綱良爲メニ書ヲ作り沿道府縣  
及ヒ鎮臺ニ移シ之ヲ報ス熊本鎮臺司令長官谷干城國律ヲ犯スヲ以テソノ書  
ヲ却クケ策ヲ城守ニ決シ士卒ヲ獎勵シ糧糈ヲ儲ヘ嚴ニ守備ヲナス熊本城  
ハ加藤肥州ノ創スル所ニシテ築造法ニ合ナヒ鞏固異常稱シテ重鎮ト爲ス  
加フルニ干城ノ名將ヲ以テシ助クルニ赴々數千ノ武夫ヲ以テス盤石甍ヲ  
ラス然レモ攻ムル者モ亦々薩肥ノ驍猛勇悍ノ士ナルカ故ニ攻禦共ニ激烈  
悲壯ソノ快目ノ擧アルモ亦固ヨリ其所ナリ適マ城中火ヲ失シ樓櫓焚燬シ  
多ク糧食ヲ失フ賊兵已ニ三太郎ノ嶮ヲ越エテ肥後ニ入り進ンテ城ニ薄マ  
ル四面合圍ス城兵邀ヘ戰フ地雷火ヲ發シ賊ヲ斃ス無數是ヨリ連日攻戰シ  
テ互ニ勝敗アリ初メ戰軍以爲ヘラク一鼓シテ城拔クベキナリト而ルニ堅  
守動カス大ニ前見ニ違フ是ヲ以テ兵ヲ分テ進ンテ肥筑ノ境ニ赴カシム小

倉ノ營兵來テ城ヲ援フニ會ス賊兵之ト植木木ノ葉ニ戰フ營兵克ダズ退テ  
南關ヲ守リ兩軍屢此ノ間ニ戰フ城中圍ヲ受クル累旬官軍未ダ赴援スルヲ  
得ズ即チ別ニ兵ヲ派シ海路ヨリ賊背ヲ衝カシメ本營ヲ宇土ニ置ク己ニ  
テ城中糧餉彈藥幾ノド盡ク城將以下皆粥ヲ啜リ或ハ一日兩餐士卒ト艱苦  
ヲ同シ令ヲ下シ輕發シテ兵ヲ損ス勿ラシメ機宜ニ應シテ敵ヲ禦キ持重シ  
テ之ヲ苦シマシム是ヨリ先キ城中人ヲ在外ノ官軍ニ遣ステ數回皆俘斬セ  
ラレ是ニ由テ衆ソノ行使ヲ難カル伍長谷村計介慨然行ノコチ請フ主將ソ  
ノ勇ヲ嘉ミシ之ヲ許ス計介夜ニ乘シ潛カニ城ヲ出テ間關崎嶇シテ吉次越  
ニ至リ遂ニ賊ノ爲メニ捕ヘラル計介之ヲ詒テ殺サレサルヲ得タリ賊柵ニ  
在テ驅使セラル、一數日間ヲ覘ヒ逃レテ援軍ノ營ニ達スルヲ得タリ是ニ  
於テ官軍初メテ城中ノ緊メテ急ナル併セテ賊兵ノ虛實ヲ詳悉シ越テ明日  
計介ヲ以テ先導ト爲シ而シテ進戰ス計介之ニ死ス城中ノ諸將モ又議ヲ決  
シ與少佐ヲシテ一隊兵ヲ率井圍ヲ衝テ宇土ノ營ニ達セシム是ニ於テ前後ノ  
官軍道ヲ分テ兵ヲ進ム賊軍遂ニ風ヲ望ンテ潰走シ熊本城ノ圍始メテ解ク

夫レ此ノ城ノ保ツト保タザルトハ両軍勝敗ノ關スル所而シテ強賊終コ入  
ル得ス智勇俱ニ困シミ爲スヲ無クシテ止ム是ヨリ千劍破ノ城守ヲシテ獨  
リ美ナ千古ニ擅マ、ニセシメズト云

評 簡易明晰文簡意足

○春日山古戰場ヲ過ク

余嘗テ高田ニ遊ヒ途大豆村ヲ過キ一小山下ニ出ツ山甚タ高カラスト雖  
遠クヨリ之ヲ望メハ儼然トシテ一城郭ノ如シ余其古城趾タルヲ疑フテ之  
ヲ故老ニ問フ故老ノ曰ク是レチ春日山トナス故ノ關東管領上杉霜臺公ノ  
據ル所ナリト余之ヲ聞キ想像ノ果シテ差ハサルヲ喜ヒ即乞フテ導チナサ  
シメ其絶巔ニ上ル墻垣殘敗シテ樓櫓モ復タ其形ヲ存セス皆已ニ化シテ寒  
烟豊草トナル踞シテ四顧スレハ一望曠濶物ノ眼前ヲ遮ルモノナシ形勝ノ  
便知ルヘシ己ニシテ大風遽カニ起リ樹ヲ吹キ草ヲ靡カシ颼々焉飄々焉人  
ヲシテ當時千軍萬馬ノ聲カト疑ハシム余是ニ於テ悄然トシテ思ヒ悽然ト  
シテ悲ミ獨リ歎シテ曰ク甚シヒカナ時世ノ變遷スルヤ霜臺公ノ此城ニ據

ルニ方リテヤ兵強ク糧足り向フ所敵ナク北方ニ雄視シ天下公ノ威名ヲ知  
ラサルモノナシ何ソ夫レ盛ナルヤ願フニ公死シテ幾ハクモナク子孫封  
ヲ米澤ニ移サレ公據ル所ノ城墻垣盡ク壞レ樓櫓一空シテ之ヲ修スルモノ  
ナシ何ソ夫レ衰フルヤ稀世ノ英雄公ノ如キモ猶然リ況ンヤ我儕小人ニ於  
テオヤト大息スルモノ之ヲ久フス時ニ夕陽西ニ春キ禽鳥哀鳴亦我悲ミヲ  
助クルモノ、如クナリキ

評 懷古傷今情致可レ想

○白河ノ古戰場ヲ過ク

冷、雨、面、ヲ、吹、キ、凄、風、草、ヲ、搖、カ、シ、天、地、愁、ヘ、テ、山、川、悲、ミ、乾、坤、傷、テ、禽、鳥、哭、ス、目、ヲ、  
擧、ク、レ、ハ、一、望、寂、ト、シ、テ、人、ヲ、見、ス、吾、是、ニ、於、テ、停、回、去、ル、ト、能、ハ、ス、路、傍、ニ、陣、陰、  
々、忽、チ、巨、石、ノ、砧、然、ト、シ、テ、倒、ル、ヲ、見、ル、近、キ、テ、之、ヲ、視、レ、ハ、苔、蒸、シ、文、蝕、シ、僅、  
々、八、九、字、ヲ、知、ル、可、キ、ノ、ミ、即、チ、始、テ、此、地、王、師、劇、戰、ノ、地、ニ、シ、テ、此、石、東、軍、戰、死、  
者、ノ、碑、ナル、ヲ、知、ル、吾、是、ニ、於、テ、益、惆、悵、シ、徘徊、之、ヲ、久、フ、ス、當、時、ノ、形、勢、ヲ、追、懷、  
シ、テ、今、昔、ノ、感、ニ、堪、ヘ、ス、偶、一、樵、父、ノ、過、ク、ル、アリ、呼、テ、之、ニ、問、フ、ニ、當、時、ノ、事、ヲ、

以テス樵父愴然南向手ヲ舉テ曰ク烟中一帶鬱然タルハ王師據ル所ノ松林ナリ其右ヲ指シテ曰ク斷續糸ノ如ク山間水流ヲ見ルハ王師ノ潜伏シテ賊軍ヲ狙撃セシ所ナリ更ニ左ヲ顧ミテ曰ク古社隱見老樹ノ參差タルハ王師ノ疑兵ヲ設クル所ナリ抑此役ヤ王師甚苦戰血ヲ流ス川ノ如ク尸ヲ積ム山ノ如シ然レモ救援存リニ臻リ器械糧食亦匱シカラス賊軍ハ背後ノ山上ニ壁シ翼テ山下ニ張リタルモ衆寡敵セズ糧食繼カス彈丸盡キテ刀槍折レ猶且屈セスシテ空拳ヲ奮フト因テ啼嘘流涕ス余曰ク父復言フ勿レ余誠ニ痛惻ニ堪ヘサルモノアリ因テ之ヲ慰諭シテ曰ク勝敗ハ時ナリ順逆ハ勢ナリ苟モ時遷リ勢變スルキハ其忠モ忠ニ非ス其不忠モ不忠ニ非ス勝者必シモ名聲ヲ全クセス敗者必シモ罪名ヲ負フナシ父復傷ム勿レト遂ニ相揖シテ別ル

評 萬斛憂憤在不言中

○外國兵ヲ敗ルヲ夢ム

茫々タル海洋船艦數十波ヲ凌キ旌旗幾千風ニ飄リ兵士吶喊ノ聲銃砲發彈ノ響ト相雜ハル其勢ノ猛ナル一撃ノ下全國ヲ破碎セント欲スルモノ、如シ洋ノ北一里許リニ在リテ兵士最モ多ク軍勢最モ盛ナルモノハ某國ノ軍艦ナリ之ヲ去ル若干里居テ洋ノ東南ニ占メ隱然某國ノ聲援ヲ爲スモノハ某國ノ軍艦ナリ兩軍ノ間ニ孤立シテ艦少ク兵多カラスト雖モ將智ニ卒勇ニ行止方アリ進退序アリ翩然日章ノ紅旗ヲ掲クルモノハ問ハズシテ我大日本帝國ノ軍艦タルヲ知ル虎兵其前ニ當リ狼軍其後ニ據ル進マント欲スルモ進ム能ハス退カント欲スルモ退ク能ハス岌々乎トシテ其レ危イ哉相持スル半日忽チ敵軍哄轟雷ノ如ク我軍ヲ突キ來ル我軍自若トシテ之ヲ待ツ毫モ驚カス砲撃數時左ニ進レ右ニ避ケ遂ニ敵ノ背後ニ出テ以テ後軍ノ援ヲ絶ツ敵軍逡巡シテ後顧ノ患ヲ懼ル、如シ我軍勢ニ乘シ勇ヲ鼓シ氣ヲ作シ急ニ敵艦ヲ轟撃ス轟聲海ヲ撼カシ硝烟天ヲ蔽フ敵軍大ニ驚キ狼狽遁逃ス我軍益進ム忽チ一丸アリ敵ノ硝庫ニ中タル爆烈ノ聲天地ヲ震動シ敵艦破碎水中ニ沈没ス尋テ一艦又撃破セラレテ轟沈ス餘艦之ヲ見テ急駛シテ雲霞ノ外ニ逃散シ復隻影ヲ見ズ是ハ於テ我軍絶叫歡呼頻リニ祝砲ヲ發ス

既ニシテ四隣寂トシテ聲ナシ半夜ノ寺鐘遙ニ枕邊ニ達ス始メテ前者ノ夢ナルヲ知り蹶然トシテ起テ快ト呼フモノ之ヲ久フス

評 有志必成此是思夢

○小松内府ノ圖ニ題ス

嗚呼是レ小松内府ノ圖ナリ願フニ當時内府モ亦苦中ノ苦ヲ喫スル者ト謂フヘシ君ニ事ント欲セハ此父ヲ如何セン父ニ事ント欲セハ彼君ヲ如何セン斯時ニ當テ父ヲ措キテ君ニ忠スルハ忠臣ハ忍ヒス君ヲ措キテ父ニ孝スルハ孝子ハ能ハス内府タルモノ一進一退噫亦難シ屢父ヲ諫メテ又諫メ泣テ又泣キ遂ニ兵ヲ以テ之ヲ畏スコ至ル而モ復亦漣然涙ナリ經營甚タ力メ憂懼措クコト能ハス晝ノ思フ所ハ夜ノ夢ミル所一夕惡夢ヲ得テ一日モ生クルニ忍ヒス終ニ死ヲ祈リテ死ス嗚呼忍ヒサルノ事ニ遇フテ忍ヒサルノ心アルモノハ其只内府乎内府ノ自ラ以テ不忠不孝ト爲ス所ノモノ今ハ忠ナリ孝ナリ内府ノ忠孝是ニ於テカ爾兩ナカラ全シ精誠ノ感スル所天子之レニ泣テ萬人之ヲ慕フ宜ヘナル哉天下後世圖シテ之ヲ傳ヘ傳ヘテ之ヲ稱スルヤ吾今一言

ヲ題スルニ當テ涕泗頓ニ交ルヲ覺ヘサルナリ

評 奇崛之文は一創體

○烈女竹子畫像ノ記

嗚呼戊辰ノ事世自ラ公論アリ余復何ヲカ言ハシ獨リ臣子ノ命ヲ致シ節ニ殉フモノニ至リテハ之ヲ表章セズンハアルヘカラス烈女竹子ハ會津藩士中野平内ノ女ナリ天性至孝善ク其弟妹ヲ撫ス江戸邸ニ生長シ文學ヲ好ム又赤岡某ニ從ヒ薙刀ノ技ヲ受ク亂起ルニ及ヒテ家ヲ擧ケテ其國ニ還ル石筵ノ守ヲ失フヤ敵軍長驅シテ府城ヲ攻ム城外擾亂藩士ノ子女城中ニ入ルヲ得サルモノ多クハ室ニ火シテ自刃ス竹子時ニ年十九切齒慷慨手ニ薙刀ヲ携ヘ進テ敵軍ヲ斫ル敵軍靡披ス忽チ一丸アリ來リテ其頭ニ中リ遂ニ斃レ死ス遺歌アリ曰ク武夫の猛き心よくらふれぬ數ももならぬ此身なからもト烈ト謂フヘキカナ方今名節地ニ墜チ鬢髻ニシテ碗何ナルモノ猶且義ヲ忘レ生ヲ倫ミ君父ノ難ニ於ケル當ニ秦人ノ肥瘠ヲ見ルカ如キノミナラス況ヤ婦女子タルモノ唯粉黛ヲ凝ラシ艶媚ヲ呈シ容姿ヲ飾ルチ是

レ事トスルノミ忠節義烈竹子ノ如キモノ果シテ幾何カアル抑、聞、問、婦、人、ノ、一、涙、一、言、ハ、能、ク、丈、夫、ヲ、勵、マ、シ、能、ク、丈、夫、ヲ、シ、テ、生、ヲ、舍、テ、義、ヲ、取、ラ、シ、ム、況、ヤ、孱、弱、ノ、身、ヲ、以、テ、率、先、自、ラ、戰、陣、ニ、赴、キ、一、死、國、ニ、報、ヒ、テ、悔、ヒ、ス、其、貞、潔、柔、順、想、見、ス、ヘ、シ、其、唯、貞、潔、柔、順、ナ、リ、故、ニ、能、ク、壯、烈、ノ、學、ニ、出、ツ、百、世、ノ、下、丈、夫、ヲ、シ、テ、慙、愧、奮、慨、之、ヲ、聞、ク、且、肅、然、敬、ヲ、起、サ、シ、ム、其、世、道、人、心、ニ、功、アル、果、シ、テ、如、何、ソ、ヤ、余、曾、テ、會、津、ニ、遊、ヒ、其、事、ヲ、聞、キ、其、風、ヲ、慕、ヒ、以、爲、ラ、ク、之、レ、カ、爲、メ、ニ、車、ヲ、推、ス、ト、雖、辭、セ、サル、所、ナ、リ、ト、頃、ロ、人、アリ、其、遺、像、ヲ、携、ヘ、來、リ、テ、一、言、ヲ、題、セ、シ、ム、披、テ、之、ヲ、見、レ、ハ、容、色、端、麗、ニ、シ、テ、其、中、自、ラ、儼、然、犯、ス、ヘ、カ、ラ、サ、ル、モ、ノ、ア、リ、髮、髮、散、亂、長、袖、ヲ、揭、ケ、薙、刀、ヲ、杖、ソ、キ、眉、目、悄、然、タ、リ、蓋、シ、戰、疲、勢、窮、ノ、狀、ナ、リ、ト、云、フ、抑、竹、子、ノ、烈、ノ、如、キ、ハ、白、虎、隊、十、六、士、ト、並、稱、シ、テ、世、ノ、夙、ニ、以、テ、千、古、ノ、美、談、ト、爲、ス、所、ナ、リ、固、ヨ、リ、余、ノ、贊、揚、ヲ、待、タ、ス、ト、雖、余、特、ニ、之、ヲ、記、ス、ル、モ、ノ、ハ、蓋、シ、平、生、欽、慕、ス、ル、所、ナ、レ、ハ、ナ、リ、某、月、某、日、某、記、ス、

評 明 秦 良 玉 蓋 其 類 歟

○ 那 破 翁 傳 ヲ 讀 ム

明治戊子一月某日夜將ニ二更臥シテ眠ニ就ントス寒威涼々肌ヲ襲ヒ睫ヲ合ハス能ハス衾ヲ推テ起テ復タ燈ヲ挑ケテ佛國ノ史ヲ讀ミ弁翁ノ事ニ至リ當時ヲ想像シ感慨頗ニ生シ意氣勃如タリ偶門ヲ排シテ入ル者アリ出テ、之ヲ迎フレハ友人某子ナリ余之ヲ坐ニ延キ談遂ニ弁翁成敗ノ故ニ及ヒ互ニ眼ヲ張り腕ヲ扼シ大聲疾呼傍人ナキカ如ク夜ノ漸ク闌ナルヲ知ラス忽チ聞ク朔風浙瀝トシテ飛蛾ノ窓ヲ打ツカ如ク寒威戸隙ヨリ洩レ衣襟鐵ノ如シ出テ、戸ヲ排ケハ飛雪霏々滿天一白乃チ顧テ某子ニ謂ツテ曰ク弁翁百萬ノ軍ヲ率井テ魯國ニ敗劔セシキ亦此ノ如クナリシヤト某子答ニス遂ニ書ニテ記トナス

評 利 稔 王 事 能 使 人 壯

○ 冬 夜 其 書 ヲ 讀 ム

寒驟浙瀝トシテ竹聲窓ヲ叩ク燈ヲ剪テ默思ス頃日友人某々ノ翻栞セル兵書數編ヲ得テ几案ノ上ニ堆積ス中ニ制佛芻言アリ之ヲ抽テ一讀ス此書ハ普魯士郡王ワレ德里ツキチャールスノ著ス所ニ係ル郡王ハ日耳曼帝ギヨ

一、第二弟ノ長子ニシテ、一千八百二十八年ニ生レ素ト學テ軍師モルトケ  
 ニ受テ行軍ノ法戰鬪ノ畧悉クソノ師授ヲ得タリト云フ嘗テ噠國ヲ伐テ漠  
 地里ト戰ヒ城ヲ攻メ將ヲ斬リ威信併セ行ハレ頗フル能聲ヲ顯ハス而シテ  
 此書ヲ著ハス佛蘭西國ノ以太利ヲ攻メテ方ニ捷ヲ奏スルノ時ニ作ル書中  
 佛人ノ行軍布陳ノ疎ヲ言ヒソノ短所ヲ洞見ス當時佛王ナポレヲ第三歐  
 洲ニ雄視シ國勢方ニ張り軍鋒銳利前ナシト稱ス而シテ郡王ヨリ之ヲ視レ  
 ハ已ニ然ラザルモノアリ異日普國ノ佛ト戰フヤ大ニ其ノ策ヲ用ヒナボレ  
 ナンヲ降シアルサースロルレーンノ地ヲ割カシメ以テ全勝ヲ制スルモノ  
 ハ郡王ノ此書蓋シ與リテ大功アリ嗚呼郡王謙卓ニシテ見遠ク敵國ノ盛時  
 ニ當テ逆シメ其ノ必敗ヲ料ルソノ智慮殆ント及フ可ラス好ソテ大言ヲ爲  
 シ徒ニ功名ヲ喜ブモノハ軍師兵家ノ常弊ナリ然レモ遂ニ其轍ヲ踏ム者往  
 々之レナキニ非ス郡王此書言トシテ實ナラザルハナク策トシテ要ナラザ  
 ルハナシ是予ノ敬服スル所以ナリ俯仰慷慨自ラ抑スル能ハス戸ヲ推シテ  
 庭ニ出ツレバ滿天ハ星彩爛然トシテ我胸間ニ映射スルヲ覺フ恰モ勳章ノ

煌、耀、タルニ彷彿、タルモノアリ、因テ硯氷ヲ碎キ、凍毫ヲ呵シ、聊カ此記ヲ草ス  
 評 世少知王此能揚之

○觀兵式ノ記

曉、靄全ク歛マリ、旭日天ニ懸ル、操演場一望空豁人ノ心目ヲ爽快ナラシム、時  
 ニ鳴鑼響テ和シ駿馬蹄ヲ齊クシ、鹵簿嚴整 聖駕場ニ臨マセ玉フ陪乘某公  
 供奉某王某官ナリ是ニ於テ指揮長官參謀諸將校等東門ニ奉迎シ諸兵齊列  
 シテ捧銃ノ式ヲ行フ樂隊君ガ代ノ曲ヲ奏スルコト一回場ノ東偏帷幕ヲ環ラ  
 シテ玉座ノ所トナス 天皇少憩ス須臾ニシテ親シク御馬ヲ驅リ場ヲ巡リ  
 給フ親王大臣諸將官及ビ外國諸公使等扈從ス指揮長官先導ヲナシ諸兵隊  
 整列ノ左翼ヨリ次第ニ觀閱シ御馬回テ玉座ノ所ニ復ルニ及ビ指揮官號令  
 ナ下シテ諸隊ヲ中縱隊ニ編制シ順次分列進行セシム坐作進退分合疾徐盡  
 ク節制ニ合フ其ノ間諸樂隊再ビ樂ヲ奏ス聲音洋洋秋風颯トシテ遙カニ青  
 空ニ度リ旗幟影翻テ遠ク城樹ニ映ズ龍顏嚴ナレモ自温意アリ蓋諸兵ノ整  
 齊練磨セル以テ國威ヲ宣揚シ邦家ヲ保衛スルニ足レルヲ嘉ミセララル

可シ儀畢ル。聖駕即チ還御ノ途ニ就ク。此時歐洲某國ノ王子觀光ノ遊ヲ爲シテ我國ニ至ルアリ。天皇王子ト偕ニ與ニ駕シ此ノ觀園ノ舉ヲ爲ス。是交際與國ノ恒禮ナリ。聞ク王子軍務ニ習レ頗フル能聲アリト知ラズ。我國ノ兵備ヲ以テ果シテ如何トナスヤ必ズ鑒識スル所アルベシ抑モ凶器ヲ禮容ニ寄セ殺機ヲ揖遜ノ間ニ藏スルハ古ヨリノ典刑ニシテ今モ亦循テ之ヲ擴ムルモノ歟。軍備ノ虛實交際ノ乖和一國ノ大事皆焉ニ繫ル。觀兵ノ式豈啻ニ觀覽ニ止マルノミナランヤ。

評 直叙不飾反覺其佳

靖國神社ノ祭典

華表雲ニ聳エテ社殿巍然タリ。銅柱空チ衝テ馬埒曠如タリ。加フルニ園池林木ノ勝アルチヤ以テ忠臣ノ魂ヲ招キ義士ノ魄ヲ祀ル可シ。是チ我靖國神社ト爲ス。抑モ伏水鳥羽ノ戰、白川若松ノ役命ヲ損シ躬ヲ斃ス者幾何。佐賀山口ノ變、熊本鹿島ノ亂肝ヲ塗リ腦ヲ碎ク者幾何。外ニシテハ臺灣ノ征討朝鮮ノ擾亂慷慨敵ニ赴キ勇往シテ願リミザル者ハ我帝國ノ臣民能ク大義ノ

在ル所チ審知シ心ヲ王室ニ存スルノ赤誠ヨリ發スルニ非スヤ。古來征戰死スル者何ソ限ランソノ名チ青史ニ載スルハ將校數人ニ過ギザルノミ。我天皇仁慈德澤遺ス所ナク之ヲ愛惜シ之ヲ憐憫シ。步卒ノ微賤ナルモ苟モ王事ニ死スル者ハ悉ク名姓ヲ列記シテ茲ニ藏シ春秋祭祀シテ禮ヲ厚クシ之ヲ獎勵ス。予ヤ帝恩ノ重キチ知リ節義ノ尊キチ慕ヒ欽仰ノ餘延企シテソノ參謁ヲ望ムト雖モ郷國帝京チ距ルノ遠キチ以テ久シク素思ヲ達セス。今ヤ幸ニ男子ノ本職ヲ述ヘントシ身ノ某兵學校ニ在リ茲ニ休暇ノ日ニ際シ毎ニ祠下ニ至リ往時ヲ懷想シテ諸士ノ義烈ニ感シ且御詠ノ歌詞ヲ誦誦シテ自ラ鼓舞スルチ得ク。況ンヤ大祭ノ盛典アルニ逢フ豈欣然カラザルチ得ンヤ。弊帛ノ崇キ享具ノ優ナル姑ク之ヲ置ク。聖天子親カラ龍駕チ枉ケ親王諸臣虔祭至ラザル所ナシ。夫レ人々誰カ死ナカラン死シテ此ノ厚遇ヲ受ク亦男子ノ榮ナラズヤ。競馬ノ術角觝ノ技烟火ノ華麗ナル猿樂ノ都雅ナル皆以テ忠魂義魄ヲ慰ムル所以ナラザルハ無シ。嗚呼無數ノ英豪何チカ爲ス。在天ノ靈猶王室チ擁護保衛シテ天壤ト與ニ窮リ無カラシムルヤ知ルヘキ

評 感慨之辭頗切胸懷

○露營ノ記

郊原風烈シク雪霰時ニ至ル遠村ノ鐘聲斷續トシテ犬吠遞ニ聞エ燎火暗夜  
 ナ照シテ景物凄然タリ岡阜ニ據リテ帳幕ヲ張ルモノヲ本營トナス側ニ騎  
 兵數營ヲ列シ一ノ溪水ニ臨ミテ點々相連ラナルモノハ砲兵隊ナリ而シテ  
 歩兵幾隊工兵輜重ノ諸隊前後星布碁錯シ地ノ形勢ニ據リ兵ノ配置ニ適シ  
 號令明肅ニシテ軍容整然タリ此ノ軍ヲ總轄セルハ某々大將ニシテ營ヲ百  
 戰ヲ閱歷シテ勇ヲ著シ帷幄ニ參畫シテ功ヲ奏セザルハ無シ昔李廣ノ軍ヲ  
 行ルヤ刀斗ヲ擊チテ夜ヲ警メズ程不識ハ軍簿ヲ治メテ天明ニ至リ營中休  
 息ヲ得ズ一世ナボレナンハ睡眠極メテ少ナク統馭甚ダ嚴ニシテ士卒能ク  
 奮ヒウエリントンハ戰場尙常ニ眠ヲ貪ボリテ將校ソノ膽ニ伏スト我將官ハ  
 李廣其人タルカ將ヲ程不識ノ嚴カ或ハナボレナンノ儔ニ非ザレバウエリン  
 トンノ侶ナルベシ此ノ將ヲ以テ此兵ヲ率井中原ヲ横行セハ鹿ノ手ニ落ツ

ル多言ヲ待タザルモノアリ予儕行間ニ在リテ壯心鬱勃トシテ抑スレ止  
 ムル能ハズ姑ク此ノ記ヲ草シテ自ラ奮ヒ自ラ喜ブニ過ギス嗚呼夏ノ  
 日涼堂ニ坐シテ冷水ニ飽ク者ハ人間ノ炎熱ヲ知ラス冬ノ夜深室ニ臥シ暖  
 爐ヲ擁スル者ハ世上ノ苦寒ヲ思ハズ上ニ將官ヨリ下モ兵卒ニ至ル迄風日  
 ニ暴露シテ此ノ艱難ヲ嘗ムルモノハ豈ニ他アランヤ我帝國ノ威嚴ヲ鞏固  
 ニシ日本男兒固有ノ勇武ヲシテ海ノ内外ニ光輝アラシメント欲スルニ在  
 リ天下徒ニ涼ヲ逐ヒ熱ニ奔ルハ人斯ハ中ノ淺深ヲ想察シ軍人ヲ敬愛セズ  
 シテ可ナランヤ

評 漢洋引證確有識見

○曉ヲ冒カシテ敵ヲ襲フ

某ノ一郡遠ク山間ニ介在シ地僻ニシテ民心頑強動モスレハ治化ヲ礙碍ス  
 會マ穀禾登ラス奸民減租ヲ口實トナシ竿ヲ掲ケテ起ル獵夫博徒爭テ之ヲ  
 助ク是ニ於テ賊ニ從フ者日ニ衆シ輾轉蔓延シ四出焚掠ス良民之ニ苦シム  
 官速カニ兵ヲ派シ勦討ス賊民鳥散魚潰數日ヲ出テスニテ投降畧盡ク獨リ



賊帥率其部所ノ一隊ノ衆數十百人亦生路無キヲ知リ心ヲ必死ニ決シ夜ニ乘シテ某ノ山嶺ヲ踰エ潛カニ某ノ地ヲ侵サントス營將預シメ此ニ出ツルヲ知リ數隊ヲ分テ遣シ其ノ走路ヲ遮ギラシム賊兵之ヲ覺ラズ自ラ來テ此ノ線内ニ入ル猶虎豹ノ陷穽ノ中ニ投スルカ如シ此地ヤ四周皆深林密箒濃陰森々鴟梟時ニ叫号ス細作已ニ賊ノ消息ヲ報シテ情形匿ル、所ナシ隊將即チ襲撃ノ計ヲ畫シ兵ヲ分テ二トナシ部署盡ク定マル葍ニ食シ曉霧ヲ冒シテ發ス溪水ノ下流ヲ濟ル徑路崎嶇行步頗フル艱ナリ一軍ハ澗ニ沿フテ潛カニ其ノ背ニ出デ前軍進ンテ賊巢ニ近ツキ喇叭一聲鎗銃齊シク發ス賊兵不意ニ驚キ狼狽爲ス所ヲ知ラズ乱レテ相蹂躪ス或ハ困憊起ツ能ハズ蜂擁蟻奔後山ヲ指シテ逃レントス前隊呐喊シ躡シテ之ヲ蹙ム背後ノ軍機ニ乘シ短兵直接殆ソト羊豕ヲ刳リ雞鶩ヲ捉フルガ如シ餘衆崖ニ滾シ澗ニ赴テ以テ死ス會マ勁風樹間ヲ撼カシ陰霧四散シ朝旭ノ前峯ニ上ルヲ見ル一溪ノ流血赤色轉々相映シテ殷シ魁首擒ニ就ク其餘手ヲ斂メテ降ル者若干人諸兵首虜ヲ隊將ニ效ス隊將捷ヲ本營ニ聞シ頃刻ニシテ事全ク平ラグ

評 兩路合擊軍法可觀

○海軍兵ノ操舟演習ヲ觀ル

陸行ハ馬ニ若クハ無ク水行ハ船ニ若クハナシ海兵ノ船ヲ操ルヤ萬里海面洪濤聲湧キ怒潮雪ヲ翻ヘスノ上ニ在テ操縱進退ソノ意ノ如クナラザルハ無シ實ニ良馭ノ駿馬ニ鞭ヲ曠野ニ馳騁スルニ勝レルモノアリ會マ某港ニ泊ス時ニ軍艦數艘ノ駐繫セルアリ一日ソノ演習ヲ見ル無雙ノ壯觀ナリキ海旭方ニ升リ我日章ノ旗ニ映シ波浪ト共ニ紅ナリ走舸數十隻アリ巨艦ノ前後ヲ擁繞シ軍師船司一聲ノ令ヲ發ス水手數十百人一齊ニ起テ事ニ從フ錨ヲ起スアリ帆ヲ収ムルアリ柁ヲ回スアリ櫂ヲ搖スアリ喧譟セス叫喚セス皆機宜ニ投シ緩急ニ應シ一ノ過失ヲ見ズ以テ其ノ平素操演ノ練熟ヲ徵スルニ足レリ少頃ニシテ風潮方ニ激シ船首濤ヲ破テ進ム聲風雨ノ大ニ至ルカ如シ海面ヲ縱橫シ一艦東ヨリスレハ一艦西ヨリ至リ或ハ左ヨリ或ハ右ヨリシ變化出沒ソノ操縱ノ妙ヲ極ム走舸モ亦之ニ隨テ進退シ恰モ長鯨ノ鬣ヲ起シテ波ヲ凌キ無數ノ海鱗前後ニ游泳踴躍スルモノニ彷彿タリ古

ヨリ其將ノ指揮ヲ稱シテ曰ク臂ノ指ヲ使フガ如シトコノ譬ハ海兵ノ操舟  
ニ於テ最モ緊要ナリトス夫レ馬ニ騎スル者若シ戰敗ニ遭ヘハ猶逃ルベキ  
ノ山林原野アリ舟船ニ至テハ一望渺茫邊界ナク又隻影ヲ匿スニ地ナシ然  
ラバ指臂ノ言海兵ノ演習ニ於テ奉シテ金科玉條トナス可キモノナリ

評 波湧瀾翻可謂奇文

○水雷火ノ布設

深濠以テ之ヲ環ラシ崇堞以テ之ヲ圍ムコレ以テ城トナスカ曰然リ然レモ  
兵士ノ勇猛ト器械ノ精良トアルニ非サレハ猶未タ完ト爲ス可キ能ハス砲臺  
以テ要衝ヲ扼シ堅艦以テ港灣ニ聯ナルコレ以テ國ト爲スカ曰ク然リ然レ  
モ未タ可ナラサルモノアリ近時攻撃防禦ノ術共ニ益精シク一ノ攻具ヲ造  
レハ一ノ防具ヲ製シ殆ント底止スル所ヲ知ラス而シテ其ノ防禦ニ於テハ  
水雷火ヲ以テ最大緊要トナス曰ク魚形曰ク其種類數種ナリ夫レ蒙衝鬪艦  
進ミ攻ムレハ山台海堡巨礮大煩以テ之ヲ防ク是ニ於テヤ甲鏡以テ船ヲ裝  
シ萬彈モ顧リミス縱橫突入ス可シ是ニ於テカ水雷ノ製造創マル水雷ノ要

タルヤ敵船ノ衝路ニ伏藏シ敵ヲシテ覺知セサラシムルニアリ艦船之ニ觸  
ルレバ藥激シ雷發ス轟然一響濤跳ル萬丈ノ半船壁艦ト雖モ片片木葉ト  
同シク海面ニ飛散シテ遂ニ隻影ヲ留メズ空シク浮屍ノ水上ヲ蔽フヲ見ル  
ノミ其猛烈實ニ人間意想ノ及ブ能ハザルモノアリ然レモ近時電氣ノ燈光  
ヲ活用シ艦首預シメ水雷ノ所在ヲ認メ或ハ鋼網ヲ發明シ之ヲ預備スル術  
アリ嗚呼攻禦ノ術益出ヅ、益奇ナリ是ヲ今世紀ノ現狀ナリトス水雷ノ效  
此ノ如ク緊要ナリト雖モ要スルニ布設驅使ソノ宜ヲ得サレバ反テ用ヲ爲  
サス古人云ハスヤ陳シテ而シテ戰フ兵法ノ常運用ノ妙一心ニ存スト布設  
ノ方ニ於テ矩アリ則アリ之ヲ講習スル平素ニアリ然レモ驅使運用ソレ又  
其人ニ存スル歟昔時我朝ノ鳥銃ヲ傳フルヤ皆ソノ防禦ニ苦シム武田氏始  
メテ竹ヲ束テ楯トナシ以テ之ヲ防ク時ニ其利ヲ稱ス水雷ニ於ケルモ其  
理亦然リ鳥銃ノ初傳ニシテ猶竹楯アルカ如ク時ニ應シ地ニ處シ之ヲ防禦  
スルノ術アルベキヤ必セリ併セテ之ヲ平素ニ研究セズンハアル可ラズ

評 不唯贊稱并說防禦

○函館港避暑艦隊操練ヲ觀ル

炎威金ヲ爍シ沙ヲ炒ル書窓熱ニ苦ムモノ累日某青年生北海ニ歸省スルモ  
 ノアリ予モ亦會々暑ヲ避クルノ計ヲナス乃チ相共ニ郵船ニ駕シテ函館ニ  
 赴ク時ニ英國東洋艦隊ノ來リ泊スルアリ一日ソノ操練運轉ヲ觀ル舳艫連  
 絡シ忽チ合シ忽チ離レ縱橫進退意ノ如クナラサルハ無シ疾徐法ニ適シ緩  
 急度アリ英國ノ雄ヲ海上ニ稱スル婦女兒童モ之ヲ知ル素ヨリ嘖々ヲ待タ  
 サルナリ予ハ是ニ於テ我維新ノ時函館ノ海戰ニ感アリ而ルニ同行者年猶  
 弱未タ其ノ詳ヲ知ラス故ニ概畧ヲ話シテ夏晝ノ睡眠ヲ驅ルト云己己ノ歳  
 五月朝議官艦甲鎮春日等ノ八隻ヲ遣シ函館ノ賊ヲ討ス宮古ニ戰ヒ松前ヲ  
 復シ遂ニ進シテ函館ニ向フ賊軍回天蟠龍ノ數艦ヲ發シテ逆ヘ戰フ彼此砲  
 撃シ海水爲メニ湧ク賊艦伴テ洋心ニ退ク官艦覺テス咄嗟之ヲ逐フ是ニ於  
 テ辨天臺ノ彈丸盡ク朝陽艦ニ注ク官艦又賊ノ三艦ヲ轄ス三艦砲臺ト之ニ  
 應シ砲響雷ノ如ク震ヒ山岳崩レント欲ス既ニシテ春日艦ノ彈丸蟠龍ノ蒸  
 氣罐ニ中タリ甲鎮艦ノ發射スル所砲臺ノ兵數十ヲ斃ス賊軍又誤テ千代田

艦ヲ失ヒ獨リ回天ヲ以テ官艦ニ當ル甲鎮又撃テ之ヲ破ル賊即チ之ヲ淺處  
 ニ徙シテ浮堡ニ代ヘ以テ戰フ己ニシテ蟠龍ノ修理ヲ竣ル因テ浮堡砲墩ト  
 相應撃ス官艦蟠龍ト相馳逐シ殆ント之ヲ獲ントス蟠龍ノ船將松岡氏善ク  
 戰フ發スル所ノ榴彈朝陽ノ砲匯ニ中タル黒烟騰上シ爆聲數里ニ震フ全艦  
 淪没ス賊兵望ミ見テ謹呼ス甲鎮春日左右ヨリ進ンテ蟠龍ニ迫ル蟠龍又支  
 フル能ハズ走リテ砲臺ノ下ニ逃レ砲ヲ投シ機關ヲ壞テ火ヲ縱テ陸ニ上ル  
 賊軍盡ク戰艦ヲ失ヒ又爲スト能ハズ五稜郭ヲ嬰守ス殘卒深夜ニ語リ精兵  
 往時ニ異ナリトハ此際ノ實況ヲ詠寫スルノ詩ナリト聞ク是ニ於テ遂ニ出  
 テ順ニ歸シ北海全ク平ラク夫レ函館ノ海戰今ヲ距ルコト二十餘年前ニアリ  
 將卒今日ノ熟練ニ非ス器械今日ノ具備ニ非ス然レモ雄猛奮闘此ノ如キ壯  
 觀アリ且我國戰艦水師ノ創舉ト云モ不可ナキナリ宜ナル哉外人ノ邦人ノ  
 膽勇ヲ稱シテ止マサルコト青年生目張り膽奮ヒ膝ノ進ムヲ覺ニス鉛筆ヲ  
 抽シ予カ話頭ヲ細記シ之ヲ夾袋中ニ投シ去レリ

評 舍彼用我別是一體

○横須賀造船所

潮水汪洋トシテ海灣彎環シ地質硬堅コシテ其底測ル可ラス形勢要害兼不備ハリ地形頗フル佛蘭西領ツローンノ造船所ヨリ彷彿タリ是我東海横須賀ノ誇稱セラル、所以ナリ造船場修船渠製鍊所製鋼所ヨリ府庫廠廩ニ至ル迄悉ク具ハリ新艦ヲ創製シ舊船ヲ補修スル一歲間斷アルコトナシ海外ノ諸船モ皆來テ修治チ此コ請フ其ノ工業ヲ執ルニ至テハ監督能ク至リ百師衆工各其職ニ稱ヒ悉ク規矩ニ合シ準繩ニ應セサルハ無シ金鍊ヲ鍊治シ巨木ヲ截斷スル等靈捷敏活心目ヲ驚カス製造諸術ノ如キハ素ヨリ専門ノ技師ニ非サルヨリハ詳悉ス可ラサルヲ以テ今姑ク之ヲ畧シ此ノ製造所創設ノ來由ヲ記シテ後人ニ告ケントス徳川幕府ノ未既ニ戰艦ヲ外國ニ購ヒ海軍ヲ設クト雖モ損壞ニ遭フ毎コ外人ノ手ヲ借リテ修繕セシメ其工費費ラレヌ勘定奉行小栗上野介材幹アリ以爲ラク國用日ニ非財用給セヌ之ヲ無用ニ費サンヨリハ造船場ヲ創立シ之ヲ不朽ニ給シ後世ニ便スルニ如カスト嘗テ開叟鍋島侯ノ購フ所ノ修船器械ヲ得テ相摸ノ貉ケ谷灣ニ設置ス然レ

兵器小ニシテ大ニ用フルニ足ラス因テ外國奉行栗本鯤等ト謀リ佛蘭西公使ロセツニ就キ遂ニ學士ウヰニ一ヲ聘シ此地ヲ卜定シテ以テ大ニ工事ヲ起ス製鍊所一鑿渠二造船場三是ヲ創築トナス四年ヲ經テ元治紀元ニ至リ始メテ成ル費額凡ソ二百四十萬弗ナリト云是ニ於テ我日本始メテ造船廠アルヲ見ル此時東洋各國支那ノ大ト雖モ猶未ダ此舉アルヲ聞カズ今ハ元治ヲ距ルコト星霜二十五年其間良師ヲ聘シ利器ヲ購ヒ工事益精シク技術愈進ミ駭々盛大ノ域ニ達スルハ豈上野氏幕府方ニ衰フル時ニ當リ此大業ヲ拮据經營セルノ力ニ基カザルニ非ヤ然ルニ其ノ艱苦ノ曲折ニ至テハ或ハ今人ノ想ヒ到ラザル所アラン嗚呼ソノ功勞埋没ニ附スルニ忍ビンヤ殊ニ之ヲ掲出シテ此場ノ因テ興ル所ヲ知ラシメ溪ニ飲テ源ヲ忘レザルハ意ヲ表スト云

評 不遺舊功其意極篤

○輿地全圖ヲ觀ル

角觝ノ力士ヲ觀ルニ或ハ長身昂然力强キ者アリ或ハ軀幹短小伎ニ敏捷ナ